

第4章 朝金第2遺跡の調査

第1節 位置と環境 (第34～36図・写真図版11、14、15、34)

会見町田住地内における調査地は、越敷山（標高226.5m）を主峰とする越敷野台地の西側縁辺部から北方に伸びる支丘陵部に位置する。丘陵は標高約30～65mであり、現況は雑木と針葉樹の二次林による山林である。尾根上には、刈山古墳（第34図12）、田住16号墳（第34図13）が、さらに南方尾根部平坦地には朝金第1遺跡（第34図16）が所在する。西側には、朝鍋川と小松谷川が合流する会見盆地が広がり、その向こうに手間要害山を望む。調査地内においては、会見町教育委員会によって試掘調査が行なわれており、土坑の確認や弥生土器、土師質土器、銅銭の出土などが報告されている（註1）。この丘陵尾根頂部に、田住桶川遺跡、丘陵西側裾部に田住第8遺跡、丘陵東側の谷部傾斜地に朝金第2遺跡が所在する。

この周辺の地質は、中国山地に連なる花崗岩（根雨花崗岩に属する）が基盤岩である。越敷野台地では、その上に鶴田玄武岩が分布する、玄武岩台地である。また、越敷野台地縁辺部は山裾の古崖錐地帯である。本調査地は古崖錐地帯にあたり、地山土は越敷山の噴出物である玄武岩の風化土である。朝金第2遺跡の上方には湧水点があり、丘陵両側裾部には絶えず水が流出し、東側は松尾谷へと流れ松尾池へ、西側は朝鍋川へと注がれる。

「田住」の地名については、明治10年（1877年）に住吉村と石田村が合併して、その1文字ずつをとって改称した地名である。調査地丘陵尾根を境に、東側が「石田村」、西側が「住吉村」となる。住吉村は、享和3年（1803年）に、反原村から改称したものである（註2）。文政6年（1823年）に纏められた『會見郡住吉村地續繪圖面帳』によれば、調査地丘陵西側裾部に数件の家屋があったことが伺われる（註3）。また、字名も丘陵西側は「表屋敷」といい、住居を偲ばせる地名が残っている。

本調査地周辺でも近年、開発事業に伴う発掘調査の件数が増加しており、多数の遺跡の存在が確認されている。調査地より西方500mに位置する田住松尾平遺跡（第34図11、註4）では、落とし穴状遺構40基、弥生時代後期の竪穴住居跡3基、段状遺構10基、貯蔵穴6基が検出され、縄文土器、弥生時代後期の土器、小型仿製鏡などが出土している。南東1.5kmに位置する朝金小チャ遺跡（第34図23、註5）では、弥生時代の竪穴住居跡、段状遺構、掘立柱建物跡、箱式石棺を主体部とする古墳などが検出された。その中で、朝金小チャ001号墳丘墓（第34図24）は、弥生時代後期末葉と推定される。一辺の長さは貼石列と溝を含め15m、高さは約2.5mを計り、墳丘上には木棺墓2基のほか土壙墓4基があり、その墓上には土器の供献が確認された。南方500mに位置する口朝金遺跡（第34図20、註6）では、古墳時代前期の水田遺構や、縄文時代後期～晩期を中心とする多量の土器片や石器類が検出されている。南西約1kmに位置する浅井土居敷遺跡（第34図48、註7）では、弥生時代から古墳時代の集落・墳墓が営まれた後、中世に大規模な造成がなされていることが確認されており、鎌倉時代の掘立柱建物跡や青磁、白磁、備前焼の播鉢が検出されている。西方1.5kmに位置する手間要害（第3図34、註8）は、多くの郭群をもって構成されており、手間山・膳棚山はもちろんのこと、峯山の方向にも伸びる可能性のある壮大な規模の中世山城であることが確認された。城主の名はもとより石高など不詳の点が多いが、山名氏の一族かその家臣のいた砦であろうとされている。大永4年（1524年）5月、出雲の尼子経久が伯耆国に進攻したいわゆる「大永の五月崩れ」の際に落城し、その後永禄7年（1564年）、尾高城主杉原盛重はその臣菖蒲佐馬允ら300人にこの砦を守らせていたと『陰徳太平記』にある。尼子義久が毛利元就に敗れ、吉川氏の因幡、伯耆支配後の動向については定かでない。発掘調査において、掘立柱建物跡のほか、柵列、土塁・虎口様の施設が検出された。そして、16世紀代を中心とする青磁・白磁のほか、石臼・鉄釘・刀子・銅器など多量の遺物も検出されている。

朝金第2遺跡は、会見町田住字上桶川に所在する（石田村側）。しかしながら、「田住」の地名を冠していないのは、調査地上方に所在する、弥生時代中期～古墳時代前期の土器散布地である朝金第1遺跡（第34図16）に隣接しているため、一連の遺跡として認知されているからである。遺跡は、丘陵傾斜地谷裾部に位置し、調査地の眼前には、南北に松尾谷が伸びている。現況の地目は雑木による山林であるが、石垣を伴った段状地形が見られ

るほか、上方からの転落と見られる大礫が点在する。調査区内の標高は、現況で54.0～63.0m、検出面で53.5～62.5mである。

第2節 調査の経過と方法 (第43、44、45図)

調査は、平成8年4月より着手、以後7月まで実施した。調査地内は、事前に会見町教育委員会によって試掘調査が行われており、3本のトレンチ (T11・12・13) からピット、土師質土器、弥生中期から後期にかけての土器などが検出されている (註1)。これら遺構、遺物の検出状況と、現地地形の様子から判断して、調査範囲を決定した。調査前の地形を測量し、試掘トレンチの土層断面を勘案しながら重機により表土を除去、その後10m画グリッドをなす測量用基準杭を南北軸に合わせて設定した。

当調査地においては、現況で石垣による段状の地形が確認できたが、その石垣の性格が当初問題となった。田畑か建物に伴う施設の可能性が想定された。土層断面によれば、造成面が傾斜面であること、石垣の造成が表土下層の堆積より時期的に新しいこと、表土下層上面において、表土を埋土とする遺構の存在が確認できなかったことなどから、田畑の開墾に伴い造成されたものと判断した。表土層中から近代を遡らない遺物の出土をみたため、石垣を伴う段状施設については、調査対象外とした。

表土除去後、土層断面観察用にベルトを残し、精査を進めながら掘り下げていくうち、調査地中央部に、弥生時代中期～後期、奈良時代から中近世にかけての土器を含む、黒茶褐色粘質土の遺物包含層を確認し、多量の遺物の出土をみた。調査地中央部は、凹形の地形をなしており、出土遺物もかなりの時期差が見られ、巨礫のすき間から出土してくること、概して遺物の大半が小片で角が取れていることから、本遺跡谷上方からの転落遺物であると判断した。出土した遺物は、必要に応じて出土状況の写真撮影、実測、取上げを行なった。

遺構の検出にあたっては、地山層の堆積状況が複雑で、箇所によりベースとすべき地盤が異なる状況が現れた。

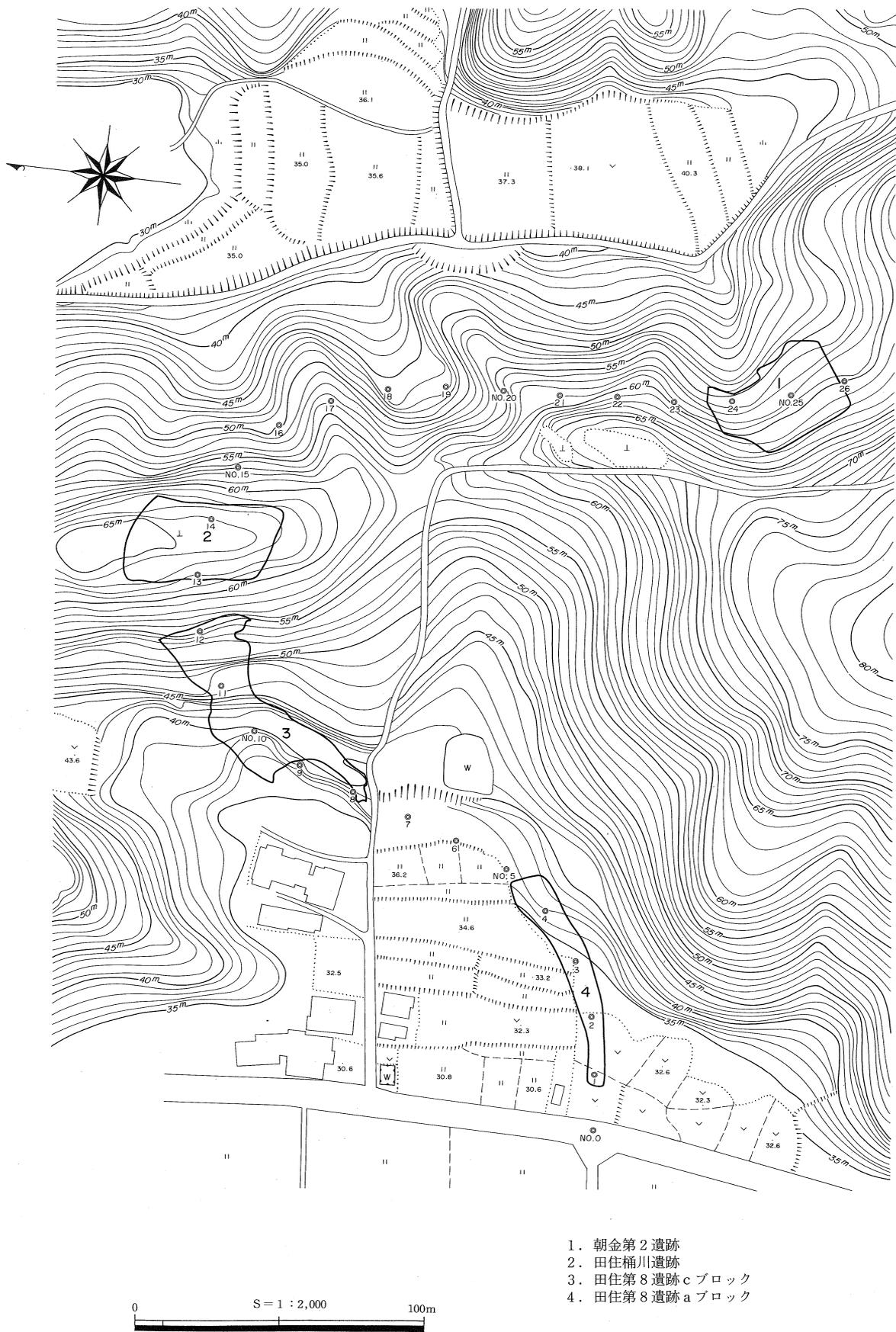
A 朝金第2遺跡 (0306)	B 田住桶川遺跡 (0446)	C 田住第8遺跡 (0365)
1 田住第1遺跡 (0358)	2 田住第2遺跡 (0359)	3 田住第3遺跡 (0360)
4 田住4遺跡 (0361)	5 田住第5遺跡 (0362)	6 梅が森遺跡 (0367)
7 田住01～06号墳、09号墳 (0341～0346)	8 田住14号墳 (0354)	9 田住15号墳 (0355)
10 田住滝山遺跡 (0448)	11 田住松尾平遺跡 (0447)	12 刈山古墳 (0357)
13 田住16号墳 (0356)	14 田住第6遺跡 (0363)	15 田住第7遺跡 (0364)
16 朝金第1遺跡 (0305)	17 朝金30号墳 (0303)	18 荻名01号墳 (0331)
19 荻名第4遺跡 (0338)	20 口朝金遺跡 (0308)	21 朝金第3遺跡 (0307)
22 朝金仲田上横縄遺跡 (0449)	23 朝金小チャ遺跡 (0450)	24 朝金小チャ001号墳丘墓 (0451)
25 朝金030号墳 (0452)	26 朝金01～06号墳、13～24号墳 (0274～0279、0286～0297)	
27 朝金07号墳 (0280)	28 朝金08号墳 (0281)	29 朝金09号墳 (0282)
30 朝金10号墳 (0283)	31 朝金11号墳 (0284)	32 朝金12号墳 (0285)
33 朝金26号墳 (0299)	34 朝金27号墳 (0300)	35 朝金28号墳 (0301)
36 朝金29号墳 (0302)	37 天王原遺跡 (0309)	38 市山遺跡 (0318)
39 市山第2遺跡 (0319)	40 市山第3遺跡 (0320)	41 井上01～11号墳 (0197～0207)
42 高姫第1遺跡 (0187)	43 高姫第2遺跡 (0188)	44 高姫第7遺跡 (0193)
45 高姫03号墳 (0164)	46 高姫14号墳 (0175)	47 高姫15号墳 (0176)
48 浅井土居敷遺跡 (0156)		

第34図 周辺遺跡分布図遺跡名対照表

() は、鳥取県埋蔵文化財センター編集の会見町内遺跡分布図の遺跡番号



第34図 周辺遺跡分布図



1. 朝金第2遺跡
2. 田住桶川遺跡
3. 田住第8遺跡cブロック
4. 田住第8遺跡aブロック

第35図 田住地区調査地周辺調査前地形実測図

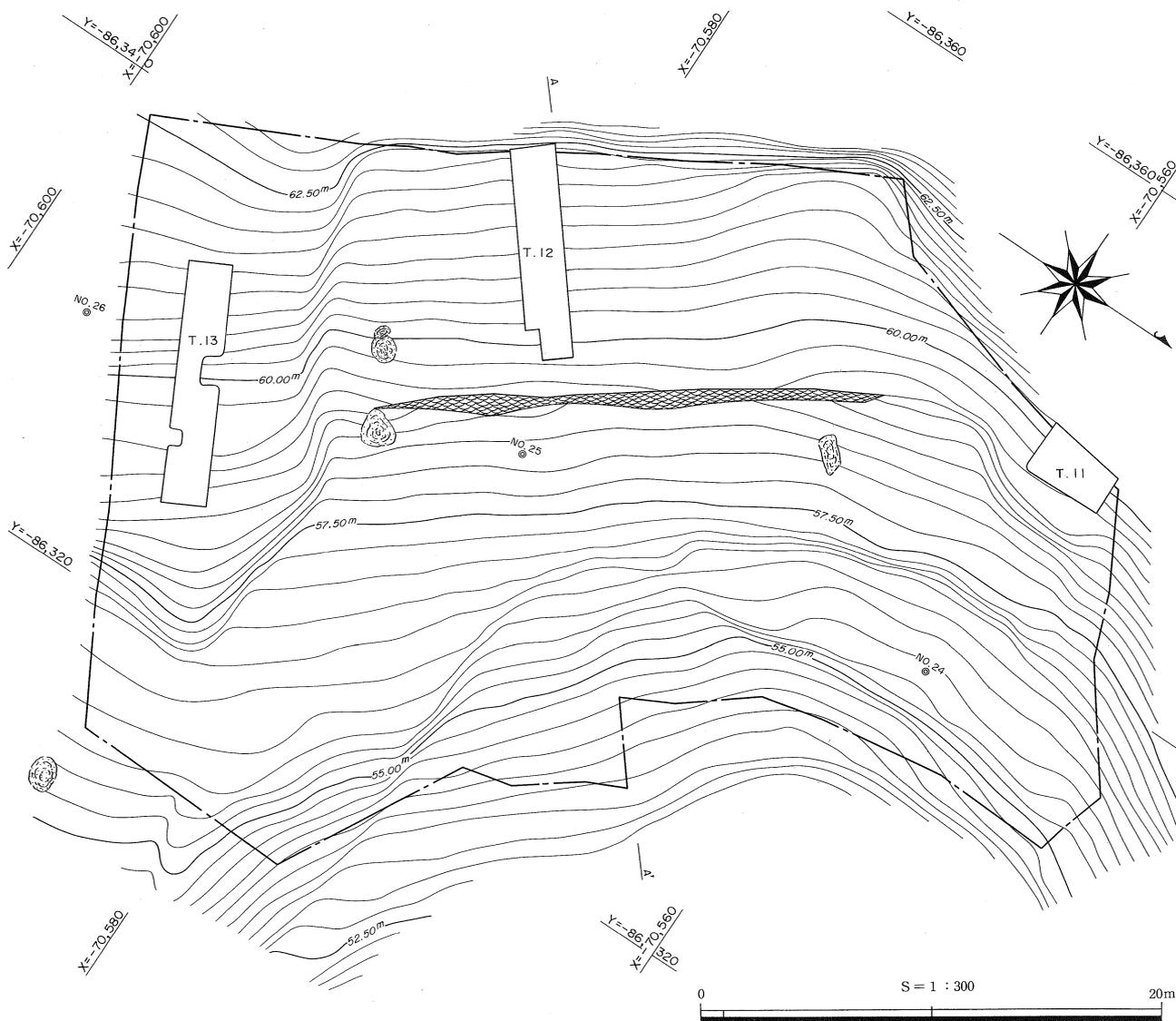
精査を重ねて行なうが、黒色系の土色のため判別は容易でなく、中間層での遺構検出には至らなかったため、地山面を遺構検出面とし、土質、土色の変化する落ち込みを追及した。検出された遺構については、それぞれ写真撮影、実測を行ない、調査区全体については、調査後の地形を測量し、全体写真撮影を行なった。

調査地には、巨礫が散在し、掘り下げには困難を極め、また谷地形のため湧水が絶えず流れ出し、その対応にも苦慮した。最終的な調査面積は、1,126㎡であった。

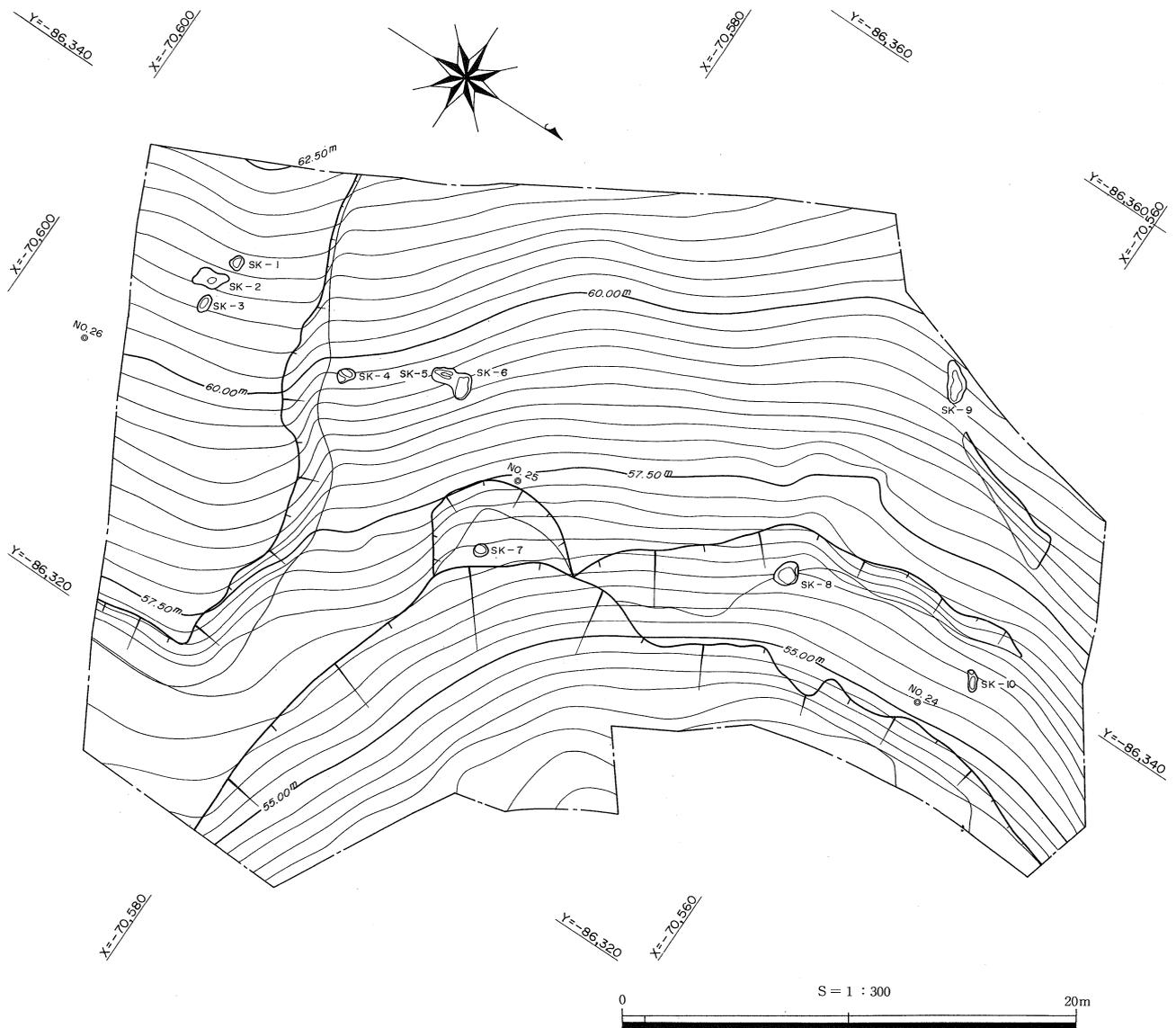
第3節 遺構と遺物 (第37～42図・写真図版11～13、46)

遺構は、土坑を10基 (SK-1～SK-10) 検出した。標高約55m～約61mに位置し、調査地全体に散在する。遺構の時期、性格は判然としないが、埋土中から弥生土器片を出土した土坑1基 (SK-7)、土師質土器 (第42図164) を出土した土坑1基 (SK-8) を数える。また、調査地中央部は凹形の地形をなし、ここに多量の遺物を包蔵する包含層 (第38図、⑥-A層) を確認した。出土状況はプライマリーな状態を示さず、上方からの流入によるものと思われる。それぞれの遺構についての概要は、別頁の遺構一覧表に示した。

出土遺物について記述する。100は、縄文土器である。晩期後半の突帯文土器で、刻みが入った突帯が口縁端部にめぐる。101～135は、弥生土器である。101～111は中期、112～122、126～130は後期に比定される。101～108は中期中葉の壺で、口縁端部に浮文や斜格子文を施し、口縁下の頸部外面に突帯を貼り付ける。口縁端部や突帯

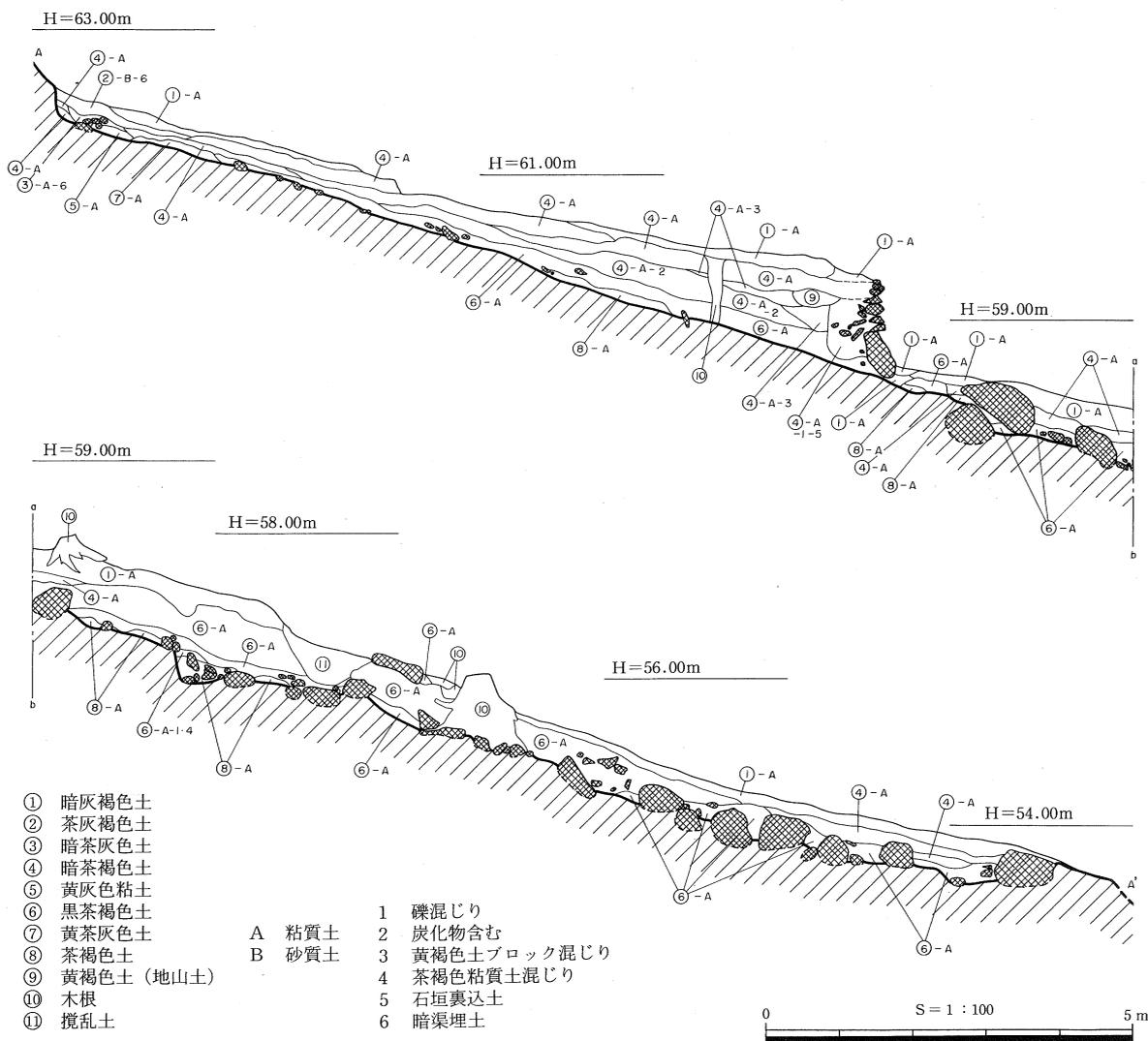


第36図 調査地調査前地形実測図



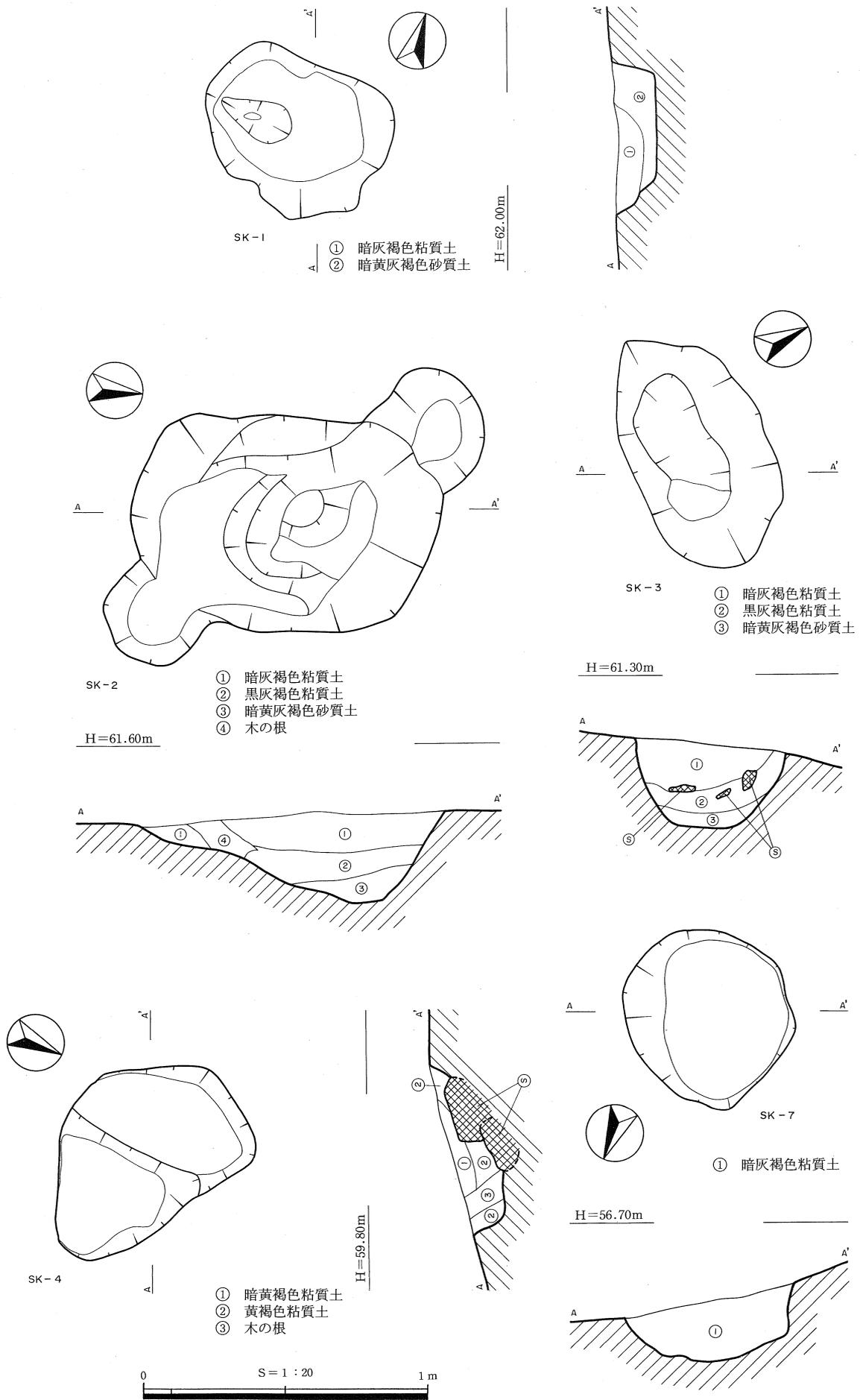
第37図 全体遺構実測図

に刻みや刺突を入れるものもある。胴部に近い頸部外面には、平行沈線文や波状文、格子目文があしらわれている。109は中期中葉の高坏で、内外面ミガキ調整である。110は、中期後葉の器台の脚部か。111は、口縁部に凹線を持ち、頸部に指頭圧痕を施す突帯を貼り付けた中期後葉の甕である。112～121は後期の甕である。112～117は、口縁部があまり発達せず、端部が下垂傾向にある。112～121は、口縁部の平行線が凹線であり、その間隔も広い。118と120は口縁部が発達しており、やや新しい特徴を持つものの、これらの甕は後期後半でも比較的古い段階に相当するものと思われる。122は後期後半の壺である。4条の細かい平行線が口縁部に施される。126～130は後期の器台で、126は受部、127～130は脚台部である。129のみ、平行線がみられる。123～125、131は時期不詳だが、123は壺の頸部と思われる、124は器形不明だが、4条の凹線が外面に施されている。125は器台、高坏等の脚部か。131は蓋と思われる。つまみ部分は中空で、端部がやや外反し、つまみ易くなっている。全体にいびつな形状で、器面調整もあまり丁寧とはいえない。132～135は底部である。134は上げ底である。136、137は土師器の甕である。138～143は土師質土器で、138～140は椀、141～143は皿である。138は高台の端部が変形していびつになっている。144～148は須恵器である。144は肩部に溝状の突帯を1条貼り付けるもので、平安期の有耳壺と思われる。接合しないが145と同一個体と思われ、胴部内面は放射状のタタキが施される。146～148は甕の胴部片で、146は外面平行タタキ、内面同心円タタキ、147は外面格子目タタキ、内面ナデ、148は外面平行タ

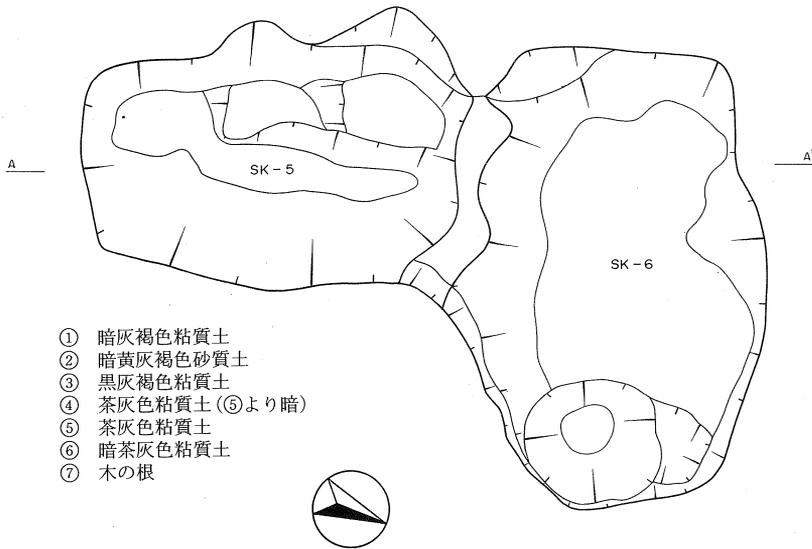


第38図 調査地土層断面実測図

タキで、内面放射状タキである。144、145、148の放射状タキを有する3点については、蛍光X線による胎土分析を行った。148については産地不詳であったが、144、145はいずれも、鳥根県松江市の大井窯跡群出土須恵器の分布領域に近いことが判明した。149は焼締陶器の播鉢で、備前焼のIVA期に相当するものと思われる。150は龍泉窯系の青磁で、碗の高台付き底部片である。見込み部に蓮をあしらひ、花卉が「月」の文字を戴く構図になっている。13世紀頃と思われる。151は白磁碗で、乳灰白色の釉がかかる。玉縁口縁であり、13世紀代に比定される。152～154、156は陶器で、152、154は共に内面に淡緑灰色の釉がかかる。152は19世紀代に比定され、154は17世紀前半の唐津産である。153、156は鉄釉のかかる灯明皿で、19世紀代に比定される。155、157～161は肥前系の磁器である。155、160、161は皿、157は筒形碗、158、159は瓶である。155は18世紀後半の白磁、157は19世紀前半、161は18世紀後半～19世紀前半に比定され、160は18世紀代の伊万里産で陶胎染付である。162は磨製石斧の破片で、閃緑岩製である。163は石塔の竿部で、正面に「菊芳恵香童女」とあり、右側面に「弘化二年(1845年)巳九月十七日 右門」と刻まれている。会見町御内谷所在の雲光寺に、この石塔に係る過去帳が保存されており、「住吉村政右エ門ノ娘」と記録されている。石塔側面に記された「右門」とは「政右エ門」を指し、この石塔の施主が被葬者の父親であったことを示している(註9)。住吉村は石田村と合併し、後に田住と称されるようになる(註2)。

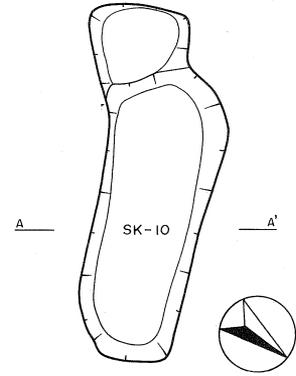
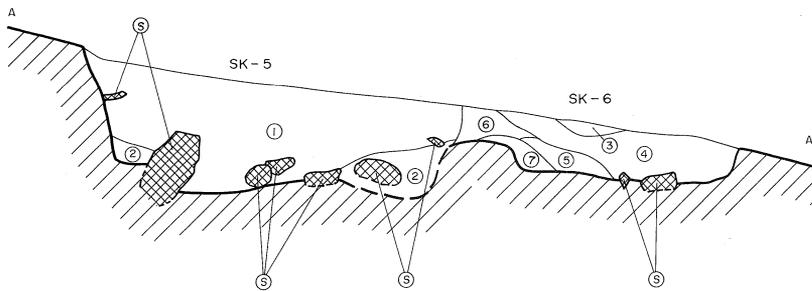


第39図 SK-1~4、7実測図



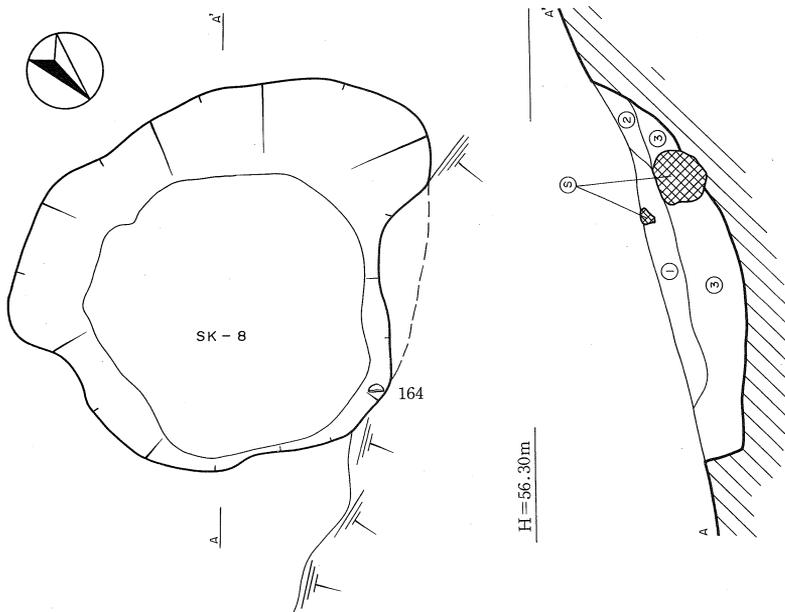
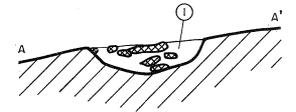
- ① 暗灰褐色粘質土
- ② 暗黄灰褐色砂質土
- ③ 黒灰褐色粘質土
- ④ 茶灰色粘質土 (⑤より暗)
- ⑤ 茶灰色粘質土
- ⑥ 暗茶灰色粘質土
- ⑦ 木の根

H=58.70m

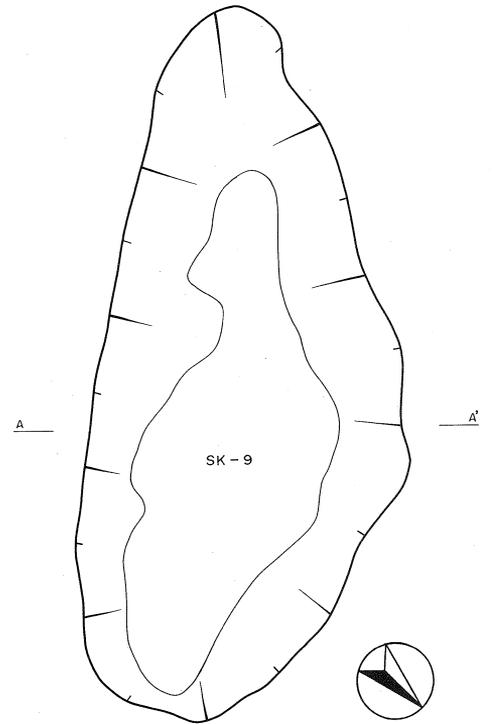
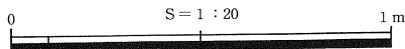


H=55.90m

- ① 暗茶褐色土 (炭混じり、板状礫含)

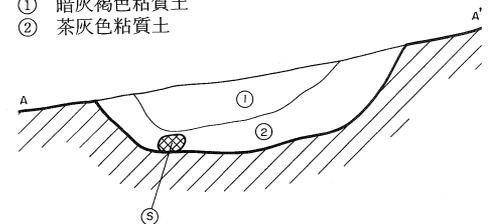


- ① 暗灰褐色粘質土 (③より黒く固くしまる)
- ② 黒灰褐色粘質土
- ③ 暗灰褐色粘質土

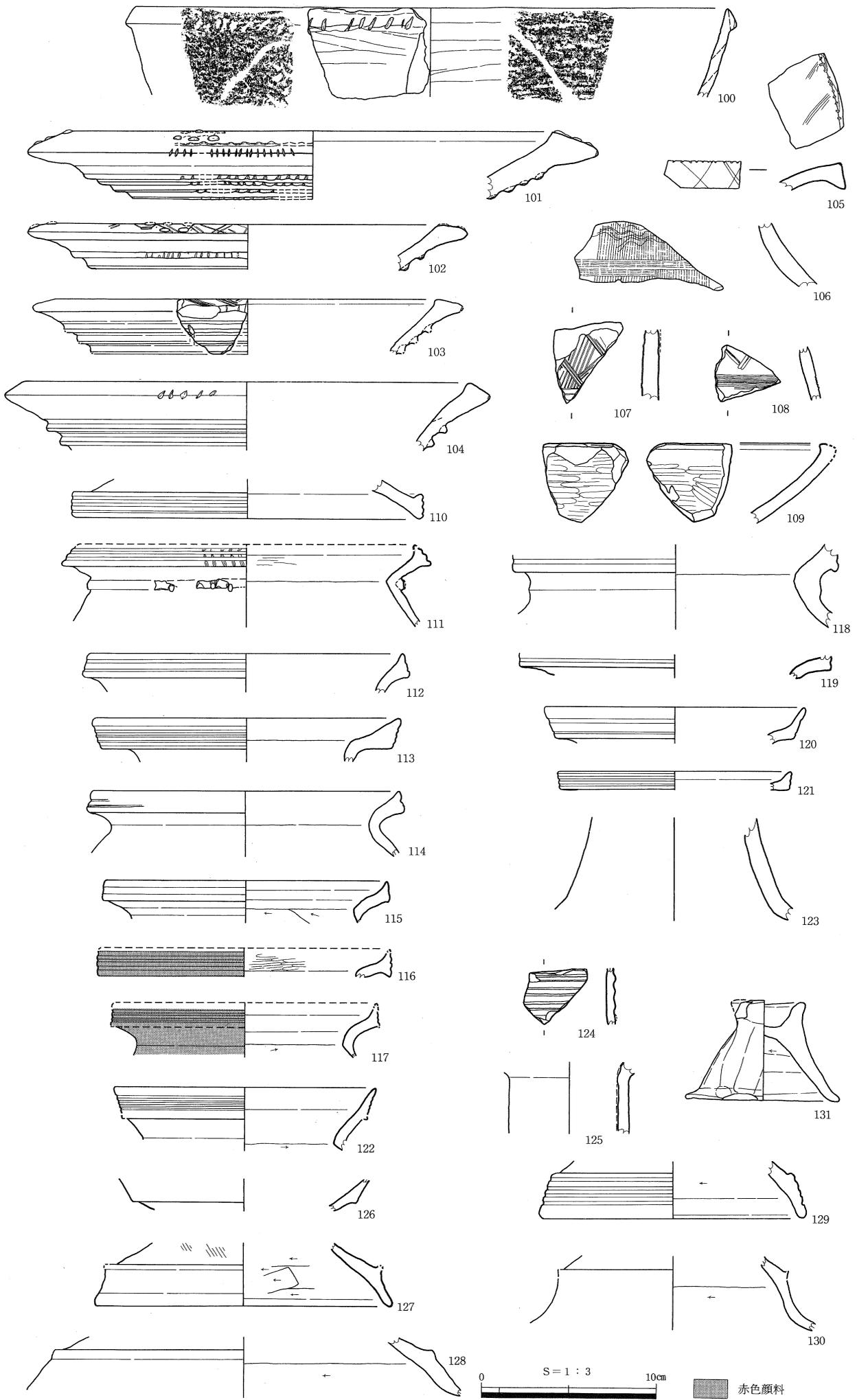


H=59.70m

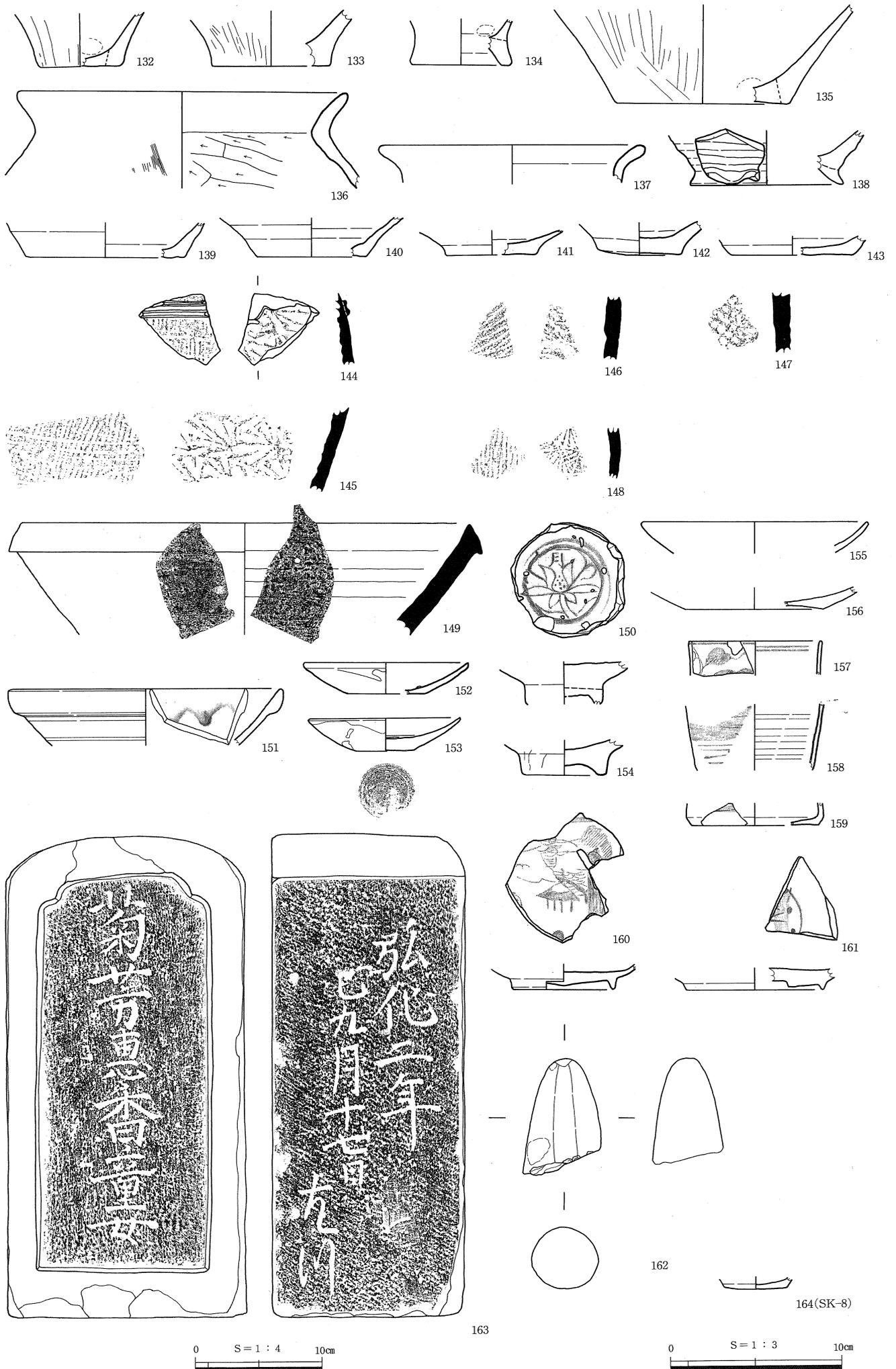
- ① 暗灰褐色粘質土
- ② 茶灰色粘質土



第40図 SK-5、6、8~10実測図



第41図 遺構外出土遺物実測図1



第42図 遺構外出土遺物実測図2及びSK-8出土遺物実測図

- 註1 『会見町内所在遺跡試掘調査報告書』 会見町教育委員会 1994年
 註2 『会見町誌』 会見町誌編さん企画委員会編 会見町 1973年
 註3 『文政六年會見郡住吉村地續繪圖面帳』 加藤勇二氏所蔵
 註4 『田住松尾平遺跡発掘調査報告書』 会見町教育委員会 1996年
 註5 「朝金小チャ遺跡現地説明会資料」 会見町教育委員会 1994年
 註6 『口朝金遺跡』 会見町教育委員会 1988年
 註7 岡田善治 「会見町・浅井土居敷遺跡の陶磁器」 『松江考古』8号 松江考古学談話会 1992年
 註8 『手間要害発掘調査報告書Ⅰ－第1次調査－』 会見町教育委員会 1994年
 『手間要害発掘調査報告書Ⅱ－第2次調査－』 会見町教育委員会 1991年
 註9 雲光寺住職瀬田光範氏のご高配により、判明した。

遺構名	挿図 番号	図版 番号	平面形	規模（長軸－短軸） （cm）		深さ （cm）	遺物		備考
				検出面	底面				
SK-1	39	11	不整形	65-48	52-34	15	—		
SK-2	39	11	不整形	154-89	42-12	31	—		
SK-3	39	12	楕円形	90-50	52-21	29	—		
SK-4	39	12	不整形	81-53	44-38	17	—		
SK-5	40	12	隅丸長方形	101-66	82-15	38	—		
SK-6	40	12	隅丸長方形	123-75	75-59	19	—		
SK-7	39	12	円形	64-59	57-44	27	弥生土器片		
SK-8	40	13	不整円形	108-101	74-74	39	土師質土器片		礫含む
SK-9	40	13	長楕円形	184-81	141-50	27	—		
SK-10	40	13	隅丸長方形	94-30	69-22	8	—	炭化物、板状礫含む	

朝金第2遺跡検出遺構一覧表

第5章 田住桶川遺跡・田住第8遺跡の調査

第1節 位置と環境 (第34、35、117図・写真図版15、33、34)

調査地は、西伯郡会見町田住字桶川から同字表屋敷、門田にかけての地内に所在し、越敷山系北西部の支丘陵尾根部の、頂部から裾部にかけて立地する。朝金第2遺跡からやや北東寄り約200mに田住桶川遺跡があり、田住桶川遺跡の西側斜面部を下って南西方向に伸びる形で田住第8遺跡が位置する。

田住桶川遺跡と田住第8遺跡は、離隔無く隣接して所在する。つまり、2つの調査地の境界をもって便宜上遺跡を区分している(第35、43図)。それぞれに独立した名称を持つわけだが、近世において同時代性を示す遺構群の存在が相互に確認されており、本来同一の遺跡であると思われる。調査者は、それぞれの遺構群の性格を鑑み、田住桶川遺跡を墳墓域、田住第8遺跡を集落域とそれぞれ捉え、同一章の中で記述することとした。田住桶川遺跡の立地する尾根は南北に伸び、東西にむかってそれぞれ傾斜が下る。尾根上は、北側に向かって緩やかに高まり、狭小ながらほぼ平坦な地形である。調査地は標高61~65mにあたる。田住第8遺跡は、後述するが、3つの調査区に細分される。aブロックは、標高31~38mにあたる。丘陵裾部の低湿な土壌の上に立地し、現況で丘陵端部と水田部に分けられる(第89図)。丘陵端部後背の調査地外にはテラス状の造成段があり、その前方は緩やかに傾斜している。一方水田部は、段状に造成されており、高位側で削平され、低位側で客土されている。bブロックは、標高37m前後の谷地形の入り口部に位置する低湿部である。cブロックは、田住桶川遺跡の西側斜面部から裾部にあたる。調査地は、標高42~55mの急峻な斜面部と標高36~42mの丘陵裾部に分けられ、前者においては2ヶ所(SS-1、2)の、後者においてはおおまかに3ヶ所(SS-3、SS-4~6、SS-7~10)の段状地形が現況で確認できた。

田住桶川遺跡の立地する丘陵尾根は、近世において村境であり、会見郡反原村と石田村の境界線にあたる。反原村は、享和3年(1803年)に住吉村と改名され、さらに明治10年(1877年)には住吉村と石田村が合併して田住村となる(註1)。後に詳述するが、田住桶川遺跡調査地内に遺存していた石塔墓(SK-28)は、その墓碑銘をもとに過去帳をあたって、反原村の住人に由来するものであることが判明した(註2)。調査地は、反原村-住吉村側に主体的に帰属していた土地と考えられる。

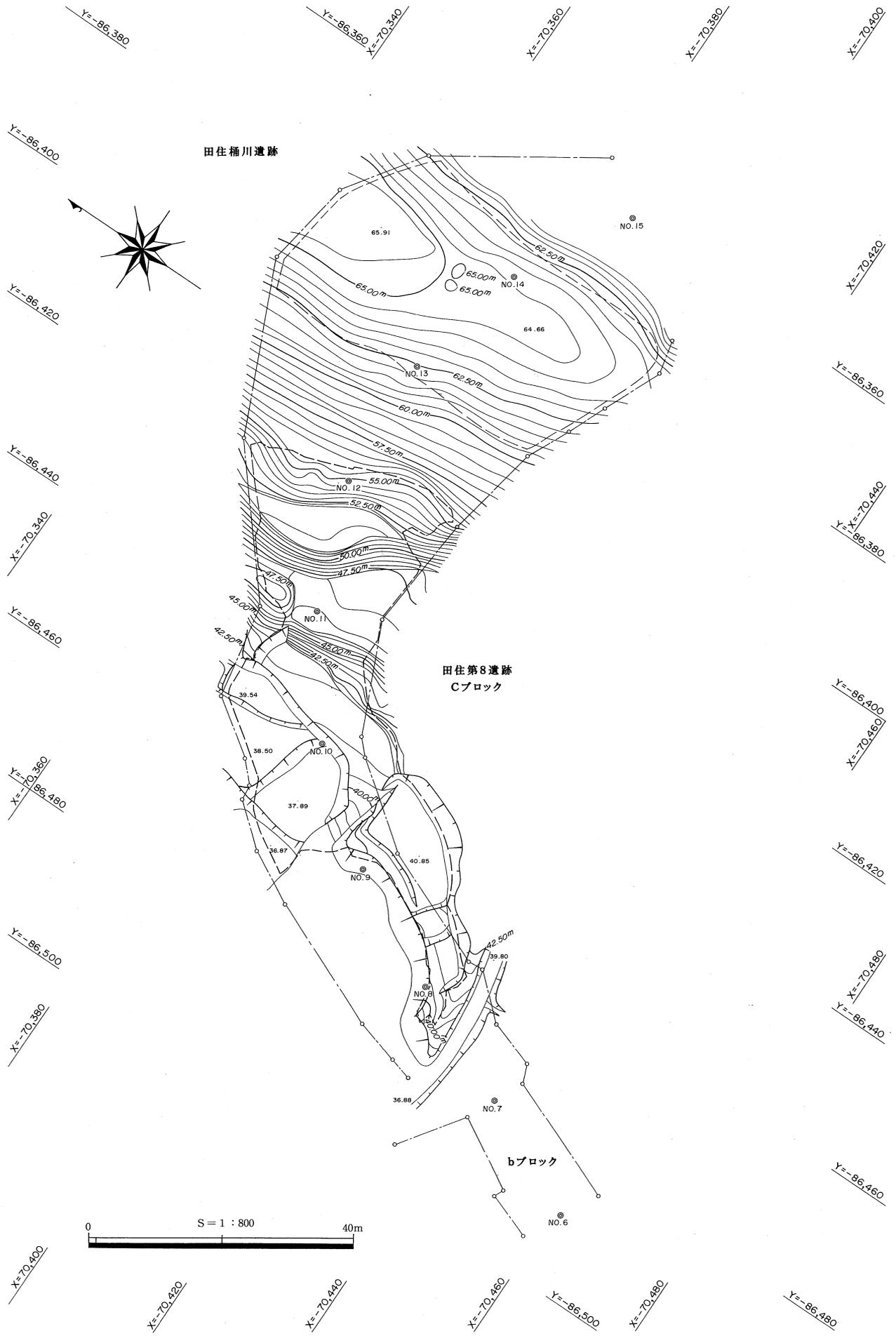
第2節 調査の経過と方法 (第35、43、44、45、89、90、91図・写真図版14、15、33、34)

両遺跡を俯瞰してみると(第35図)、丘陵を横断して下り、尾根裾沿いに伸びる範囲が調査域として設定されている。第35図の調査地に付した番号で示すと、2(田住桶川遺跡)から4(田住第8遺跡)の方向へ標高は下がっていく。よってこの方向へ向かっての排土搬出が、当初基本的な方針とされた。このことが、それぞれの調査地への着手順を決定することとなった。田住第8遺跡は、場所によって地形的条件が異なるため、それぞれに適した調査方針を採る必要上、a~cブロックの3区に細分した。当初はbブロックも調査対象であったが、調査着手時に甚だしい湧水にみまわれ、調査の実施が不可能となった。高位側に貯水池が隣接し、また谷口部分にもあたるのが原因と考えられる。よって、bブロックの調査を断念した。第35図によれば、3がcブロック、4がaブロックで、bブロックは3と4の間である。最終的な調査面積は、田住桶川遺跡が1,313m²、田住第8遺跡のaブロックが729m²、cブロックが1,472m²となった。調査の方法については、遺跡ごとに詳述する。

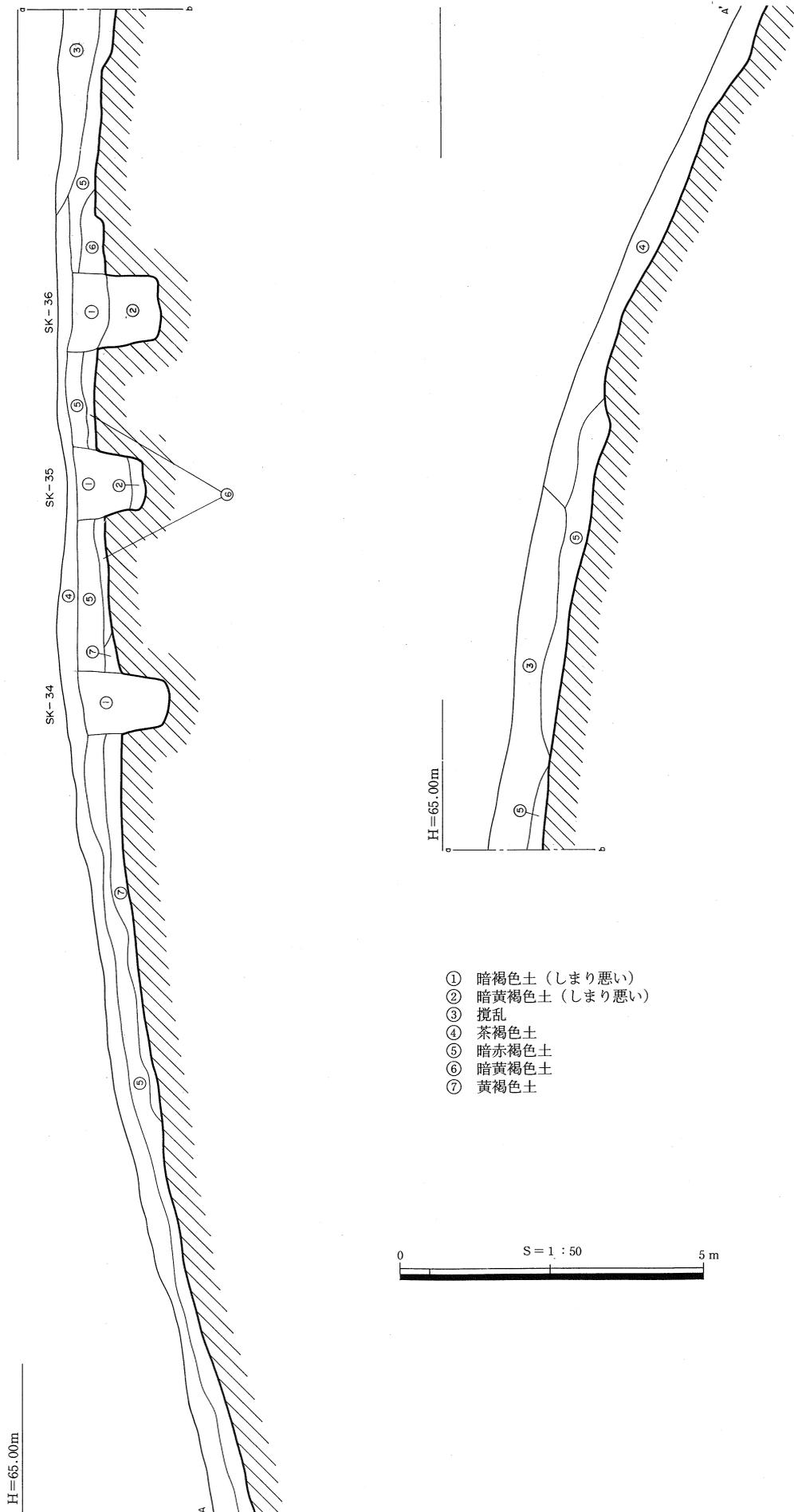
・田住桶川遺跡(墳墓域)(第43~45、59、60、73図・写真図版14、15、23、28、29)

当調査区においては、事前に会見町教育委員会によって試掘調査が行われている(註3)。この際、土坑状のピット3基が検出され、弥生土器、土師質土器、銅銭の出土をみている。この時点で、2期の文化相の存在が想定されたわけである。

表土除去は重機を導入して行いながらも薄く剥ぎ、SX-1部分は手掘りとした。その後精査にかかり、この



第43図 調査地調査前地形実測図



第44図 調査地土層断面実測図

段階で、調査地北側、SK-8の北西部近辺で、弥生時代後期の丹塗りの壺と器台が出土した。吉備系の搬入品である。このことは弥生時代の墳墓の存在を示唆するものと捉え、墳丘状の高まりの有無を確認することが必要となった。平坦な地形を呈する尾根上の調査地では、墳丘存在の可能性はSX-1の下層に求められた。そこで、SX-1に複数箇所のサブトレンチを設定して掘り下げ、土層断面によって盛土の確認を図ったが、SX-1より遡る段階の盛土は確認できず、北側は全て地山で、地山整形が行われた様子も見受けられなかった。

第44図をみていただきたい。調査地のほぼ中央部に東西に横断する土層断面観察用ベルトの断面図である。表土を除去し、調査地中央部に現出したのが第4層の茶褐色土である。調査地北側では黄色の、南側では灰褐色の玄武岩の風化土が露出しており、この面的繋がりを地山面と考え、遺構検出を図ったが、遺構を思わせる土色、土質の違いを把握できなかった。精査しながらこの層を掘り下げた結果、調査地中央部においては、遺構はその下層の第5層の暗赤褐色土上面から掘り込まれていたことが判明した。SK-34~36は、近世の土壇墓である。しかしながらこの第5層上面において、もう一つの文化相に相当する弥生時代の遺構が把握できず、サブトレンチを適宜設定して予察に努めた。最終遺構面である弥生時代相当の面は、結局玄武岩の風化土層上面(第6、7層下面)で検出した。つまり、調査地は2度にわたって覆土を被っていたことになる。この覆土は、第45図でみると、北はSK-13、南はSK-37に至る範囲に広がっていた。調査地中央部は本来鞍部で、ここに客土が施され、平坦な地形が造成されたわけである。この行為については、本文中で後に詳述する。

さて、地上構造物をもつ遺構については、その周辺部の表土は手掘りとし、表土直下から遺構検出にあたった。SK-28は、上部構造の石塔を平面、立面実測、写真撮影後、撤去し収容した。石塔直下で礫群が検出され、写真撮影、実測後除去し、墓壇プランの把握に努めた。SX-1については、当初この施設を建造物の基壇、礫群を礎石と予断したが、礫群は墓標石、SX-1は墓域を画する施設であることが、後に判明した。SX-1についても表土除去は手掘りで行い、表土直下の状況を検出し全景写真撮影後、地形実測を行い、細かくコンターラインを追求した。礫群の検出状況を実測後、原位置を保っていないと判断した礫については取り外し、改めて全景写真の撮影を行った。全ての礫を除去後、上面を精査したが落ち込みを把握できず、巨礫が据えられて生じた落ち込み部分の半裁にかかった。この段階では、SX-1を礎石建物の基壇と想定していたので、上面でピットが検出されないことに違和感を覚えなかった。しかし、落ち込み部の半裁中に人骨と煙管の出土をみたため、調査方針を根底から考え直し、これらを近世の墓壇と判断した。近世の墓壇は、SX-1の枠外でも検出され、総計21基、うち11基から人骨が検出された。検出人骨については、鳥取大学医学部教授井上貴央先生にご指導いただき、調査にあたった。人骨の出土状況の実測、写真撮影後、井上貴央教授をはじめとする解剖学第2講座の方々に人骨を取り上げていただき、併せて出土状況から、埋葬状況の復元のためのデータを採取していただいた。人骨は、解剖学的所見を得るため、持ち帰って鑑定していただいた。

・田住第8遺跡(集落域)(第43、88~90図・写真図版33、34)

a ブロックでは、表土除去にあたって、重機を使用し、丘陵端部で表土下の客土層上面まで検出した。客土層上面で精査を行ったが、遺構は検出されず、その広がりを写真撮影、実測した後、客土層を断ち割った。客土層下は無遺物層で、砂とシルトを主体とする堆積であった。水田部は遺物包含層を掘り下げたが、遺構は検出されなかった。

c ブロックでは、現況で明瞭な段状地形が確認できた(第43図)。段状地形は大まかに5つの地区に区分でき、これらを調査の基本単位とした。排土処理の関係上、高位から低位へ移行しながら重機によって表土を除去し、併せて遺構の検出を行った。

第3節 遺構と遺物

1 概要(第45、90、91図・写真図版14)

田住桶川遺跡(墳墓域)で検出された遺構は、土壇墓、木棺墓14基(SK-1~14)、石棺墓4基(SK-15



第45図 遺構全体図及び遺物出土状況図

～18)、近世の土葬墓21基 (SK-19～39)、SK-19～27の墓域を区画する基壇状石列1基 (SX-1) である。SK-1～14、19～39、SX-1は調査地中央の丘陵尾根頂部に集中し、SK-15～18の石棺墓は、調査地西側の斜面上にほぼ一直線状に並ぶ。近世墓は、調査地中央からやや北寄りの尾根上に分布する。遺構の時期は、土壙墓、木棺墓が弥生時代後期、石棺墓が古墳時代後期、近世墓は江戸時代で、SK-28の石塔には、享保元年(1716年)の銘が確認できる(第75図・写真図版28)。なおSK-8(第48図・写真図版16)の北西方で、丹塗りで小型の細頸壺と器台が出土した(第85図301～303・写真図版41)。弥生時代後期の吉備系の搬入品と思われる。

田住第8遺跡(集落域)は、aブロックで整地層が確認され(第90図・写真図版33)、cブロックではテラス状遺構10基(SS-1～10)、土坑4基(SK-1～4)、井戸2基(SE-1、2)、溝状遺構7条(SD-1～7)、土壘状遺構1基が検出されている(第91図)。SS-1～6が丘陵斜面部にあたり、SS-7～10は丘陵裾部に位置する。SS-1が最高位にあって標高51mを測り、最低位にSS-10が位置して標高37.8mを測る。遺構の時期は、中世から近代までの時期である。

2 墳墓の調査(田住桶川遺跡)

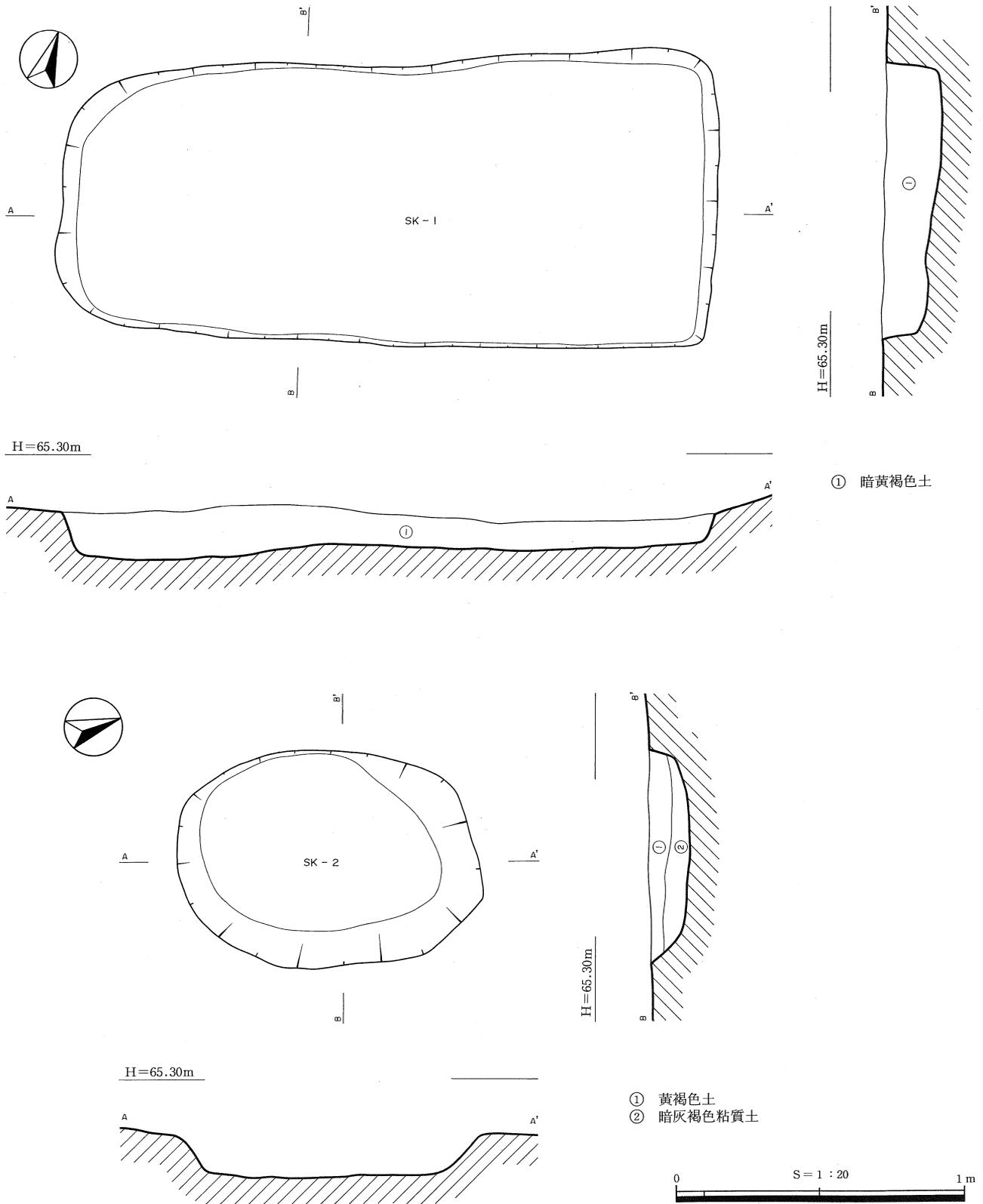
・土壙墓、木棺墓(SK-1～14)の概要

調査地内で最古の墳墓と位置付ける一群である。木棺の明瞭な痕跡を底面に残すもの(SK-6、9、11～14)を木棺とし、それ以外については土壙墓(SK-1～5、7、8、10)とした。土壙墓については、いずれからも人骨、副葬品の出土がみられず、墓であることを状況証拠的にしか示し得ない。①丘陵尾根頂部に立地すること、②木棺墓群で構成される墓域内に存在する土坑であること、③他に集落的状況が認められないこと、④構造的にみて墓壙の一般的形態を逸脱しないこと、⑤また構造的に土壙墓的でない土坑がみられないこと、⑥主軸を東西軸にほぼ揃えていること、⑦一般的に墓への供献土器とみなされる丹塗りされた小型の壺と器台(第85図301～303・写真図版41)が出土していること、である。吉備系の土器であり、搬入品であることを積極的に評価した。なお近世墓との識別については、墓壙の埋土と構造が両者間で明瞭に異なることから判断できた。

土壙墓は、8基である(第46～48、50図・写真図版15～17)。規模により、3つのカテゴリーに分類される。長軸が2mを越えるもの(SK-1、7、8)、1.5m程度のもの(SK-10)、1m前後のもの(SK-2～5)である。1m前後のものは、再葬墓でなければ小児墓と考えてよい大きさであろう。約1.5mのSK-10については、規模だけから小児墓云々は語れない。これらのカテゴリーは、墓壙のプランの分類に一致してくる。すなわちSK-1、7、8は長方形系、SK-10は長楕円形気味だがプランが曖昧であり、SK-2～5は円～楕円形系を呈する。SK-1、2は、他に比して深さが浅いが、検出に失敗したためであり、あくまで検出深度である。SK-3は、北西隅に段をもつ。SK-4は円形プランで、一般的な墓壙とは異なるが、他と埋土を同じくすることから判断した。SK-7はSX-1の下層から検出された。近世墓SK-23～25に切られており、西側小口の形状が不明で、長軸方向の規模は遺存長で示している。SK-8は、土層断面で木棺の側板痕的な様相を示す。しかし、第2～4層の土質の差異は微妙であり、木棺墓と断言し辛い。SK-10は、他の土壙墓群と約21mの離隔がある。SK-11を切っており、長軸は東西軸に直交する南北軸である。SK-11に付随するものと思われる。土層断面が木棺墓的であるが、第2～5層の土質の差異が微妙で判然としない。

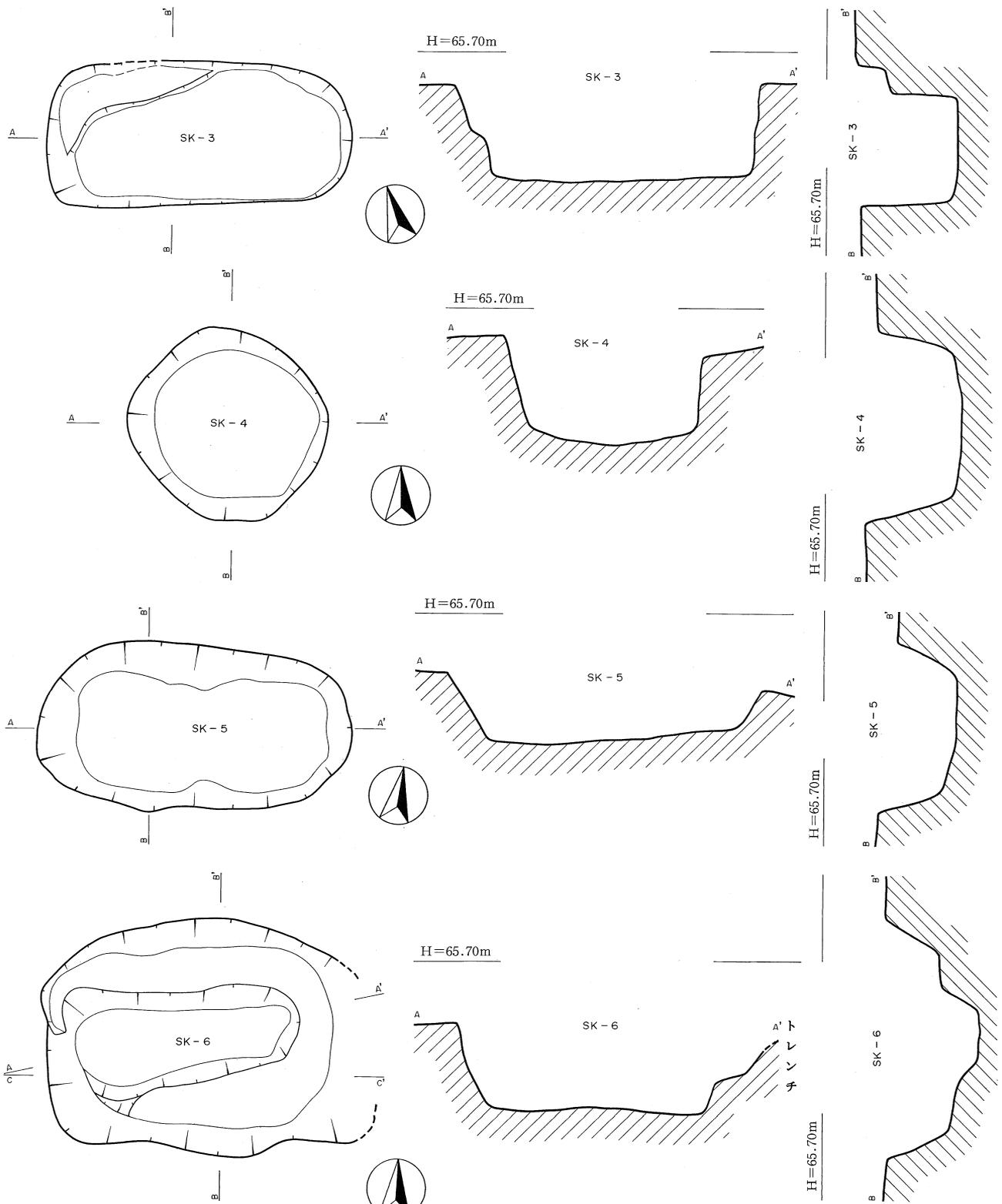
遺物を伴うものはSK-8のみである。副葬品をもつものは無く、SK-8の遺物(第48図165・写真図版42)は埋土中への混入である。165は、青木編年II期に相当する甕である(註4)。

木棺墓は、6基である(第47、49、51～53図・写真図版16～20)。規模的に長軸が2mを越す大型のもの4基(SK-11～14)と、1m台の小型のもの2基(SK-6、9)に分けられる。SK-6は2段掘り墓壙で、遺体安置に供せる長さは、壙底で70cmであり、規模的に小児墓と判断できよう。SK-9については、小児墓云々を判断できない。プランについては、大型のものは、長幅の比率に差異があるものの、長方形である。小型のものは、いずれも隅丸長方形と言って差し支えないであろう。両小口に木棺の小口穴を穿つのは、SK-9、11～



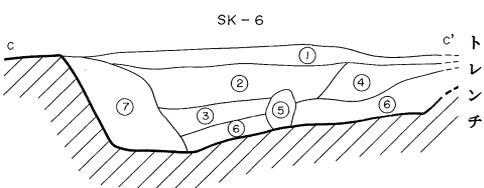
第46図 SK-1、2実測図

13の4基である。墓壇底を2段掘りにしているのは、SK-6、14の2基である。側板溝をもつものはない。小口穴を穿つものについては、小口穴を墓壇幅いっぱい掘ろうとはしていないようである。SK-9、11では、墓壇幅に対し幾分余裕のある長さで小口穴を掘り込んでいる。いずれの木棺墓も、土層断面が示す木棺幅が小口

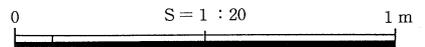


- ① 暗橙黄褐色土
- ② 橙黄褐色土 (③より暗)
- ③ 橙黄褐色土
- ④ 暗橙褐色土 (⑥より暗)
- ⑤ 黒橙褐色土
- ⑥ 暗橙褐色土
- ⑦ 黒橙黄褐色土

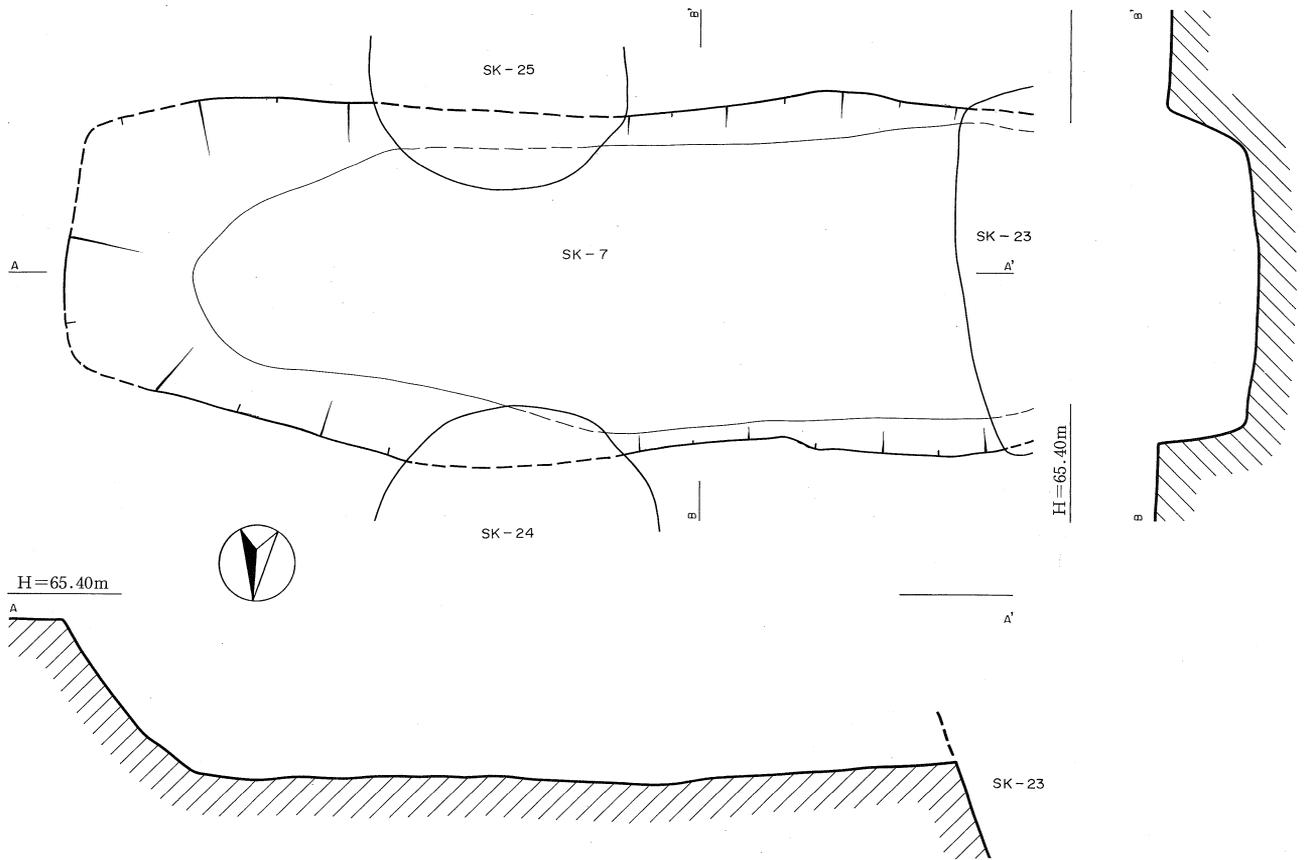
H=65.70m



S = 1 : 20



第47図 SK-3 ~ 6 実測図



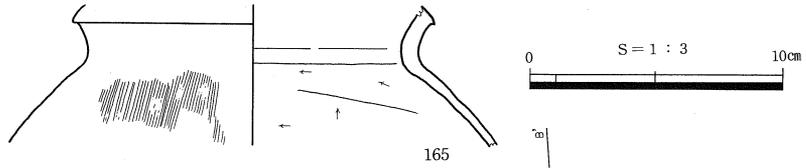
H=65.40m

H=65.40m

A

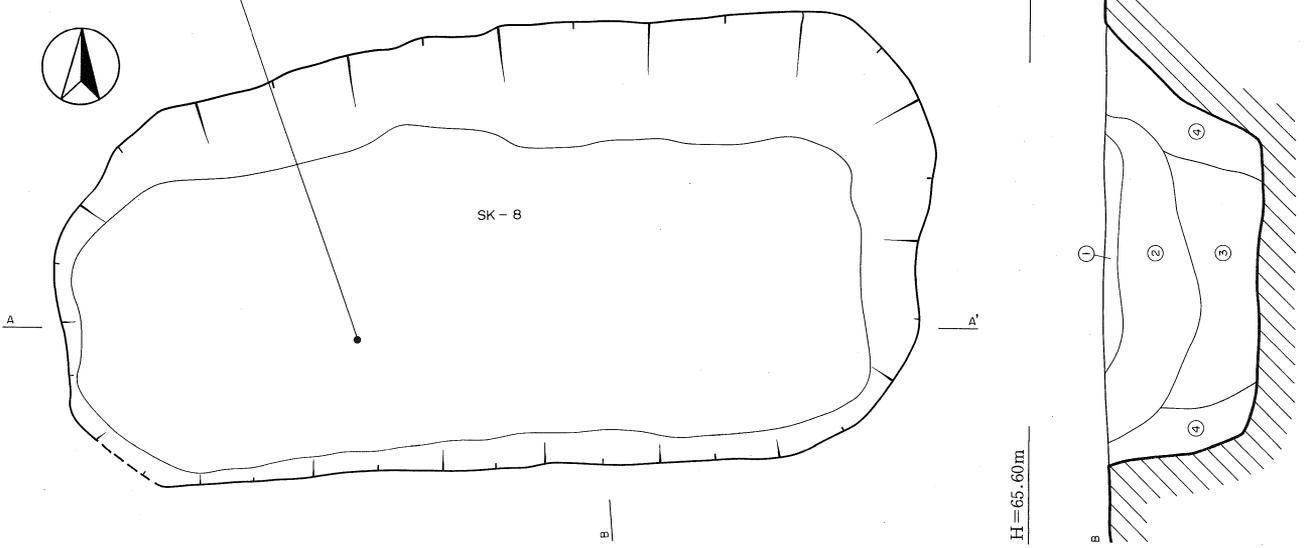
A'

SK-23



165

S=1:3 10cm



H=65.60m

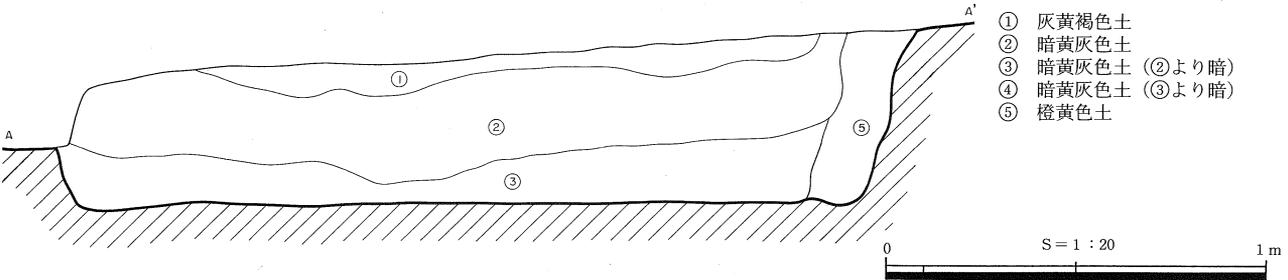
H=65.60m

A

A'

B

B'



- ① 灰黄褐色土
- ② 暗黄灰色土
- ③ 暗黄灰色土 (②より暗)
- ④ 暗黄灰色土 (③より暗)
- ⑤ 橙黄色土

S=1:20 1m

第48図 SK-7、8実測図及びSK-8出土遺物実測図

穴の底面長より長いか、ほぼ同じである。小口板の幅を、小口穴の底面長程度のものであると考えるならば、木棺の構造は、側板が小口板を挟み込む形態であると想定できる。

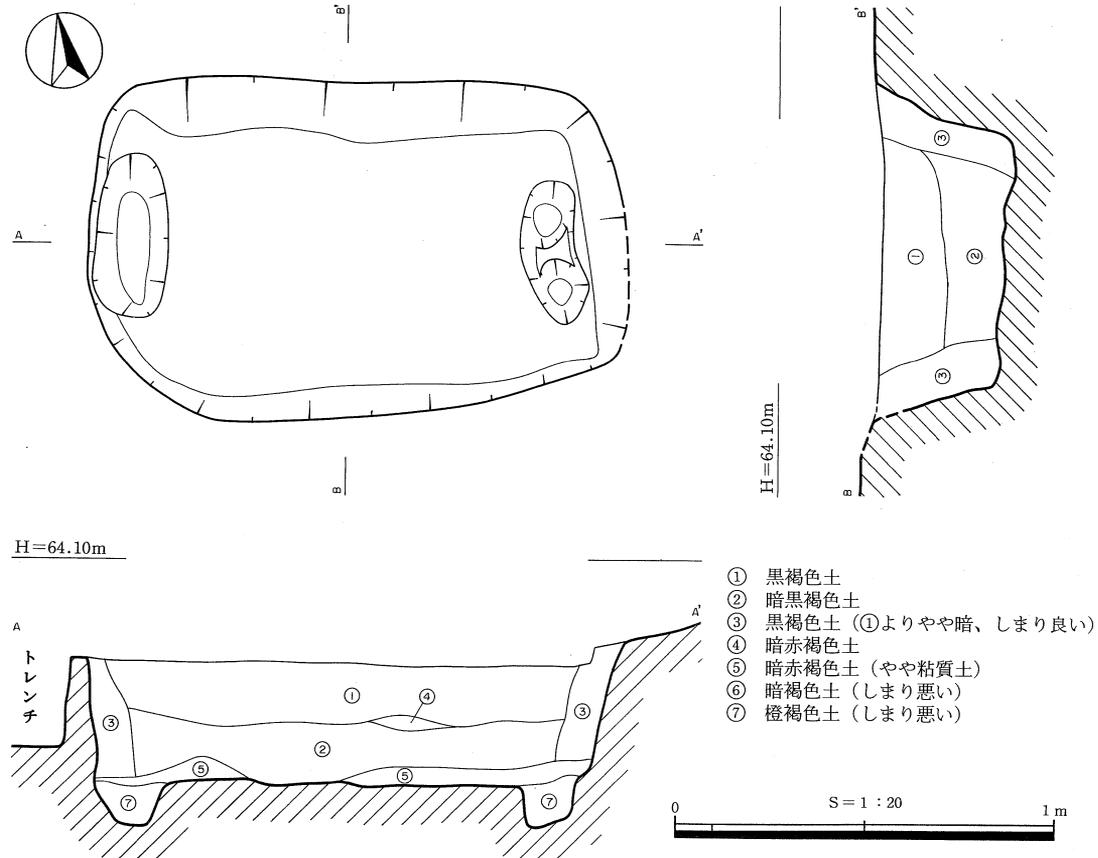
木棺墓の配置については、隣接するものはなく、相互に離隔を保っている。しかし、SK-12~14は比較的接近しており、SK-12、13は規模、形態ともに類似性が高い。いずれの木棺墓も主軸をほぼ東西軸に採り、方位を統一している。副葬品をもつものはない。わずかにSK-11の埋土中から土器の小片が出土したのみである。

・石棺墓（SK-15~18）の概要

石棺墓の在り方は、他の墳墓と様相を異にする。丘陵尾根の西側斜面上、標高62.5~64m付近に立地し、主軸を南北に揃え、4基がほぼ一直線上に並ぶ配列である。SK-17、18は、後背に地山加工による段差を設け、範囲の曖昧なテラス状に近い緩傾斜面上に近接して存在する。この段差は調査地外へ伸びており、現況では認識できないため、全容は不詳である。検出長は4m、段差は最大で46cmを測る。石棺間の離隔は、SK-15~16間が15m、SK-16~17間が13mを測り、ほぼ等間隔といえようか。

SK-15（第54図・写真図版21）は、最も北寄りに位置する。石棺底面内法で長さ54cmを測り、最も小型の石棺墓である。墓壇は、隅丸方形を呈しており、側板溝を両側に掘り、小口穴は設けていない。石棺は、北側小口板が内側に倒れかかっており、蓋石は遺存していなかった。平石を石材とし、両側板で小口板を挟む構造で、側板上に平石を小口積みしている。床面は地山土の墓壇底であり、副葬品等遺物の出土はみられなかったが、石棺埋土を水洗中、人骨片が検出された。頭位は、南側の小口板が北側に比して幅広であることから南と考えるが、判然としない。規模からみて小児墓であろう。

SK-16（第55、58図・写真図版21、22、42）は、SK-15とSK-17の間に位置する。墓壇は、やや不整な隅丸長方形を呈し、北側で両側板溝と小口穴が連なって「コ」の字形をなし、南側小口穴は他に比して浅く、分断された感じである。石棺は平石を石材とし、蓋石は、中央に大型の平石をかぶせ、それ以外の隙間を小ぶりの平石の割り石で塞いでいた。側板と蓋石の間に、平石の小口積みはみられなかった。棺材の組み方は、南側では小口板を側板で挟み、北側では西側側板が小口板の手前に行き当たっている。北側両サイド2枚の側板は、隣接

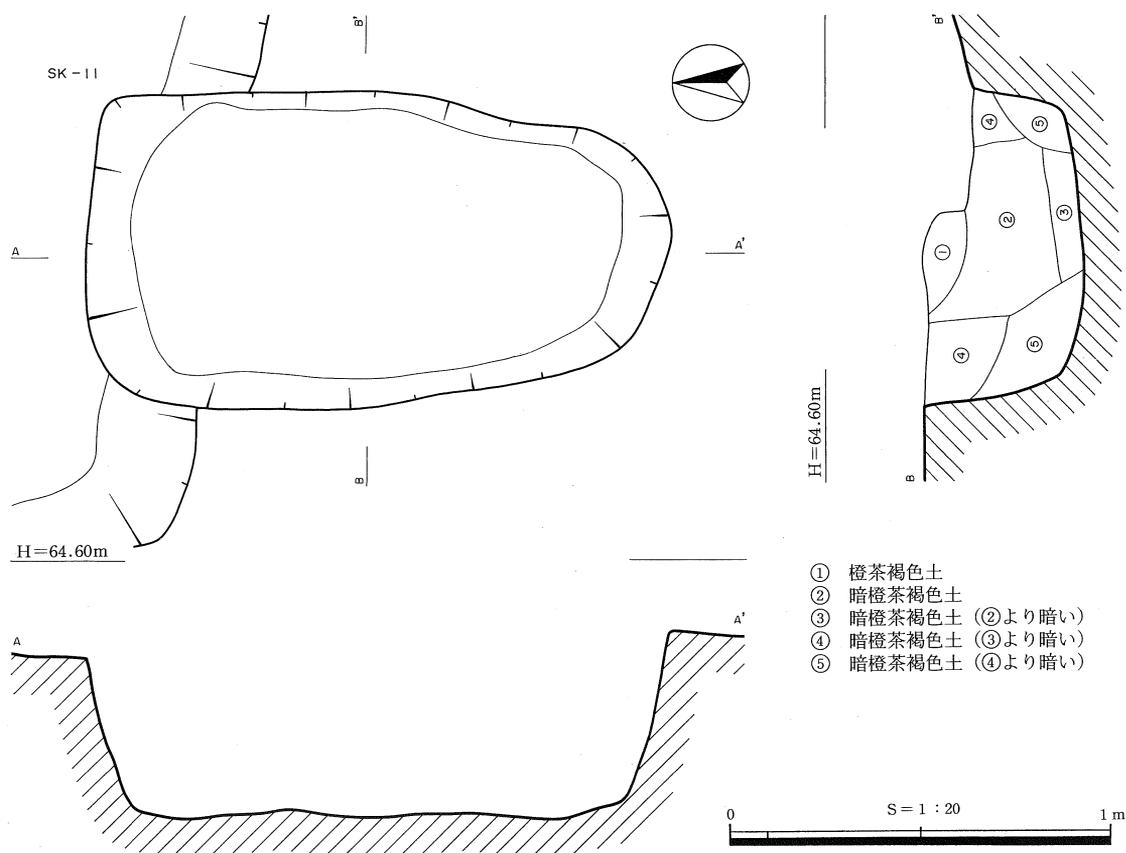


第49図 SK-9 実測図

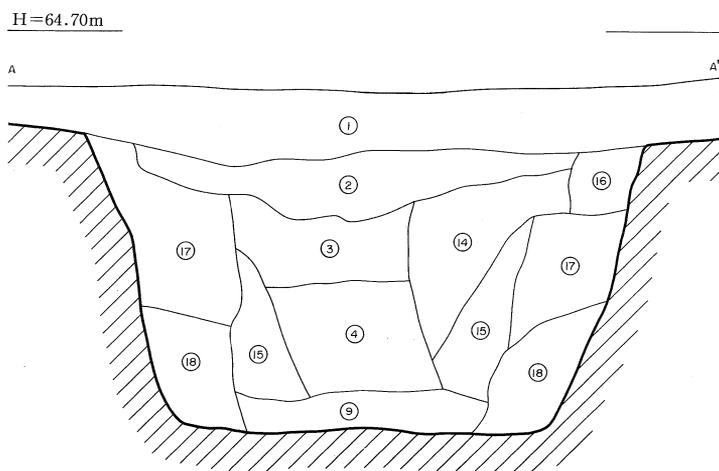
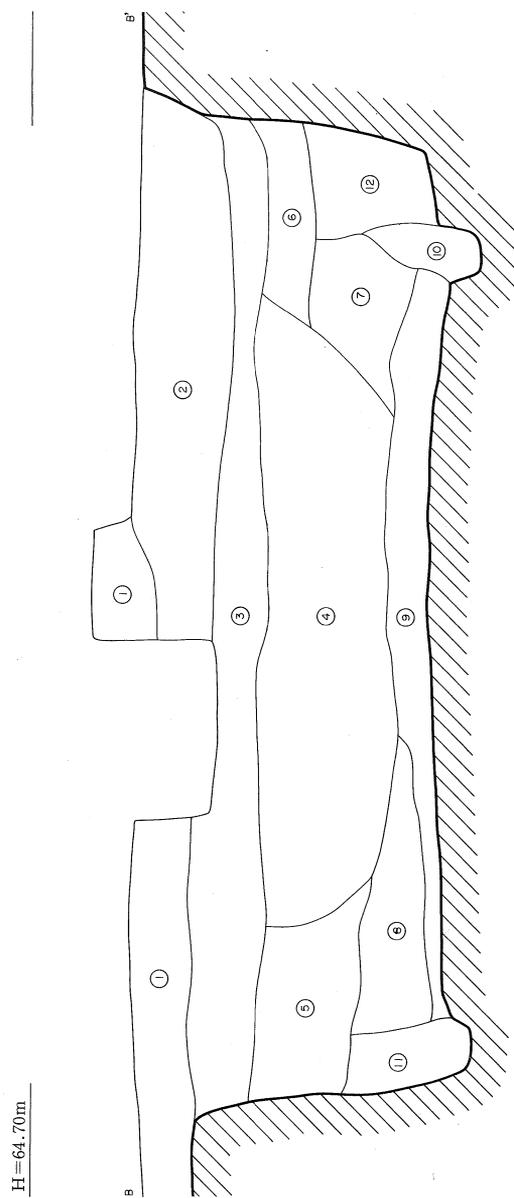
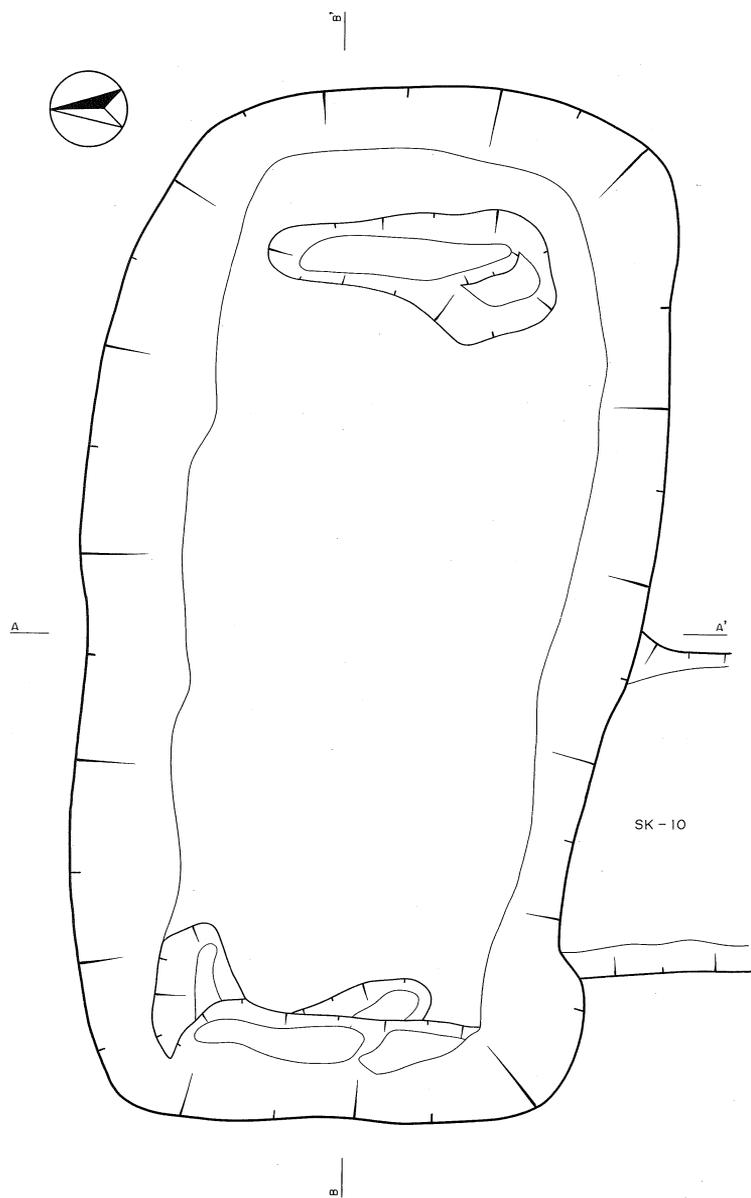
する側板の外側に伸びて重なっており、石棺の寸法に応じて調整されている。床面は、墓壙底に淡茶褐色粘質土（第3層）を敷き、その上に平石の割り石を敷いている。北西側の床石上からは、鉄刀1振が切先を北側に向けて出土した（第58図166・写真図版42）。全長38.5cmを測る直刀である。刀身はやや内反りで、関部から切先に向かって幅が減少していく。刀身幅は関部寄りで2.5cm、切先部側で1.9cmを測り、背の厚さはそれぞれ0.5cm、0.45cmである。関部には木質と銚が遺存していた。銚の径は縦3.3cm、横2.4cmを測り、鞘の径はその数値に近似するものであろう。茎部は長さ8.2cm、幅1.8cmで背の厚さ0.5cmである。茎の目釘穴には目釘が突き刺さった状態で遺存していた。南側小口寄りの床石が最も大ぶりであり、鉄刀の切先の方向からも、頭位は南と考える。石棺内法の長さは81cmであり、小児墓と考える。また、石棺埋土を水洗したところ、断面方形の鉄製品が検出された（第58図167）。石棺墓の北東側、墓壙を掘り込んだ層中から、須恵器の甕の胴部片が出土した（第58図168）。石棺墓の時期の上限を示す遺物である。この須恵器について、胎土分析を行っている。島根県松江市の大井窯群の須恵器の分布領域に近いことが判明した。

SK-17（第56図・写真図版22）は、SK-18と近接している。墓壙は不整形で、隅丸方形気味だが、北西隅と南東隅が突出している。側板溝や小口穴は、石材の座り具合に応じて調整されている。石材は平石で、細粒閃緑岩である。蓋石は遺存していないが、側板や小口板上に平石の割り石が小口積みされていた。石棺は両側板で小口板を挟む構造で、床面は墓壙底上に淡赤褐色粘質土（第3層）を敷いていた。頭位は判然としないが、南側の小口板が北側に比して幅広である。石棺内法の長さは90cmであり、規模からみて小児墓であろう。

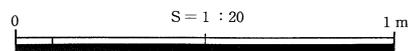
SK-18（第57、58図・写真図版22）は、最も南寄りに位置する。墓壙はやや不整形で、隅丸方形気味である。側板溝や小口穴は、全周に近い形で連なっている。石材は平石で、蓋石は遺存していない。両側板で小口板を挟む構造で、床面は墓壙底上に暗褐色土（第2層）を敷いていた。頭位は、北側の小口板が南側に比して幅広であることから北とみられ、他の3基と異なる。石棺内法の長さは88cmであり、小児墓であると考えられる。埋土水洗中、断面が扁平な鉄製品を検出した（第58図169）。



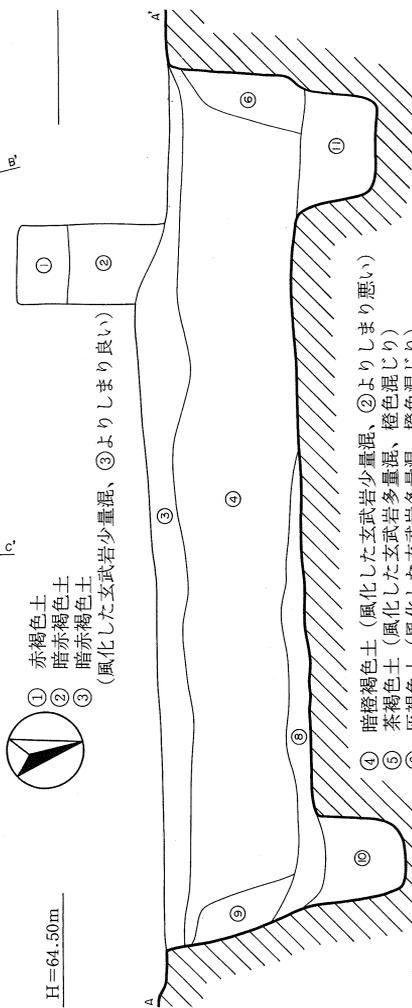
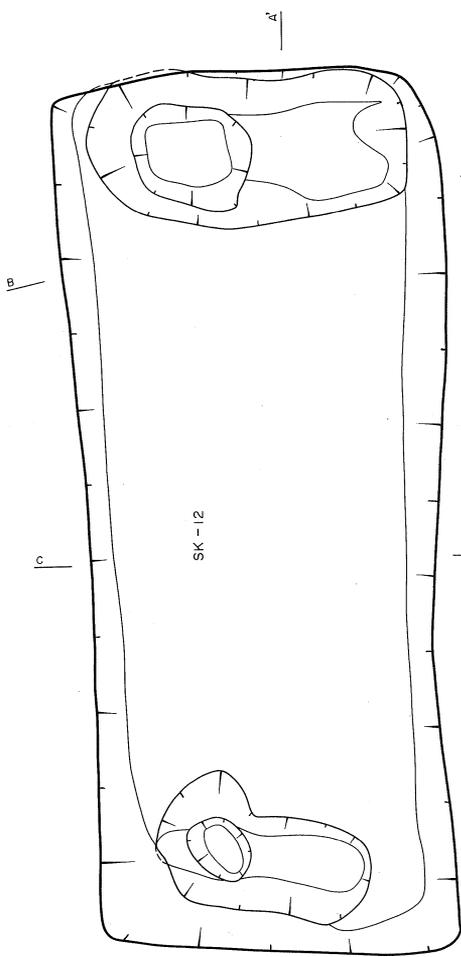
第50図 SK-10実測図



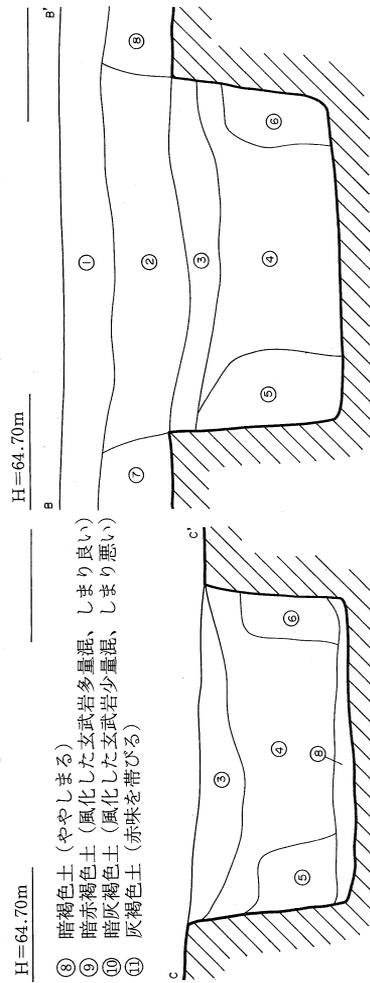
- ① 暗橙茶褐色土
 - ② 橙茶褐色土
 - ③ 橙茶褐色土
 - ④ 暗橙茶褐色土
 - ⑤ 橙茶褐色土
 - ⑥ 橙茶褐色土
 - ⑦ 暗橙茶褐色土
 - ⑧ 橙褐色土
 - ⑨ 橙褐色土
 - ⑩ 暗茶褐色土
 - ⑪ 橙褐色土
 - ⑫ 橙褐色土
 - ⑬ 橙茶灰色土
 - ⑭ 橙茶灰色土
 - ⑮ 暗茶褐色土
 - ⑯ 茶灰色土
 - ⑰ 暗茶灰色土
- ※すべて地山礫を含む



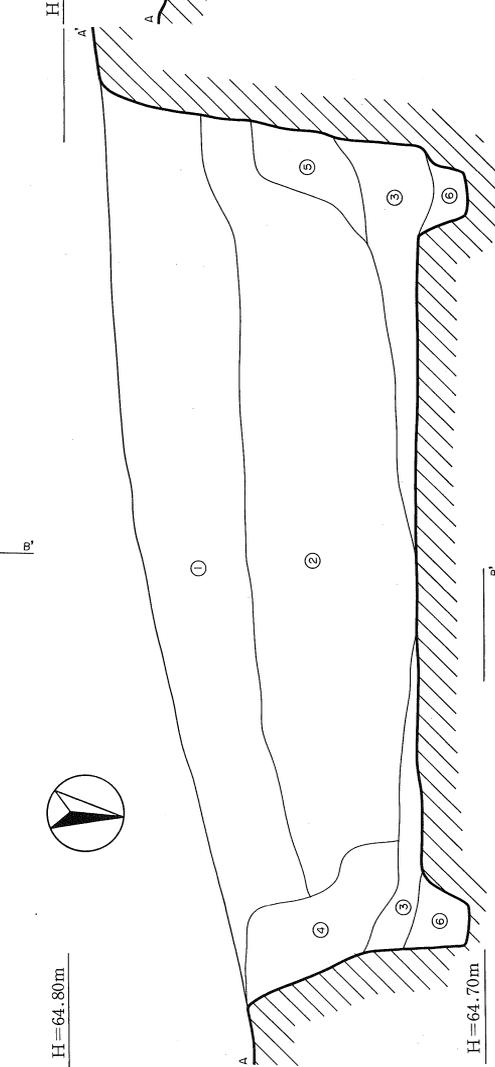
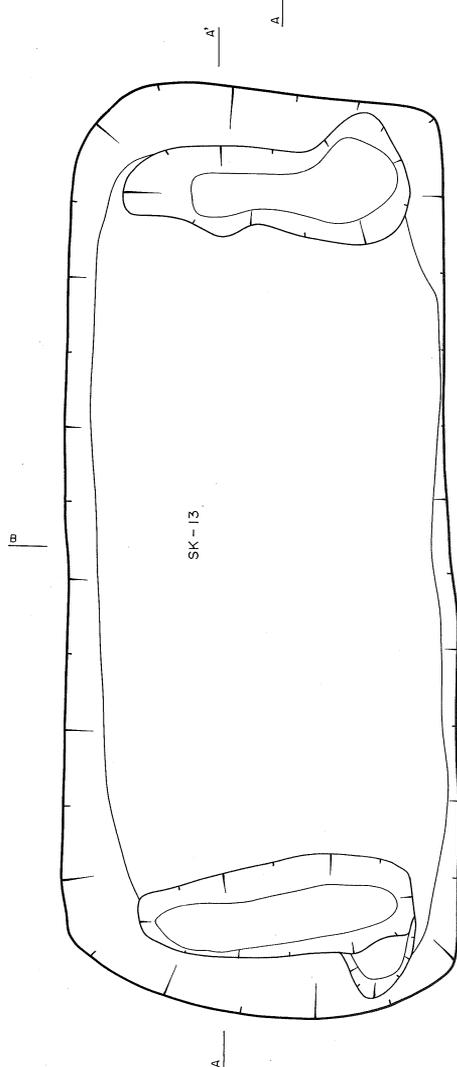
第51図 SK-11実測図



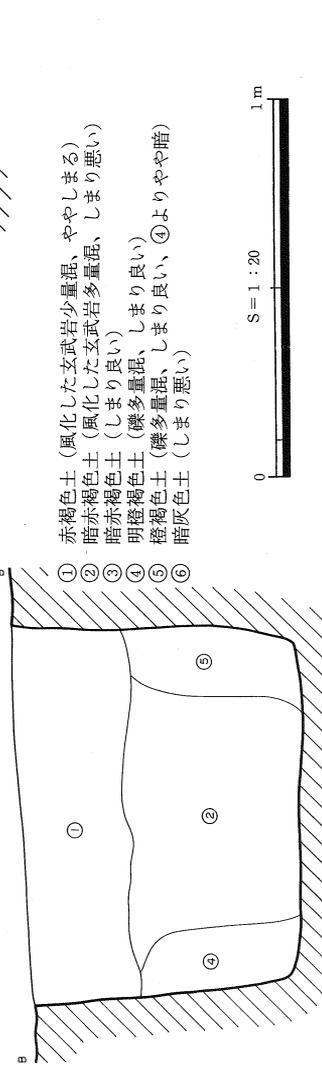
- ① 赤褐色土
 - ② 暗赤褐色土
 - ③ 暗赤褐色土
- (風化した玄武岩少量混、③よりしまり良い)



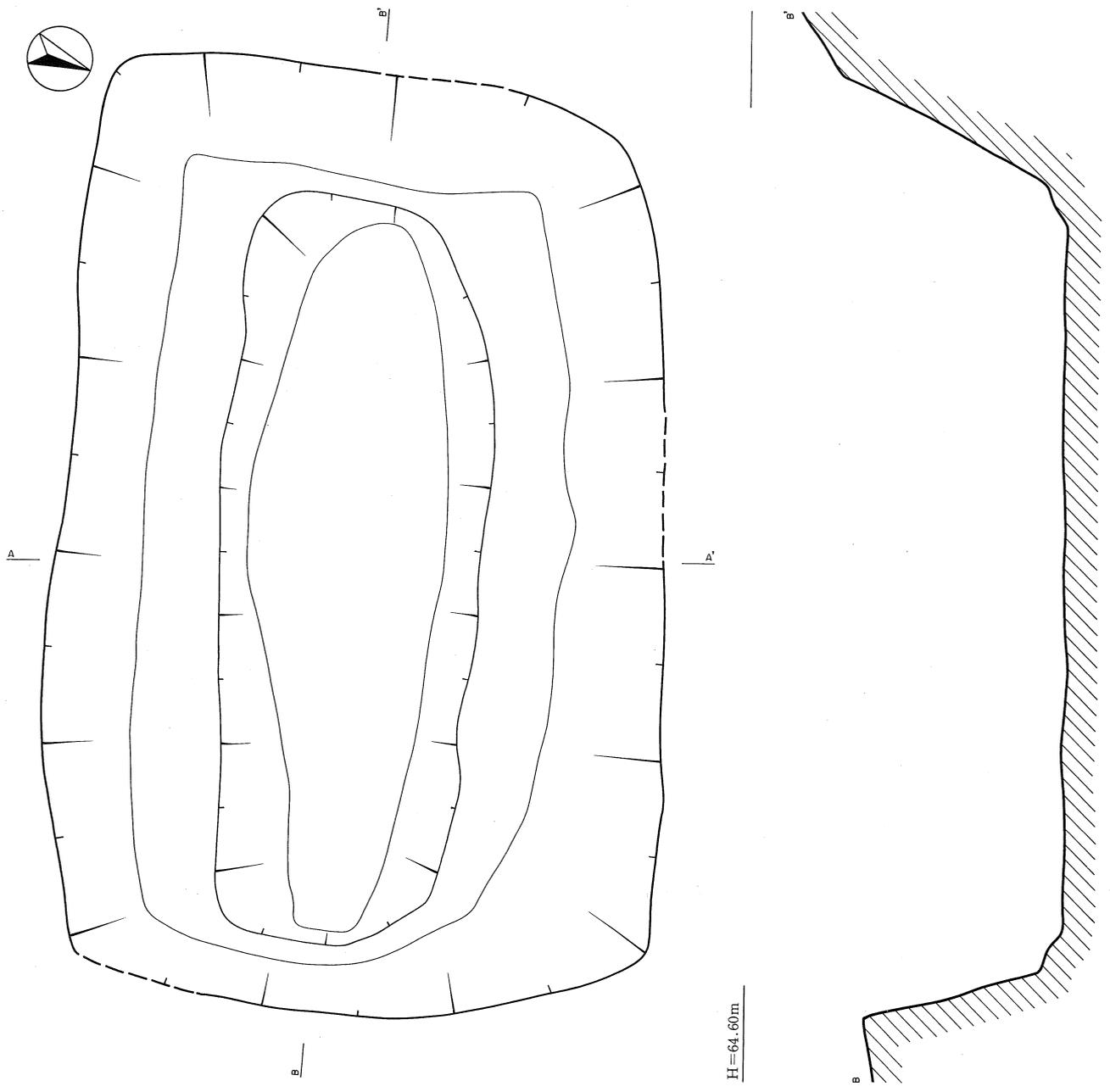
- ④ 暗橙褐色土 (風化した玄武岩少量混、②よりしまり悪い)
- ⑤ 茶褐色土 (風化した玄武岩多量混、橙色混じり)
- ⑥ 灰褐色土 (風化した玄武岩少量混、橙色混じり)
- ⑦ 橙褐色土



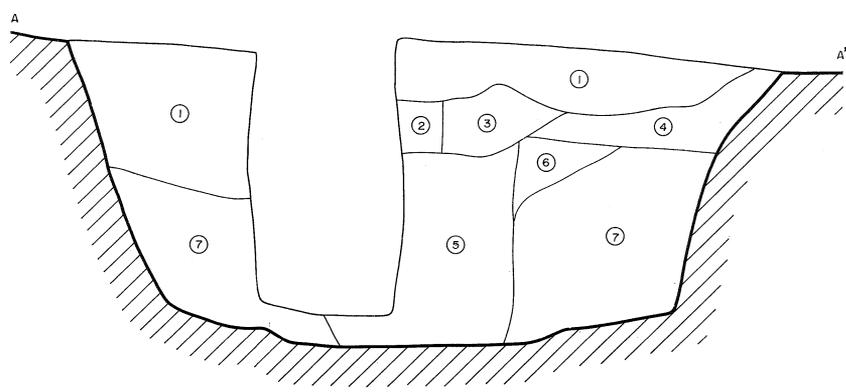
- ① 赤褐色土 (風化した玄武岩少量混、ややしまる)
- ② 暗赤褐色土 (風化した玄武岩多量混、しまり悪い)
- ③ 暗赤褐色土 (しまり良い)
- ④ 明橙褐色土 (少量混、しまり良い)
- ⑤ 橙褐色土 (少量混、しまり良い、④よりやや暗)
- ⑥ 暗灰色土 (しまり悪い)



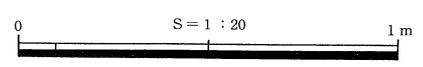
第52図 SK-12、13実測図



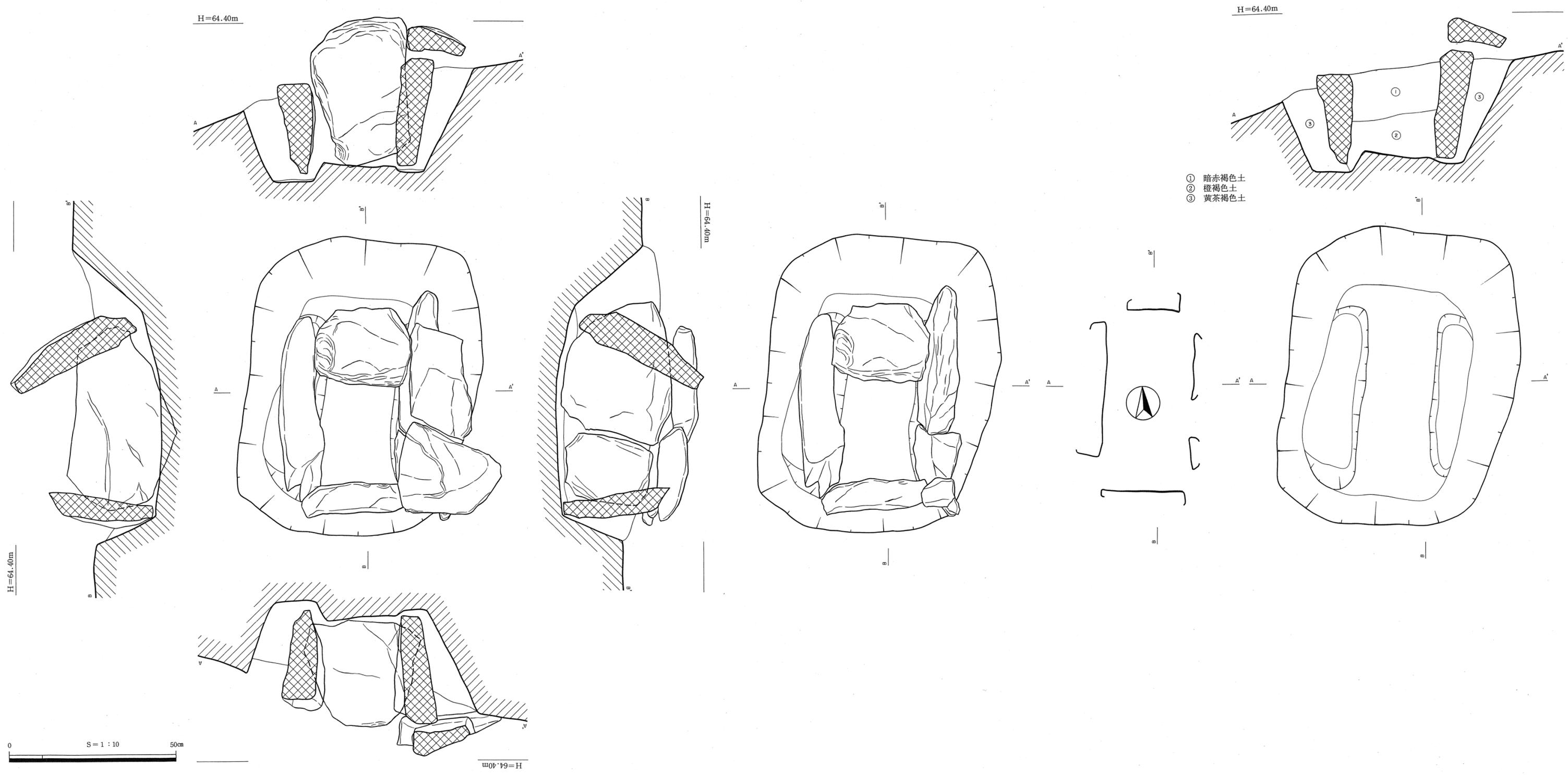
H=64.60m



- ① 暗赤橙褐色土
- ② 暗赤橙褐色土 (炭化物含む)
- ③ 暗赤橙褐色土 (暗褐色強い)
- ④ 暗赤橙褐色土 (暗褐色強い)
- ⑤ 暗赤橙褐色土
- ⑥ 暗赤橙褐色土 (暗褐色強い)
- ⑦ 暗赤橙褐色土

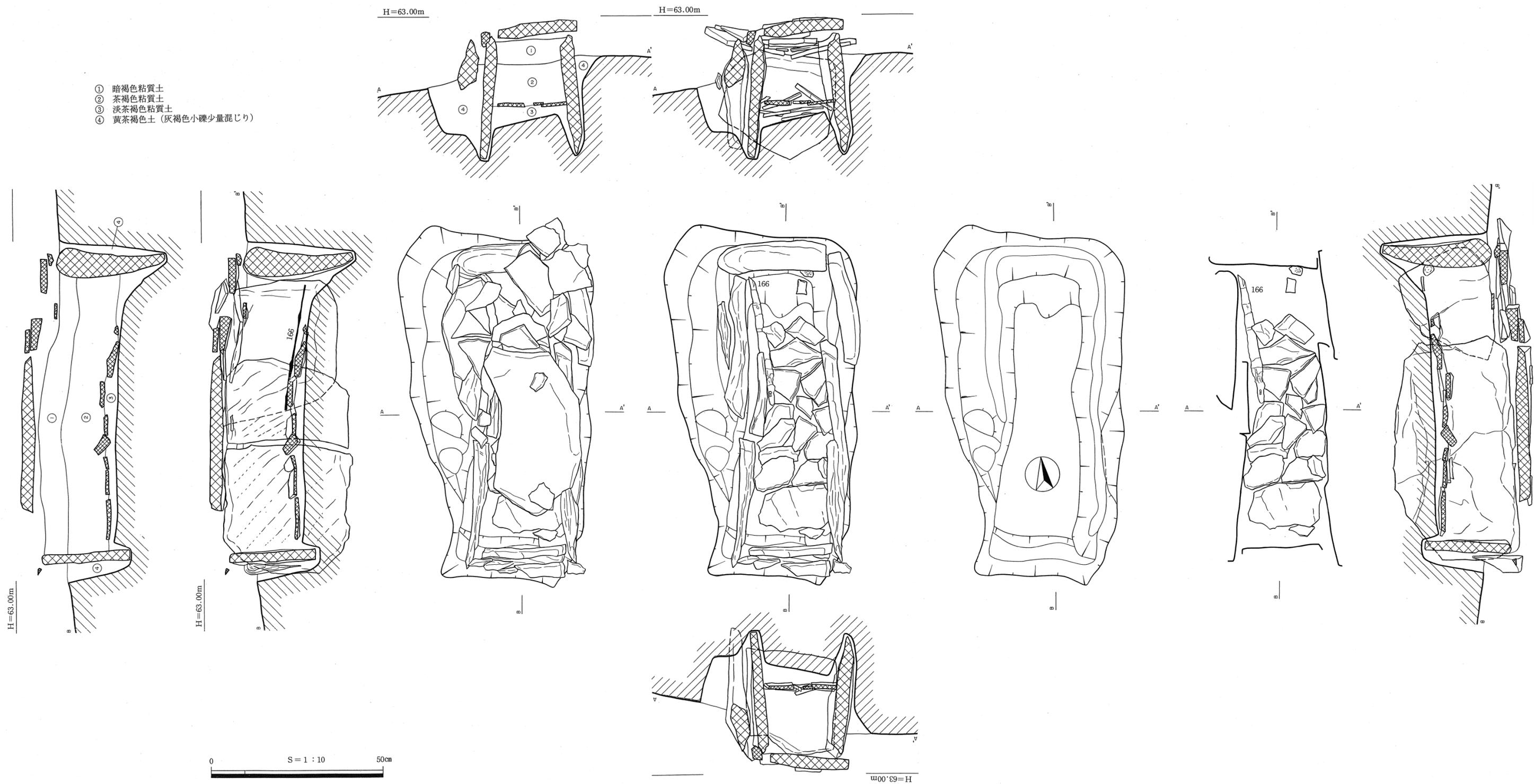


第53図 SK-14実測図

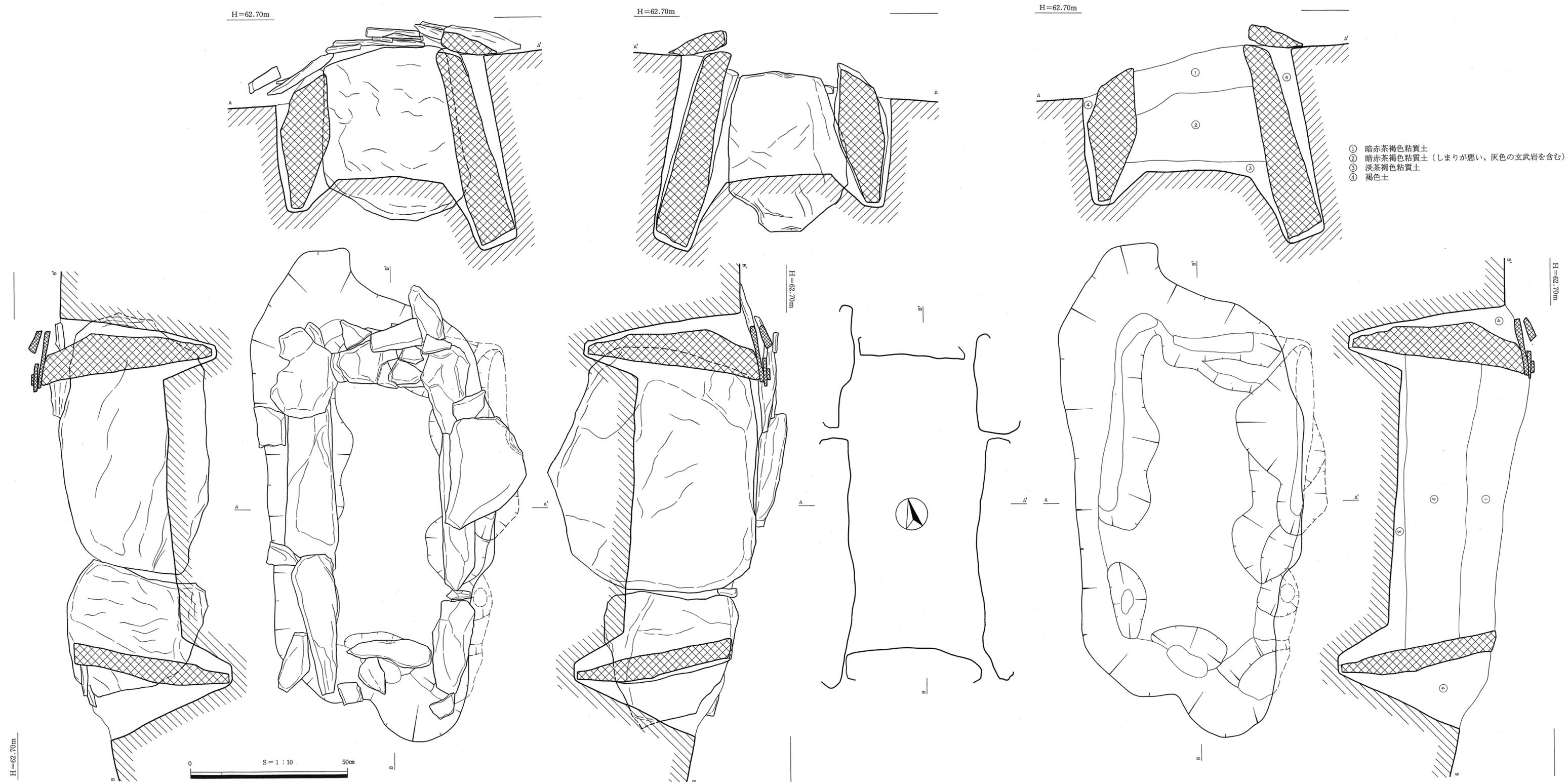


第54图 SK-15实测图

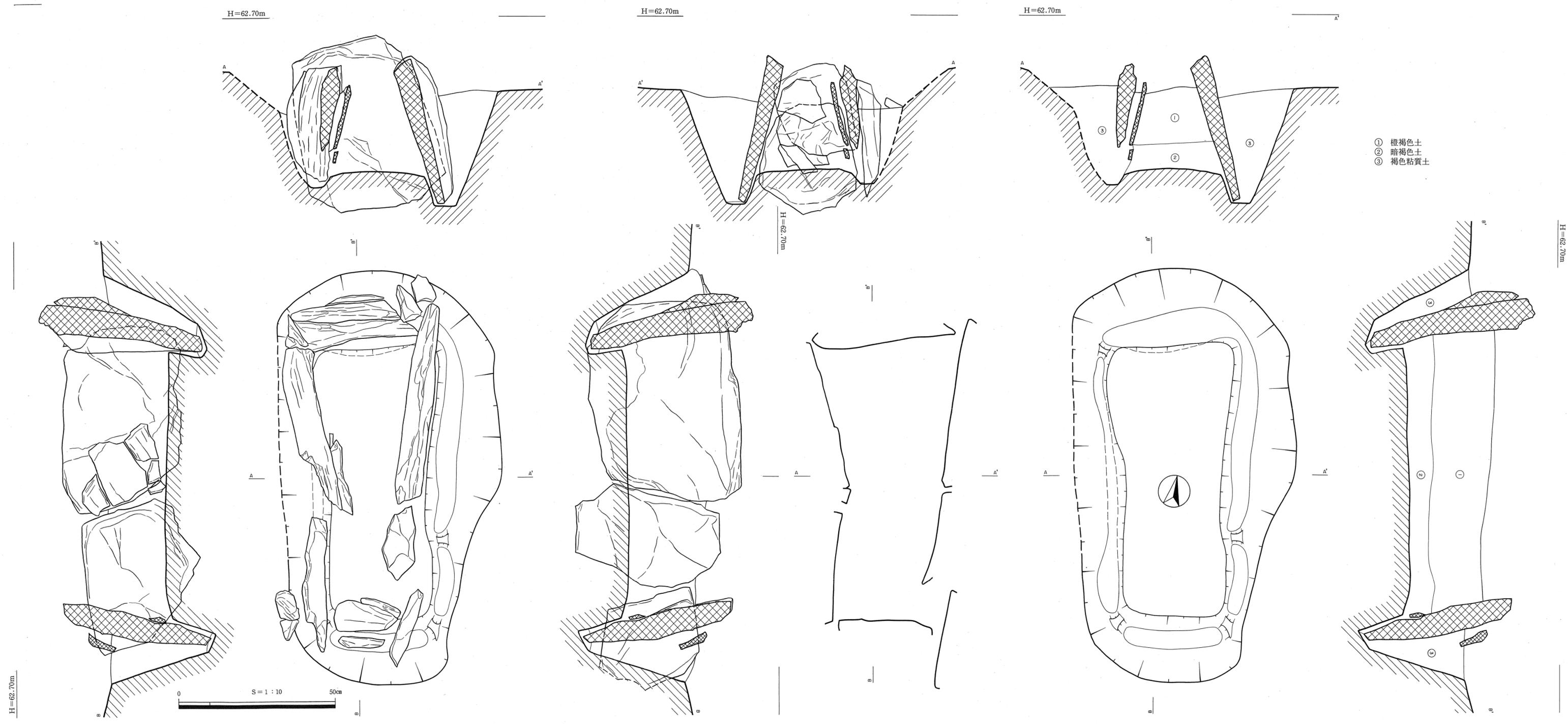
- ① 暗褐色粘質土
- ② 茶褐色粘質土
- ③ 淡茶褐色粘質土
- ④ 黄茶褐色土 (灰褐色小礫少量混じり)



第55図 SK-16実測図



第56図 SK-17実測図



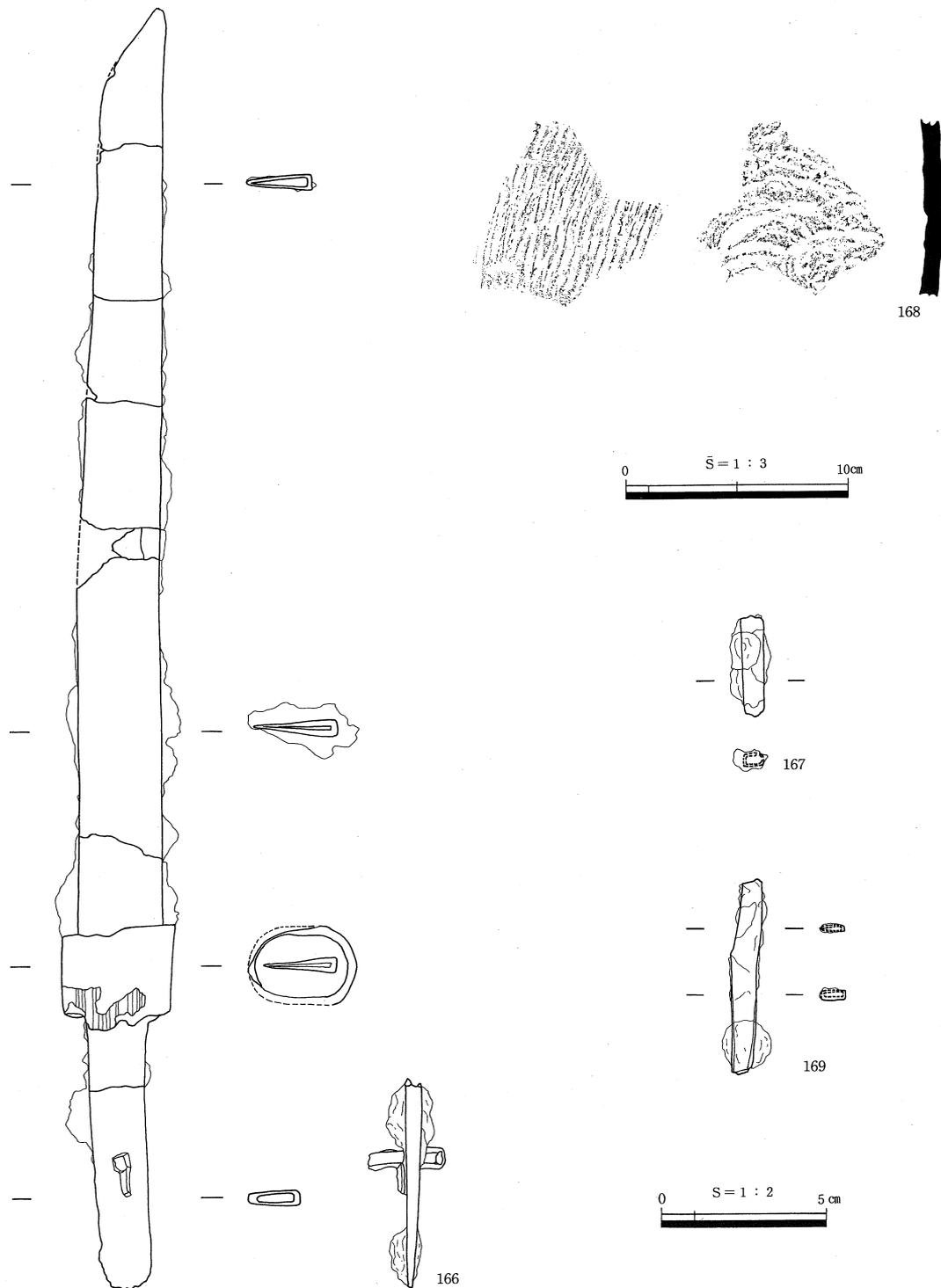
第57图 SK-18实测图

・土墳墓、木棺墓、石棺墓の時期と遺構外出土遺物（第45、48、58、84～87図・写真図版41、42）

土墳墓、木棺墓、石棺墓の時期については、それを直接示す遺物がほとんど無く、遺構外から出土した遺物から推測せざるを得ない。遺構外出土遺物の出土相は、大きく①弥生土器、②古式土師器、③須恵器・土師器、④陶磁器・土師質土器の4段階に分けられる。まずは各段階について概観してみる。

①弥生土器（第84、85図271～313・写真図版41、42）

弥生土器は、尾根頂部から西側斜面部にかけて出土している（第45図）。遺構上面から出土するものではなく、また土器溜まり状の出土も窺われないが、ただ乱雑なだけの散らばりではなく、いくつかのまとまりをもって出土しているものと見受けられる。調査者は、これらを1～6群にまとめた（第45図）。



第58図 SK-16、18出土遺物実測図

1) 1群 (第84図271~279)

S K-11からS K-16へ結ぶラインより南側から出土した1群である。271~276は壺、甕の口縁部、277は高坏の脚部、278、279は底部である。壺、甕については、風化が著しく調整が鮮明ではないが、概ね外面ハケ、内面ケズリ調整で、271の口縁内面にミガキが確認できる。271~275については、276に比して口縁部があまり発達しておらず、断面三角形状で、口縁端部の平行線も凹線状で、2~3条と少ない。一方276は「5」の字形口縁が発達し、口縁端部に7条の平行線が施されている。271~275は青木Ⅱ期、276はⅢ期の古段階に比定される。

2) 2群 (第84図280~282)

S K-11からS K-12に挟まれた範囲から出土した1群であるが、実測可能なものが少ない。280、281は壺または甕で、口縁部と底部である。282は高坏の脚部である。280は青木Ⅱ期に相当する。

3) 3群 (第84図283~287)

S K-12以西、S K-14とS K-16に挟まれた範囲から出土した1群である。283~287は壺または甕で、283~285は口縁部、286は頸部~胴部、287は底部である。283は風化のため、口縁端部の平行線の有無は不明である。284は口縁部外面をナデており、平行線は施されていない。285は平行線を1条確認できる破片である。283、285は青木のⅡ期、284はⅢ期の古段階に比定されよう。287は風化のため内外面の調整が不明で、指押さえ等も確認できないが、丸底を指向した器形である。

4) 4群 (第84図288~294)

S K-14とS K-15に挟まれた範囲から出土した1群。288~294は壺、または甕で、288~291は口縁部、292~294は底部である。291は風化のため調整は不明だが、288~290については、口縁部内面にミガキ調整が施され、端部に3~4条の平行線がめぐり、青木のⅡ期に比定される。292、293は上げ底を呈し、294は平底である。

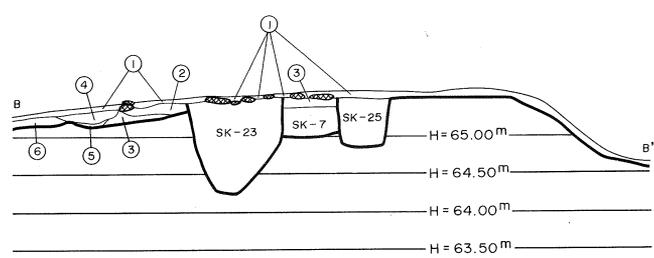
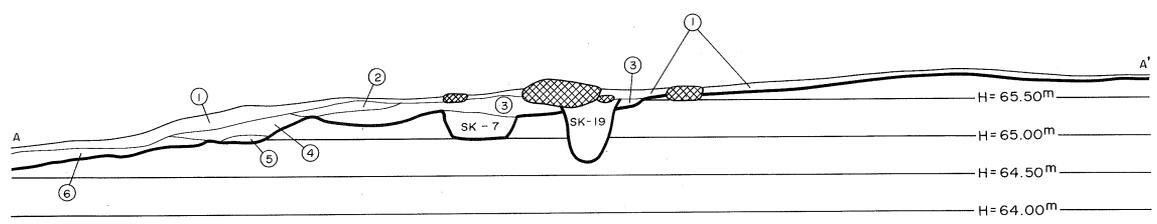
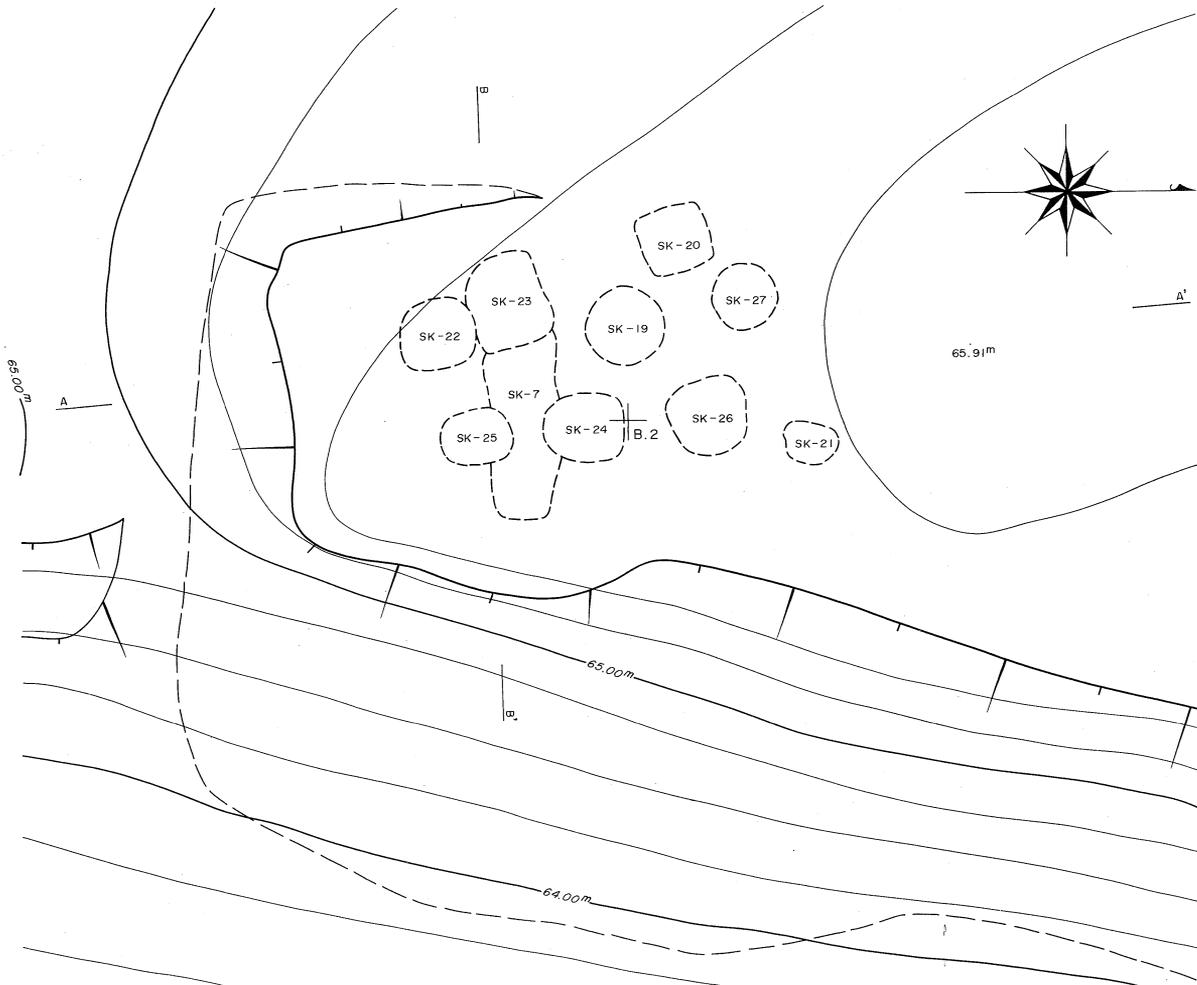
5) 5群 (第84図295~300)

S K-13とS K-7に挟まれた範囲から出土した1群である。295、296は壺または甕の口縁部、297は器台の受け部、298は壺または甕の底部である。299は小型の壺の胴部か。300は台付き鉢の脚台部か。295は口縁部に3条の平行線がめぐり、内面にミガキが施されている。297は鼓形器台で、口縁端部に平行線がめぐり、内面はミガかれている。298は上げ底気味である。299は偏平な胴部を呈し、内面ケズリ、外面調整不明である。300は脚台端部に1条の沈線がめぐり、脚台内面はケズっているが、胴部内面はナデている。295、296は青木のⅡ期、297は青木のⅢ期の古段階に比定される。

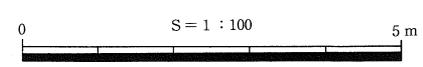
6) 6群 (第85図301~310)

S K-8の北西側で出土した1群である。301、302は同一個体の壺、303は301、302とセットになると思われる小型器台、304は器台の受け部、305、306は器台の脚台部、307は小型の壺の口縁部、308~310は丹塗りの高坏の脚部である。304~306は青木のⅢ期の古段階に比定される。

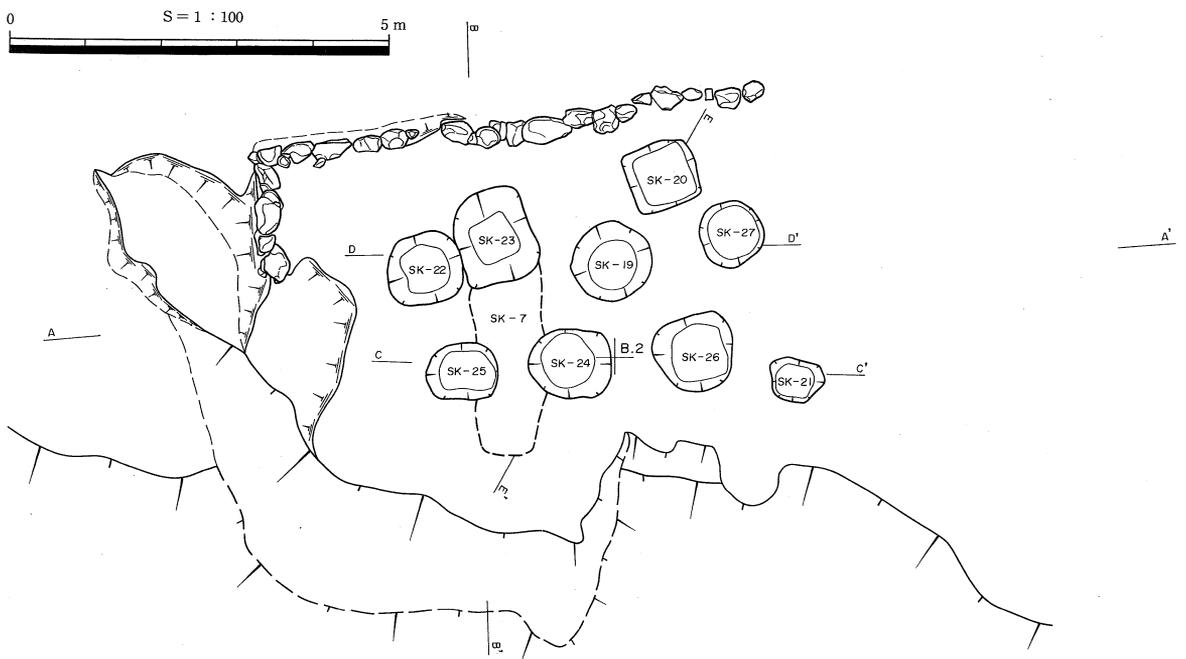
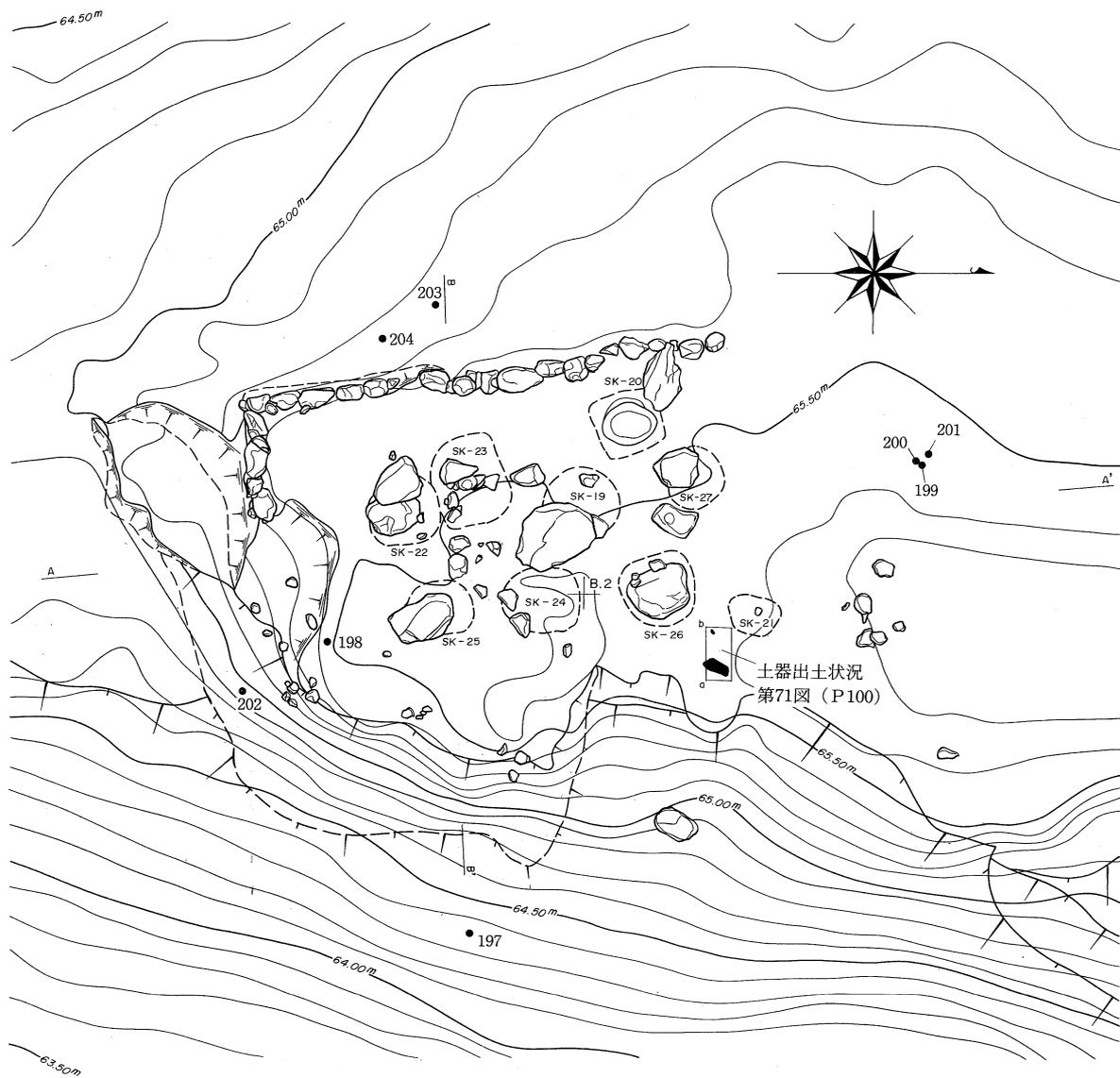
301~303は吉備系の土器で、胎土からみて搬入品であると思われる。301、302は、山陽地方で細頸壺と呼ばれるものの口頸部と胴部で、外面と口縁内面を丹塗りしている。301は、細い頸部が外反して口縁部で大きく開く形態を呈する。頸部内面にシボリ痕がみられ、頸部外面に螺旋条に引かれた沈線がめぐり、302は偏平で算盤玉様の器形を呈し、底部は平底で高台気味である。胴部に2条の突帯がめぐり、上段の突帯は端部が上向き、下段のものは端部が下向きである。内面ケズリ調整だが、胴部下半に比して上半はケズリの単位が細かいようである。303は、外面と内面の受け部部分が丹塗りされている。外面は、丹塗りに下に縦方向のミガキが観察され、内面は受け部がミガキ調整、脚部以下はケズリである。口縁端部外面はナデており、脚部端部外面には2条の凹線がめぐり、脚部には縦に2段の穿孔が3方向に確認できるが、欠損のためもう1方向については不明である。穿孔は焼成後に行われており、外面側から敲打している。301~303については、小型特殊壺、小型特殊器台と呼ばれることがあるが、「特殊」という名辞の使用については、慎重な検討にきずべきであると思われる。ここでは細頸壺、小型器台と呼称する。山陽地方の編年では鬼川市Ⅱ式に相当し、青木のⅢ期古段階に併行するものとみられる(註5)。



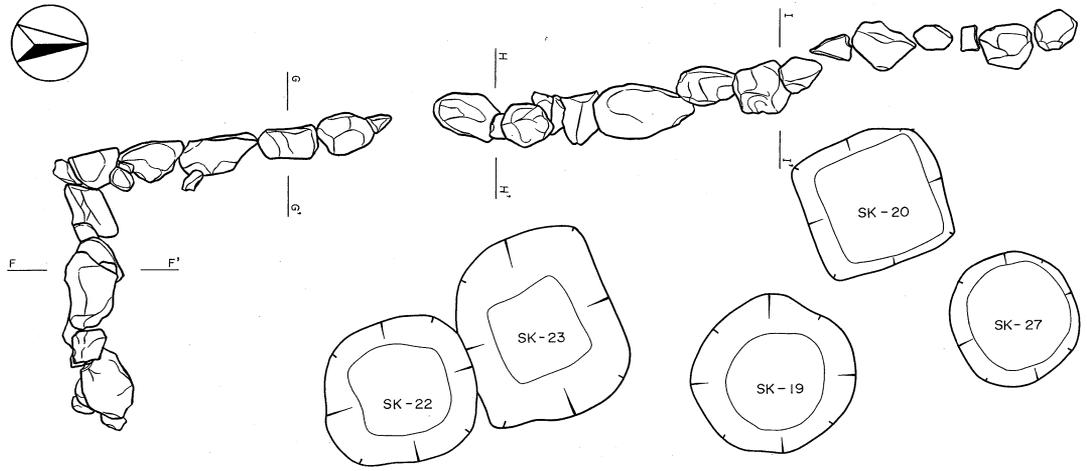
- ① 表土
- ② 赤橙色土
- ③ 橙茶褐色土
- ④ 暗橙茶褐色土
- ⑤ 暗橙茶褐色土 (④より暗い)
- ⑥ 橙褐色土



第59図 SX-1 調査前地形実測図及び断面図

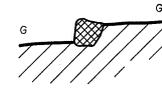
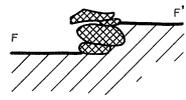


第60図 SX-1 検出状況実測図及び完掘状況実測図



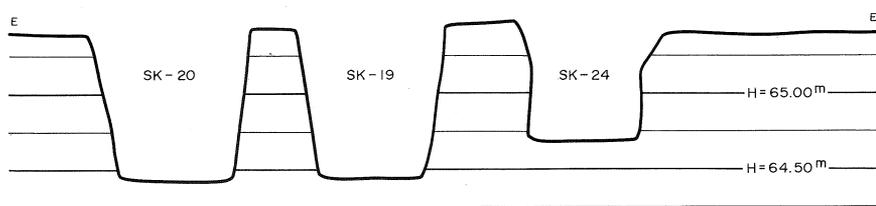
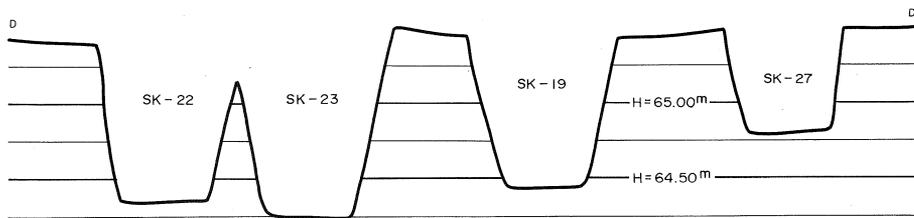
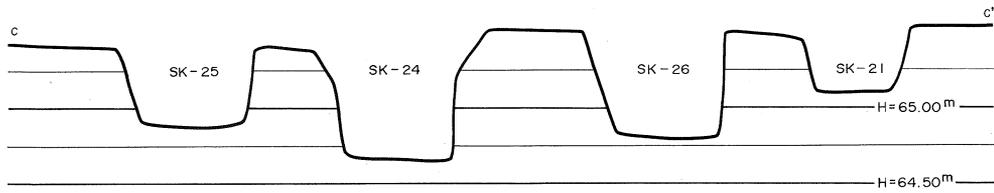
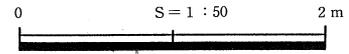
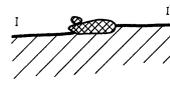
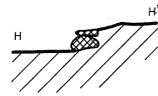
H=65.80m

H=65.80m

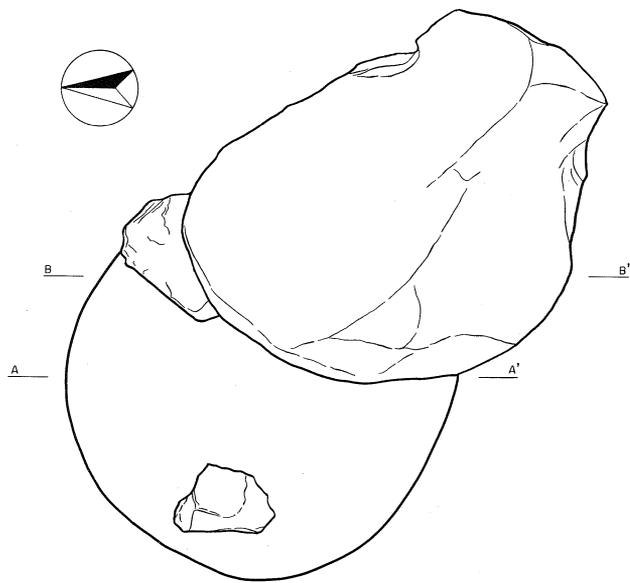


H=65.80m

H=65.80m

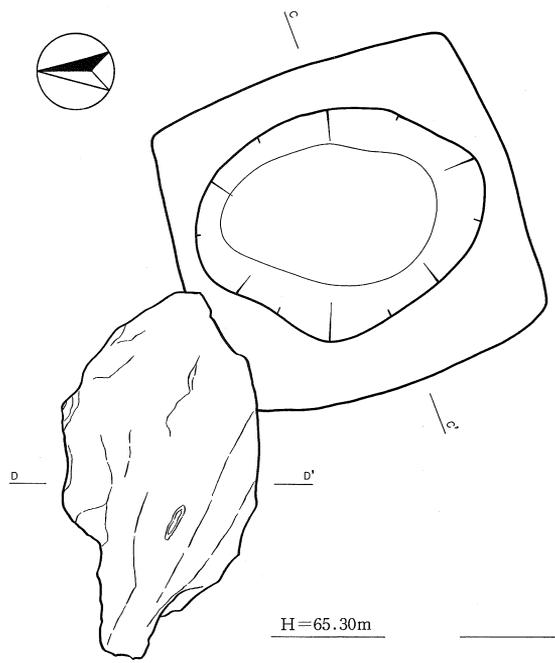
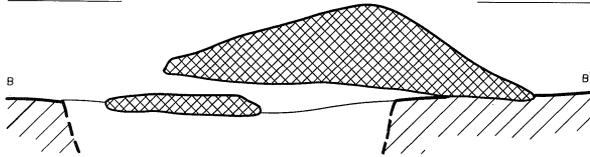


第61図 SX-1 基壇状石列実測図及び断面図



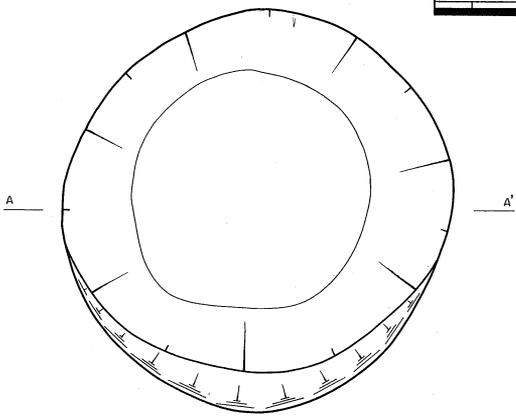
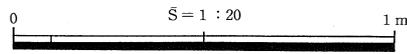
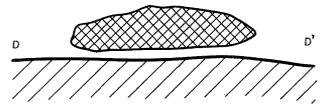
SK-19

H=65.80m



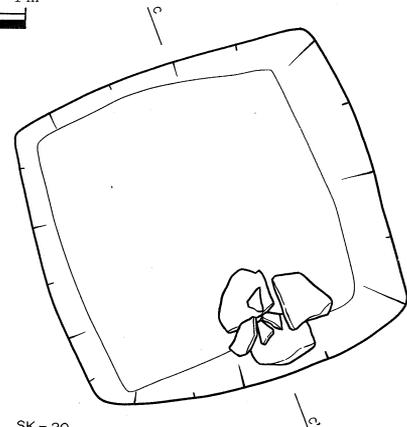
SK-20

H=65.30m



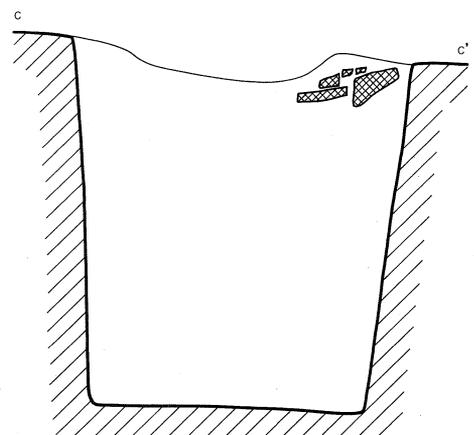
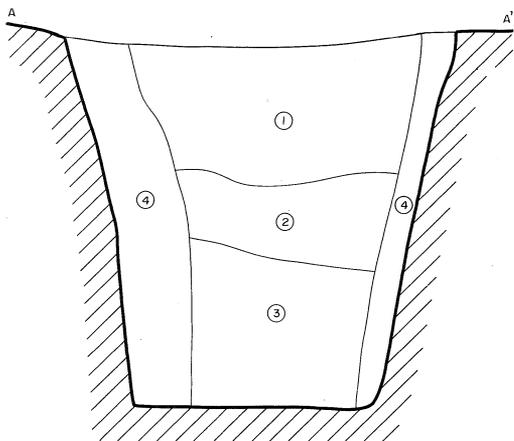
SK-19

H=65.60m



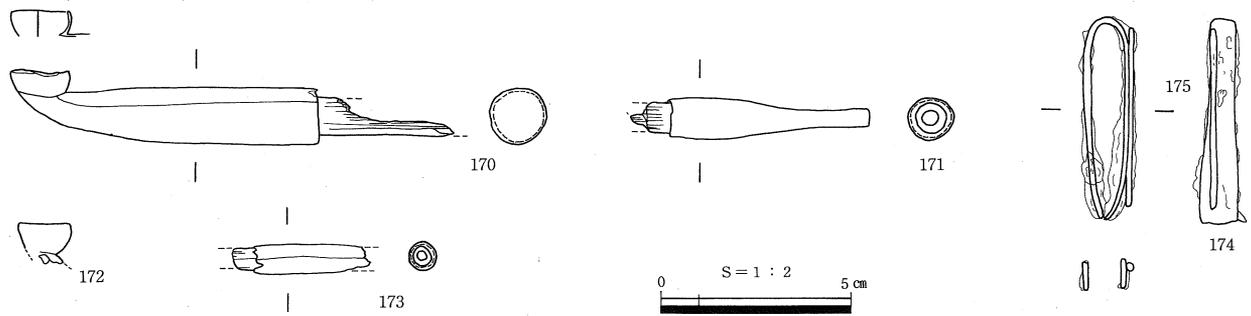
SK-20

H=65.60m



- ① 黄茶褐色土
- ② 赤茶褐色土
- ③ 暗赤褐色土
- ④ 明茶褐色土

第62图 SK-19、20实测图



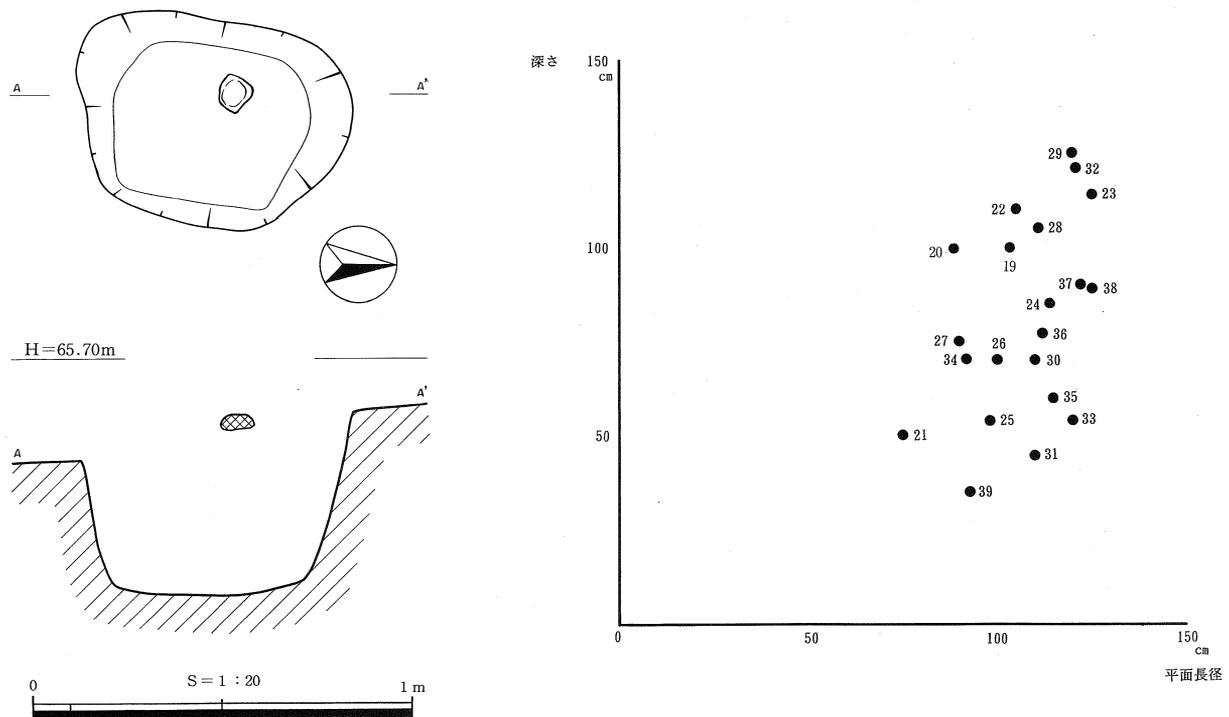
第63図 SK-19出土遺物実測図

7) その他 (第85図311~313)

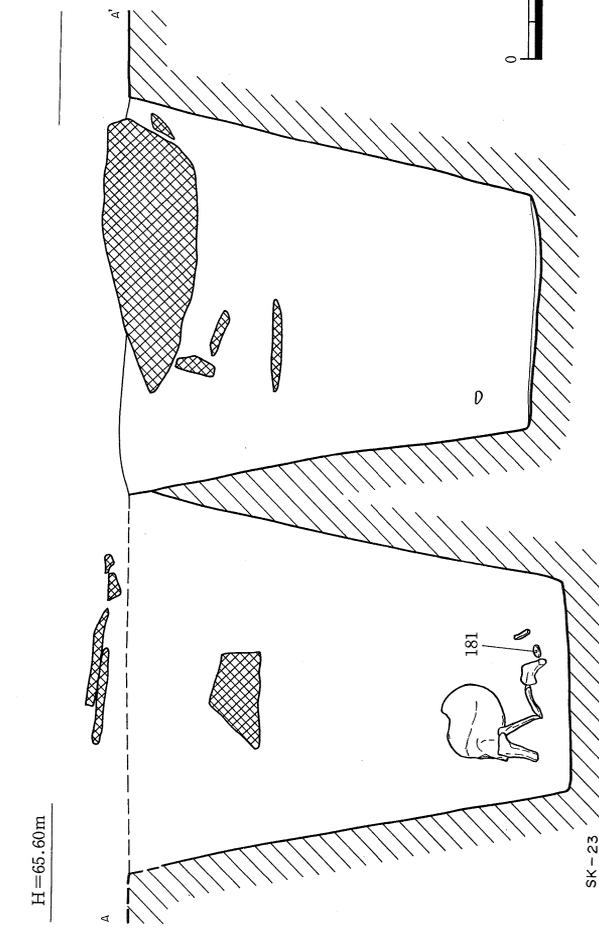
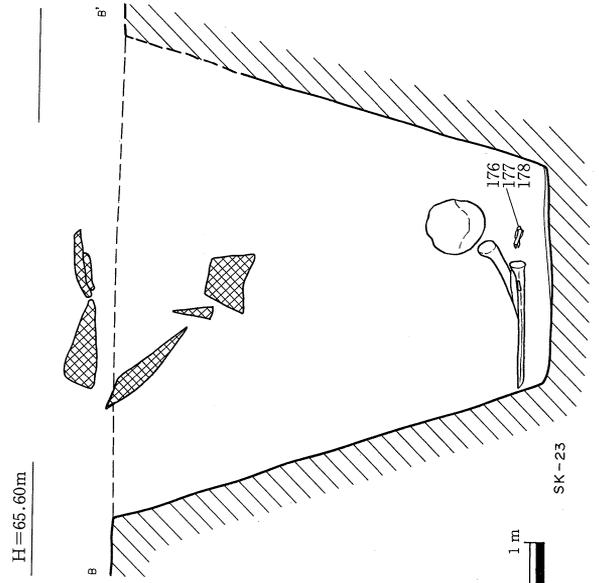
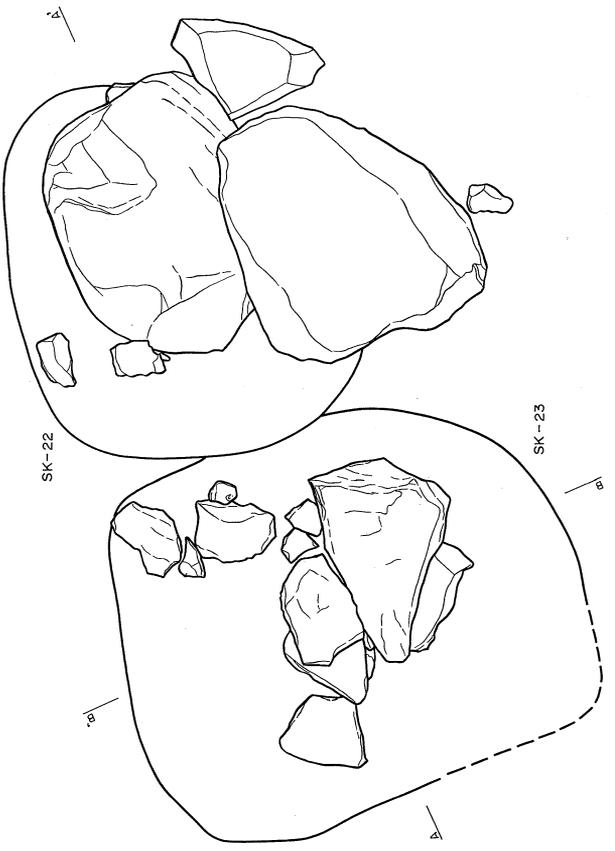
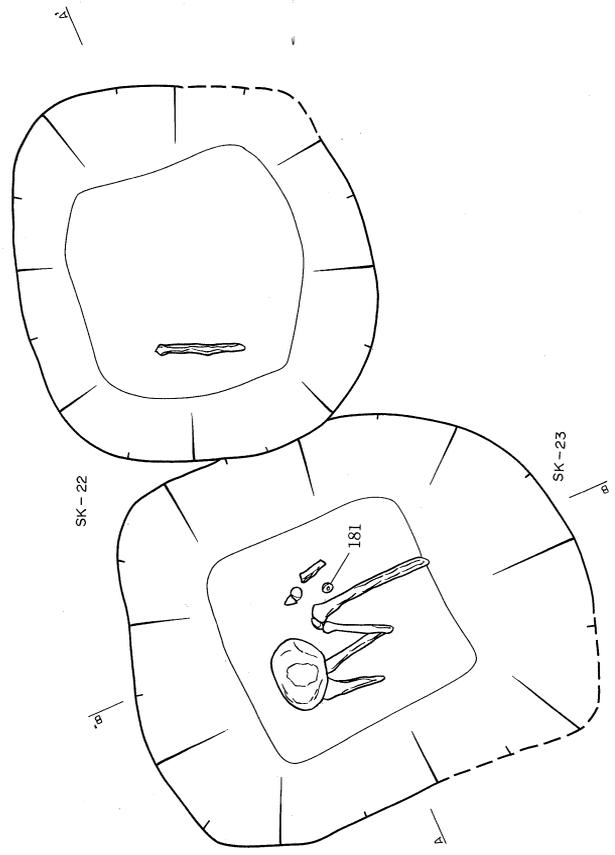
上述の各土器群の出土範囲に収まらない出土状況を示すものがある。311、312は同一個体で、吉備系の長頸壺であるが、搬入品かどうかは定かでない。SX-1の西側で出土した。311は繰り上げ口縁の端部に4条の凹線をめぐらせ、頸部に6条の凹線を施す。外面縦方向のハケ調整で、内面は口頸部がナデ、胴部が横方向のケズリ調整である。312は平底の底部で、外面縦方向のハケ調整、内面斜め上方向へのケズリ調整である。山陽地方の編年では、鬼川市I式に相当し、青木のII期に併行するとされている。313はSK-1の北東側で出土した。器台あるいは高坏の脚で、脚裾部に凹線がめぐり、内面をケズリ調整している。中期に遡るもので、本調査地最古の遺物である。

②古式土器 (第86図314~318・写真図版42)

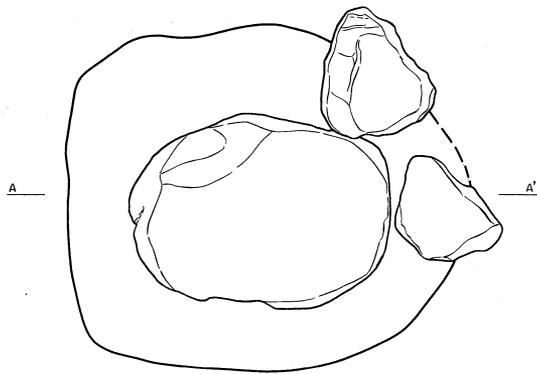
この土器群は、実は本調査地内から1点も出土していない。田住第8遺跡のSS-1の上方に接して設定されたサブトレンチT-1から出土したものである(第114図)。本調査地の西側斜面部にあたり、出土状況が本調査地方向からの転落であることが明白であったので、田住桶川遺跡の遺物として扱った。314~316は壺の口頸部である。315は頸部に突帯がめぐるもの、316は頸部に有軸羽状文を施し、内面横方向にハケ調整するものである。317は、316と同一個体と思われ、胴部内面に横方向のハケ調整が施されるものである。318は甕で、頸部に有軸羽状文を施し、胴部外面に横方向にハケ調整、内面横方向にケズリ調整するものである。胴部は到卵形を呈する。316~318は大型品と言えよう。これらの土器は、青木のVII期の古段階に比定される。



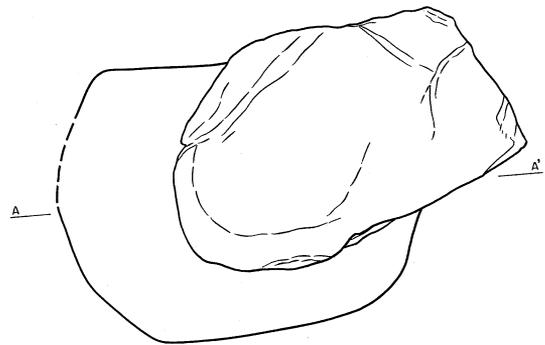
第64図 SK-21実測図及び近世墓の検出深度と規模の分布 (番号は遺構番号、SK-を表わす)



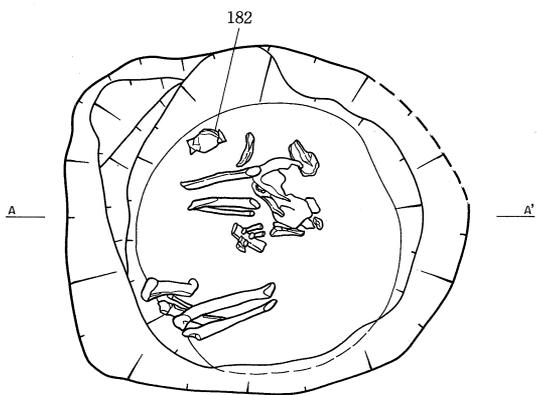
第65图 SK-22、23实测图



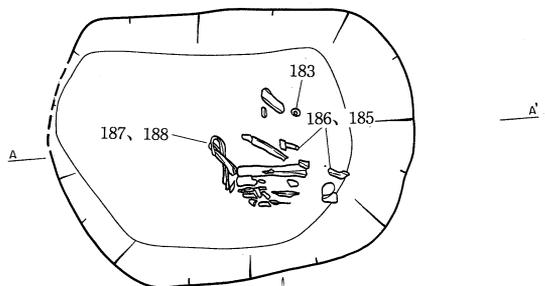
SK-24



SK-25



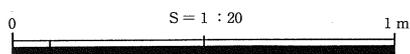
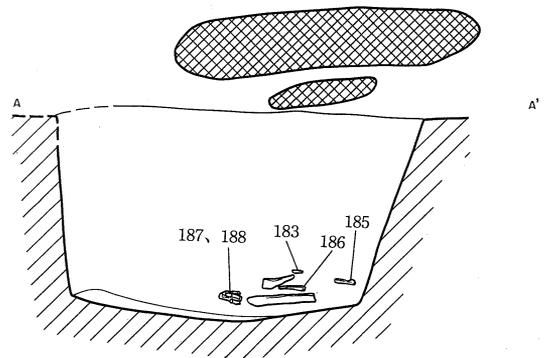
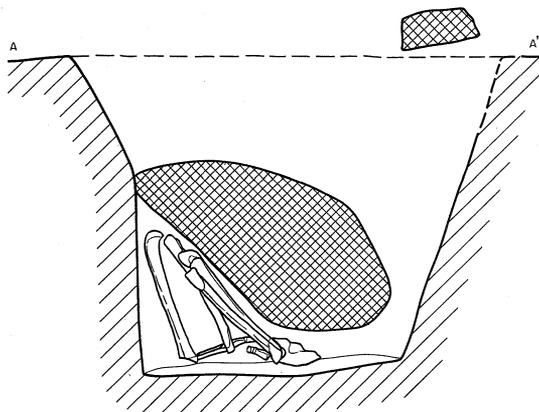
SK-24



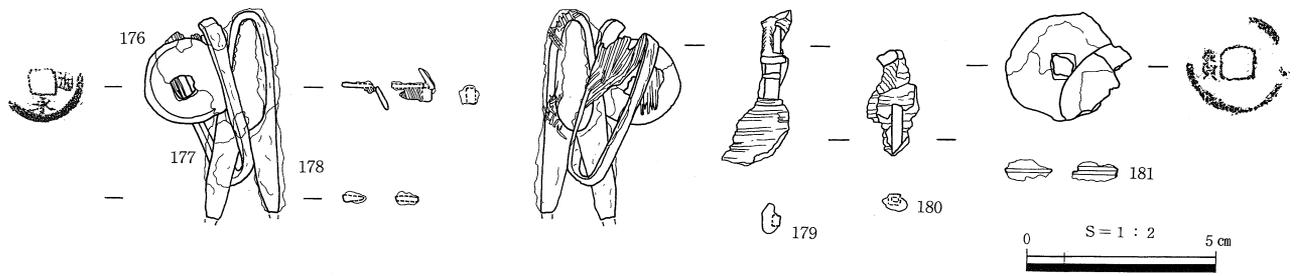
SK-25

H=65.80m

H=65.80m



第66图 SK-24、25实测图



第67図 SK-23出土遺物実測図

③須恵器・土師器（第87図319～329）

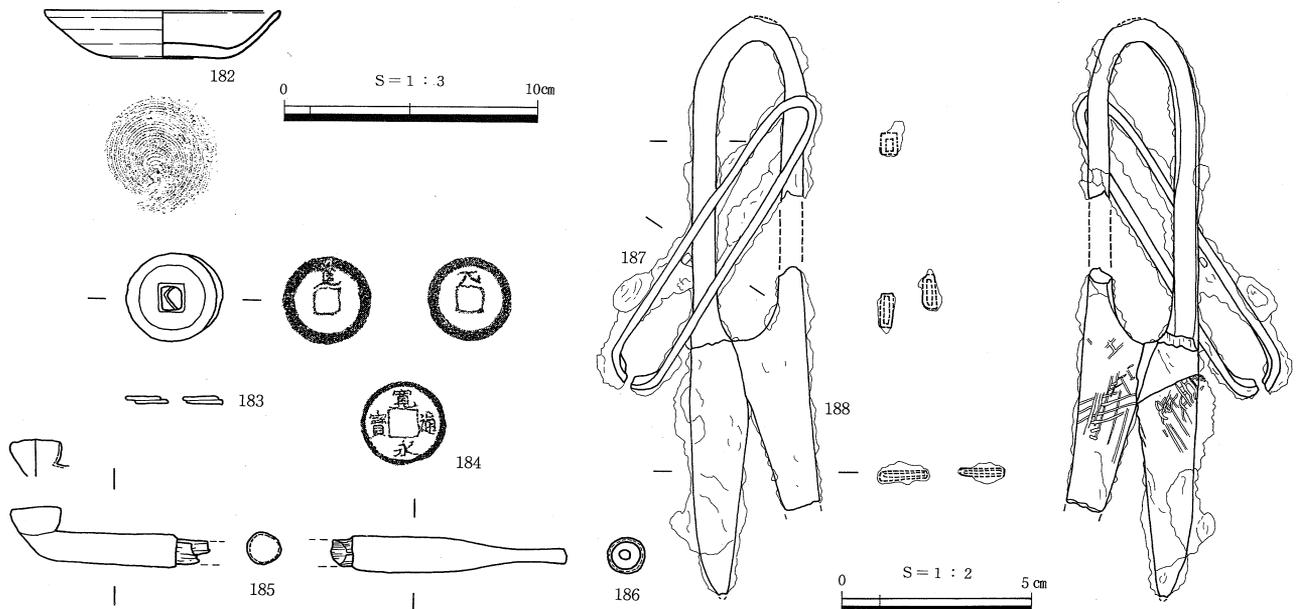
須恵器は、全てX-70,370ラインより南側で出土している。319は坏蓋で、320、321は坏である。322は短頸壺で、緑灰色の自然釉がかかる。323は壺の底部で、底部にカキメがみられる。324～328は甕の胴部片である。329は内外面丹塗りの土師器の坏である。これらの土器の時期については、概ね6～7世紀代と考える。これらの土器のうち、319、320、322について胎土分析を行った。320については、島根県東部地域の須恵器の領域に近いとの結果を得た。319、322については、陶邑領域に近いとされ、畿内からの搬入品の可能性が指摘された。

④陶磁器・土師質土器（第87図330～333）

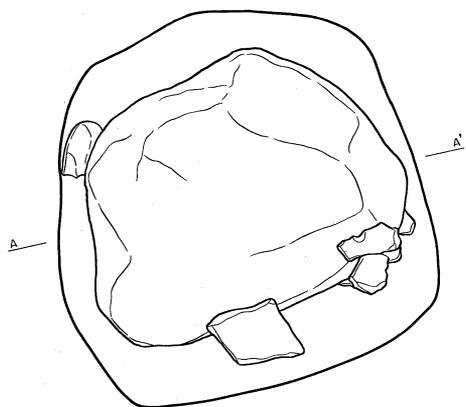
330は産地不詳の青磁、331は肥前系の染付陶器で、18世紀代に比定される。332は土師質土器の小皿、333は16世紀代の越前焼の大甕である。330、333はT-1からの出土である。

以上概観したように、4段階の土器相がみられるが、さらに細分は可能である。①の弥生土器は、搬入土器も含めて、青木のⅡ期とⅢ期の古段階とに分けられる。青木Ⅱ期のものは調査区ほぼ中央部に、Ⅲ期古段階のものは北側寄りに分布が偏っているように見受けられる。②の古式土師器については、T-1からの出土であるが、その下層から330、333が出土している。少なくとも16世紀代以降に大規模な攪乱が調査地内に加えられ、古墳時代前期以降の遺構が壊されていることになる。SK-16については、小児石棺に鉄刀を副葬する例は、古墳時代後期以降にみられ、須恵器を含む層に墓壙を掘り込んだことと矛盾しない。位置的にみて、石棺墓は中心主体とはなりえず、墳裾の副次主体的である。よって、石棺墓の本来の中心主体は、併せて16世紀代以降に破壊されているものと思われる。

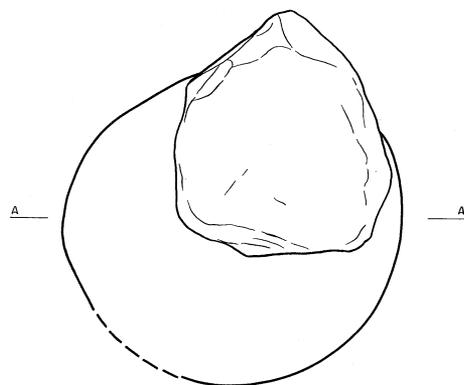
以上のことから、調査地中央部に分布するSK-9～14は、弥生時代後期の青木Ⅱ期の段階、調査地北側に分布するSK-1～6、8は、青木Ⅲ期の古段階と想定してみた。SK-15～18は古墳時代後期の段階と思われ、古墳時代前期と後期の遺構が後世の破壊によって消失したものと推定される。



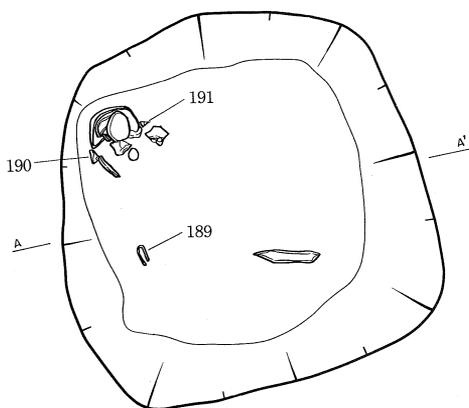
第68図 SK-24、25出土遺物実測図



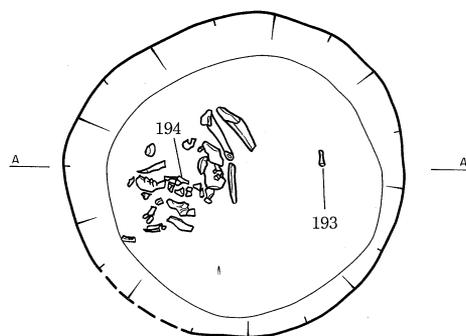
SK-26



SK-27



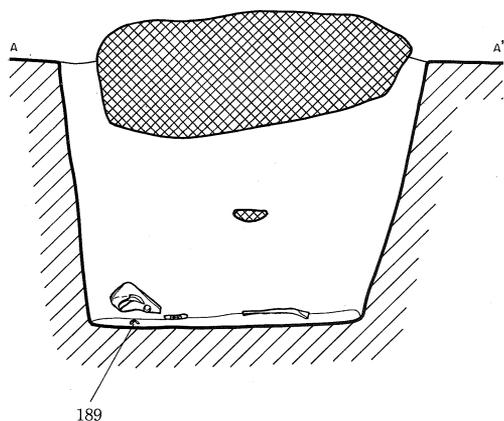
SK-26



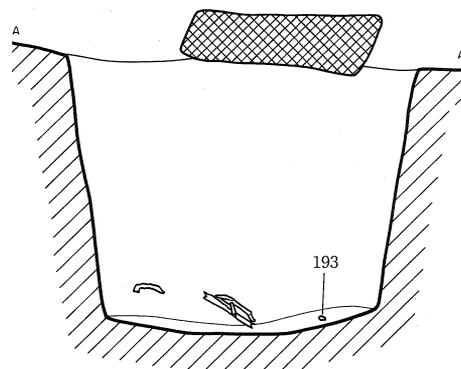
SK-27

H=65.90m

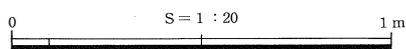
H=65.90m



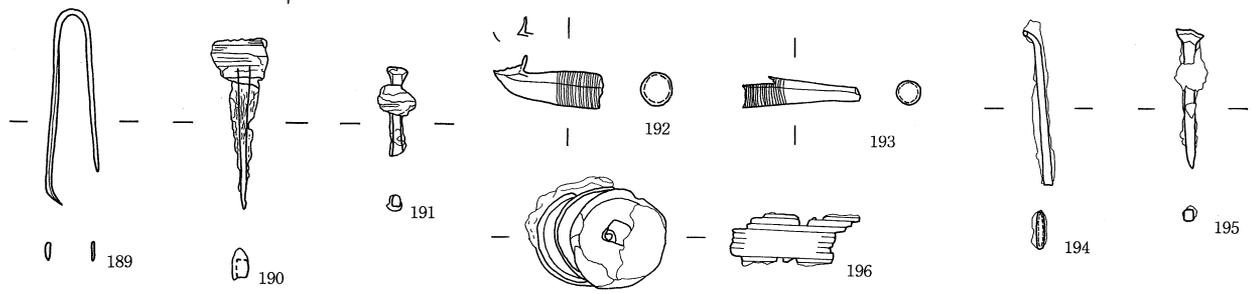
189



193

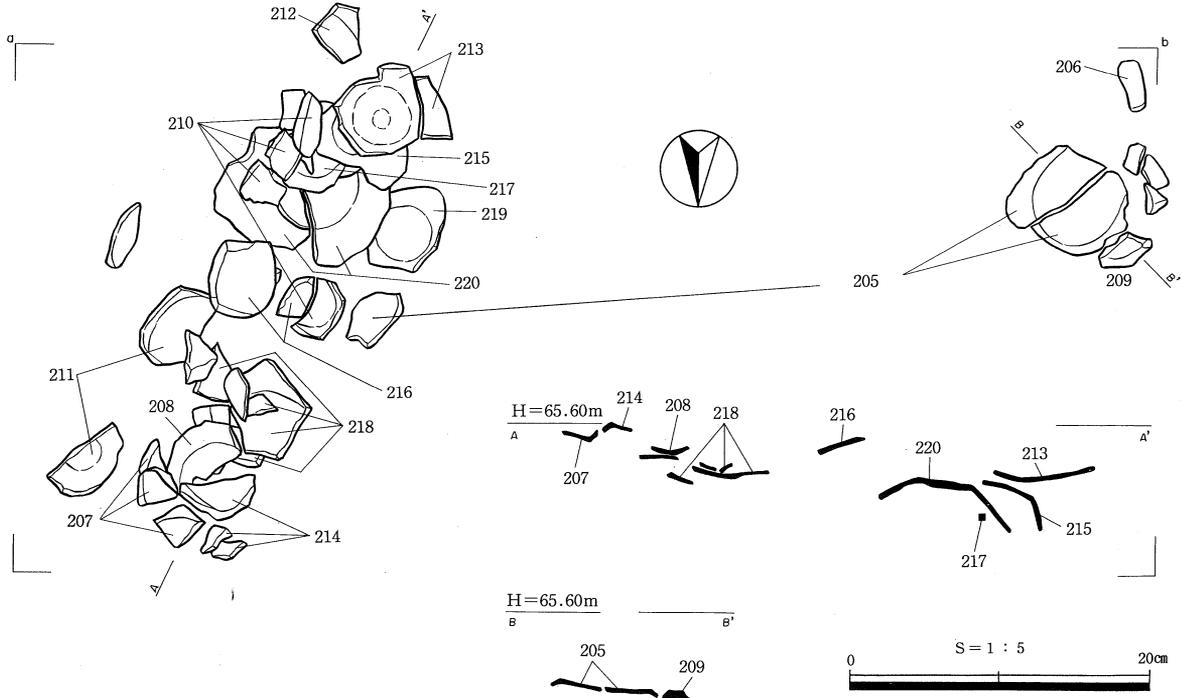


第69图 SK-26、27实测图

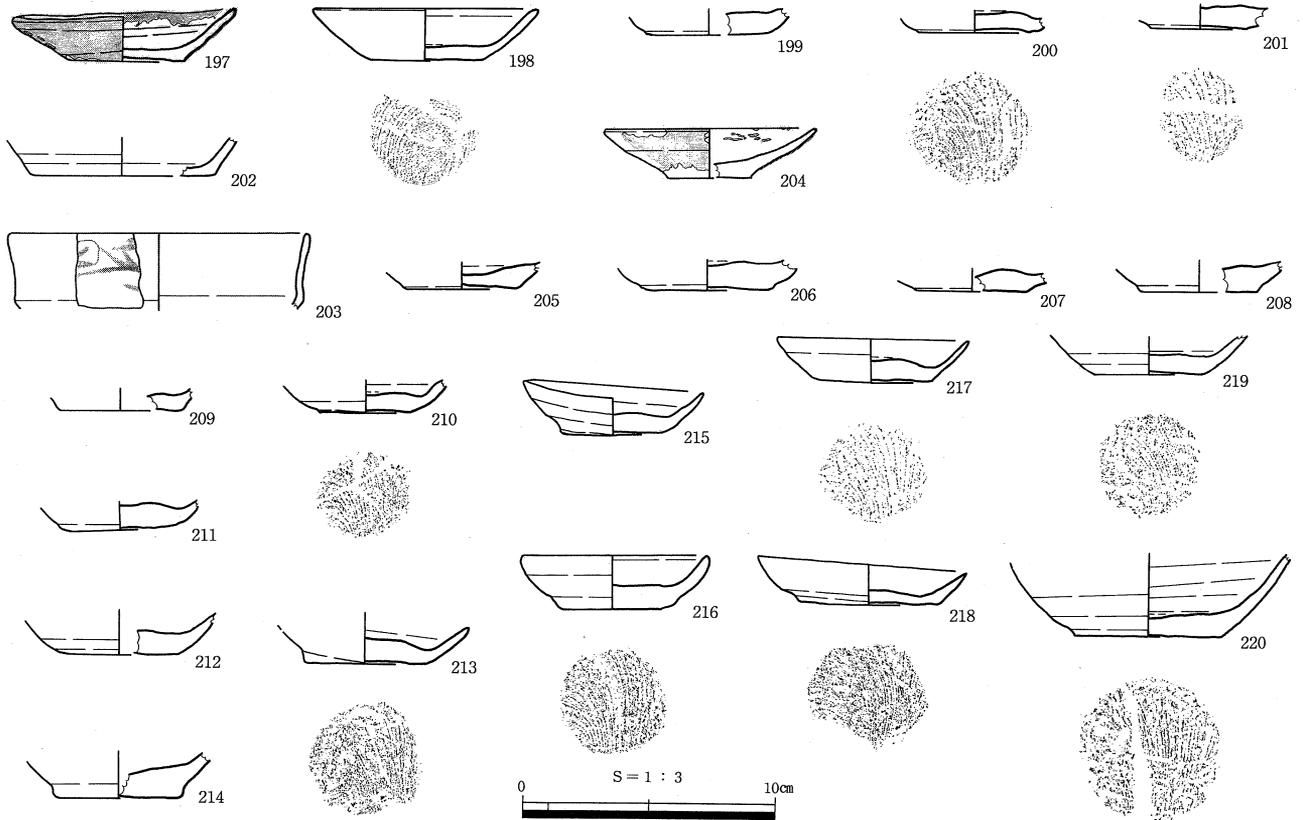


第70图 SK-26、27出土遺物実測図

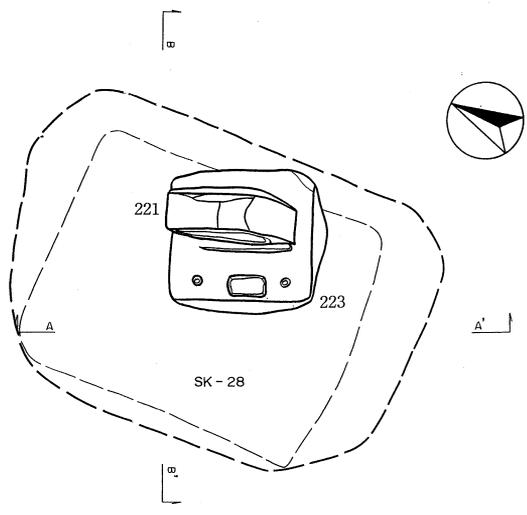
S = 1 : 2
0 5 cm



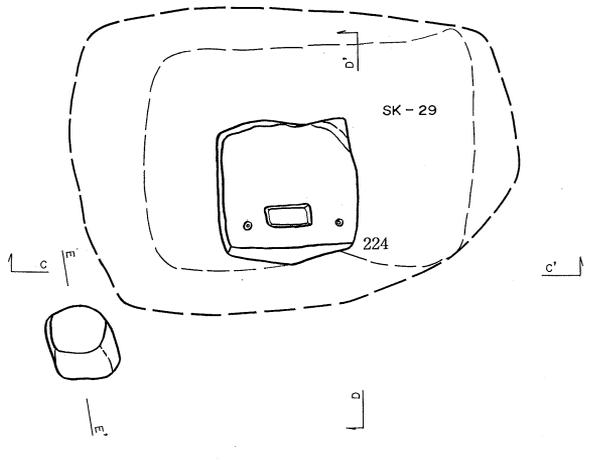
第71图 SX-1 土器出土状況実測図



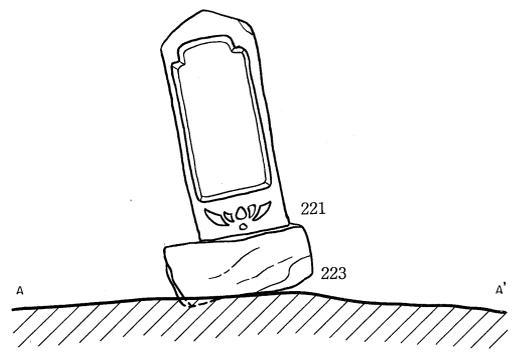
第72图 SX-1 出土遺物実測図



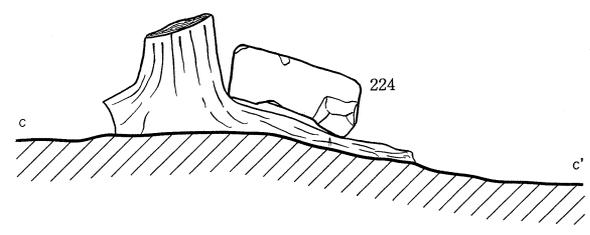
H=65.80m



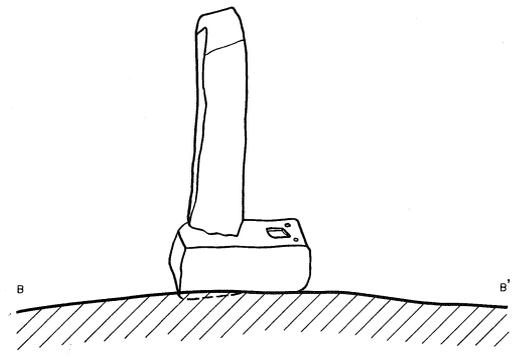
H=65.80m



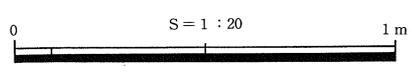
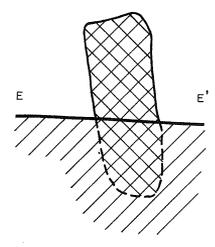
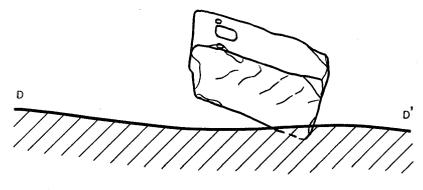
H=65.80m



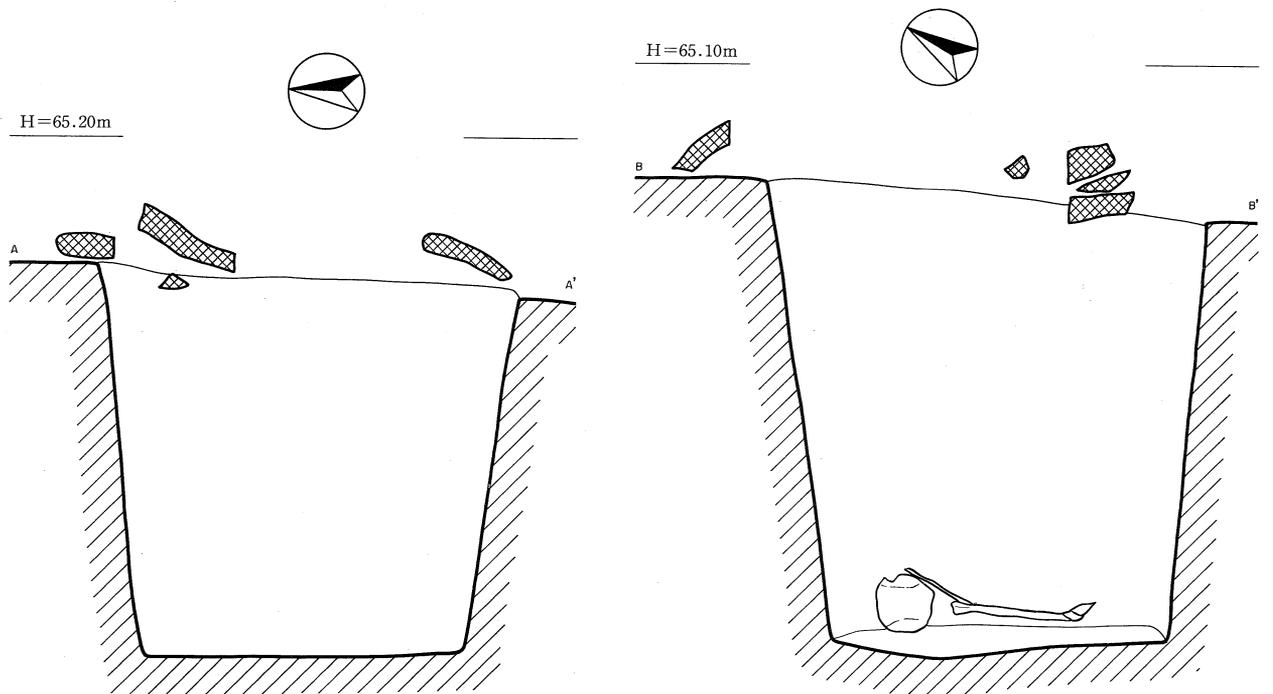
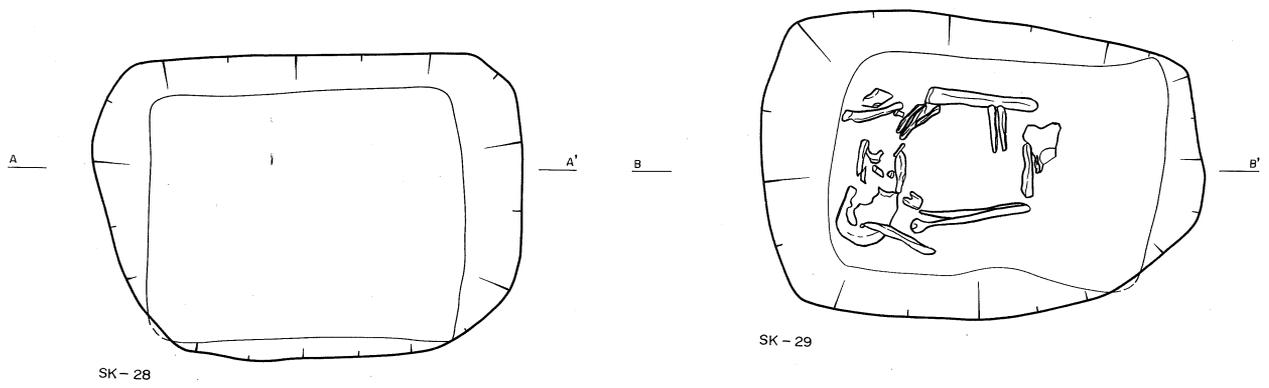
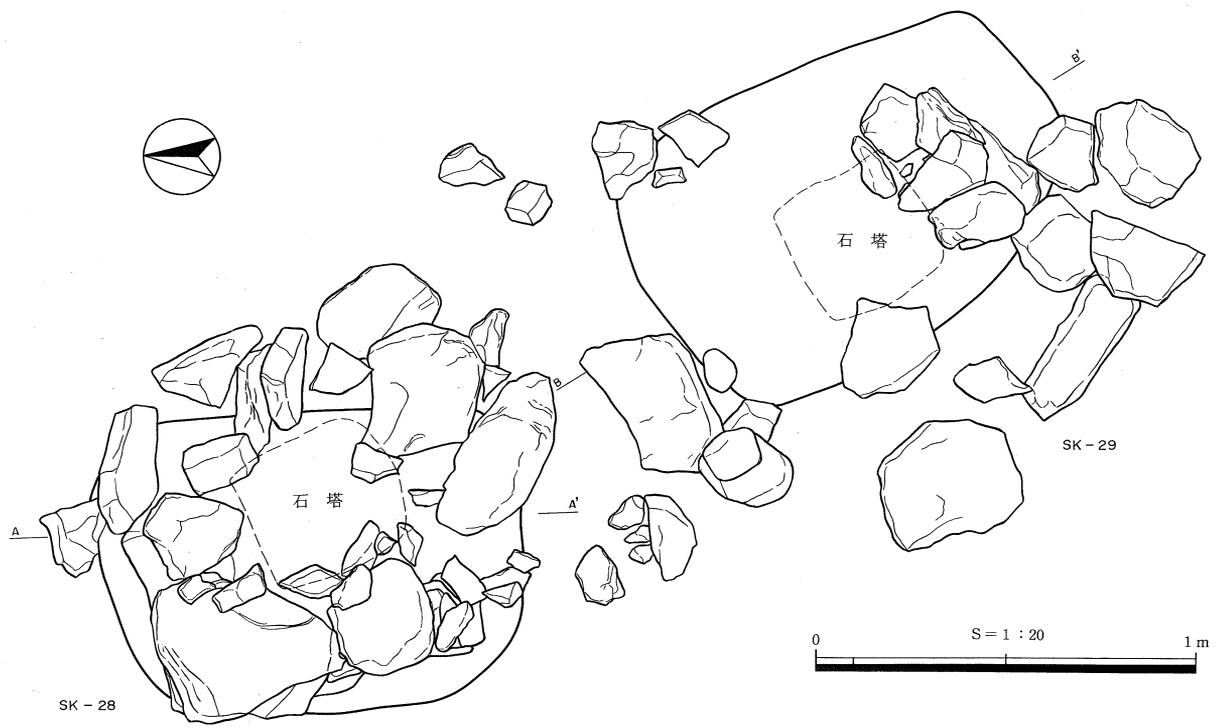
H=65.80m



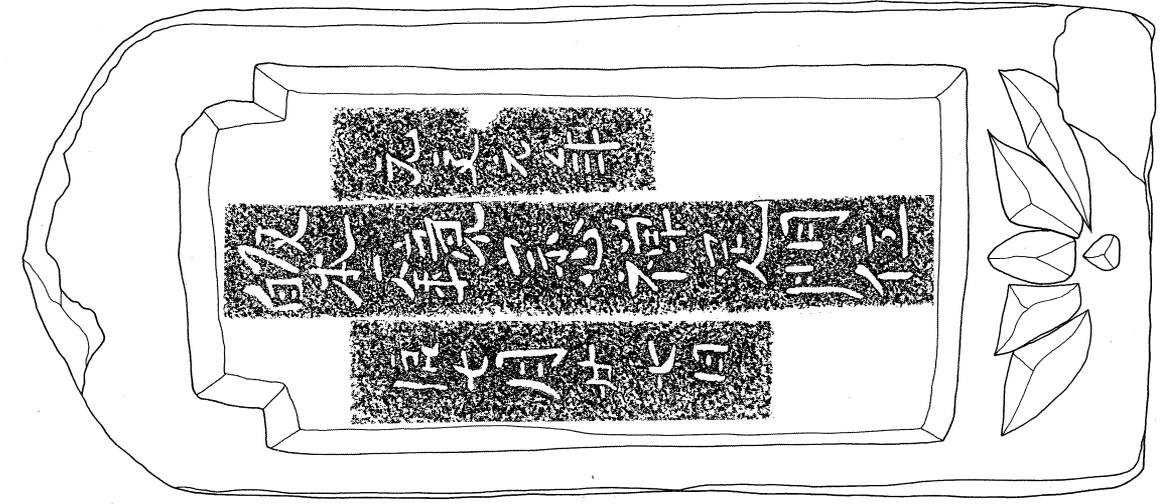
H=65.40m



第73図 SK-28、29石塔検出状況実測図

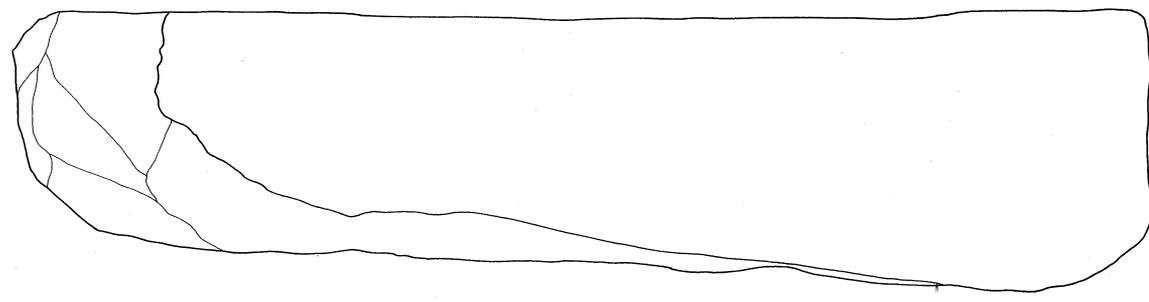


第74图 SK-28、29实测图



222

(SK-29)

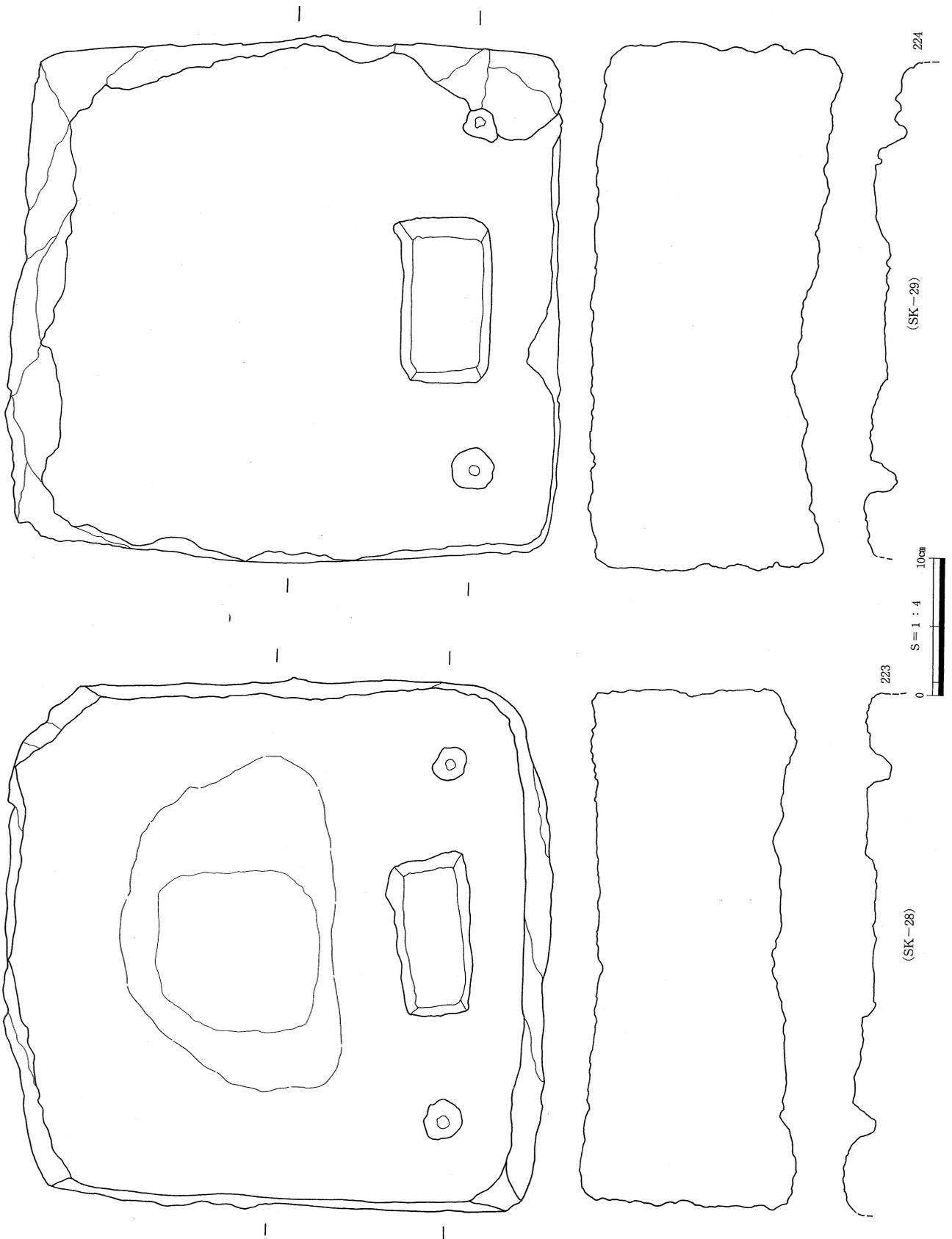


221

(SK-28)



第75図 SK-28、29石塔実測図1



第76図 SK-28、29石塔実測図2

・近世墓 (SK-19~39)

調査地内からは21基の近世墓を検出し、その内半数の11基から人骨が出土した。これら近世墓は南北にはしる尾根上の頂部に分布しており、その立地状況から大きく二つのグループに分かれる。ひとつは調査区北側にある石列によって区画された墓域 (SX-1) 上につくられたグループ (A群)、もうひとつは調査区ほぼ中央にある、石塔をもつものから南に拡がって分布するグループ (B群) である。以下、両群に分けて記述していく。

①A群 (SK-19~27)

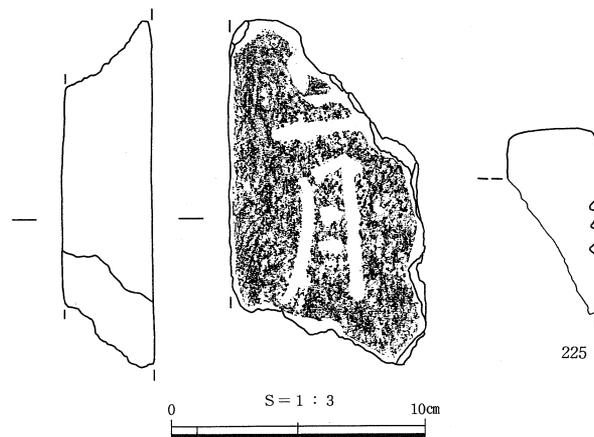
SX-1上につくられた近世墓は9基である。これらは約10~30cmの高さに積まれた石列によって区画されている。この石列 (第61図) は西で6.8m、南では1.8mのみ検出したが、南東部は攪乱を受けたものであり、東側斜面部まで続いていた可能性がある。北・東に石積みはなかった。SX-1の東側はやや急な傾斜面となる (第59図B-B') ことから石を積んで区画する必要がなかったものと思われるが、北側になぜないかはわからない。西列が北へ行くほど低くなり途切れていることと関連があるろうか。SX-1は尾根の中央からやや東に設定され墓域を決定した後まず、南・西部において地山を10~30cmほど削り上・下段を平坦に均している (第59図)。そして長径30~50cmほどの礫を積む (写真図版23)。厚さ10cmほどのものであれば数段に重ね、20cmくらいであればひとつだけ置いている。

SX-1にある墓壇群の上面には、長径約65~115cmと数人がかりで動かさなければならぬような大きな礫が標石としてのついていた。これらは近在する花崗岩や玄武岩で、SK-19 (第62、63図、写真図版24、43、44) 上のものはその中でも最大であった。その礫は墓壇上東半分にかかっており、全体を覆うものではなかった。この墓壇はSX-1内のほぼ中央に位置し、平面形態が円形、直径102cmを測る。深さは検出面から99cm、埋土の堆積状況から直葬ではなく、早桶に入れられて埋葬されたものと思われる。性別不明、壮年から熟年と考えられる歯2本のみが出土した。プライマリーな状態ではなかったが副葬品と考えられる煙管2本 (170・171、172・173) と毛抜き (174)、針 (173) が1点ずつあり、針は毛抜きの右側面に接着していた。170・171はラウを除く真鍮製の完形品で、雁首は長さ8.2cmと大型のものである。継目は雁首をラウ結合部からみて左にあり、脂返しは短く、湾曲をあまりせず火皿へと続くもので、古泉氏の煙管編年 (註6) のV期 (18世紀後半) に相当する。吸い口 (171) は長さが5.2cmと雁首に比べやや小さい。172は火皿と僅かに脂返しが残る。おそらく173がその吸い口であろう。吸い口端部は欠損。170と同様、V期に比定できる。

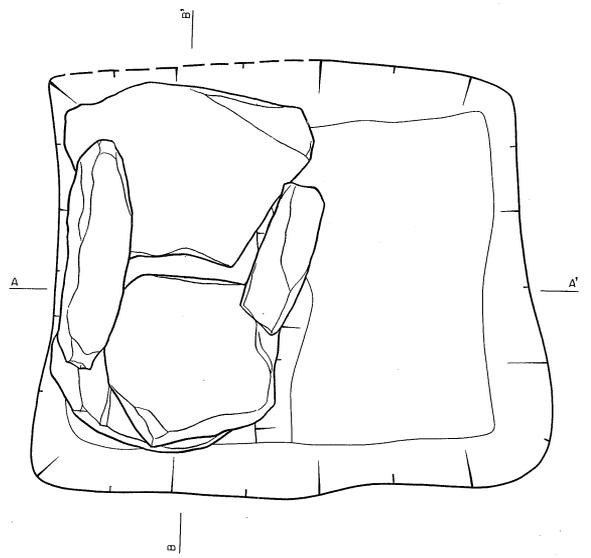
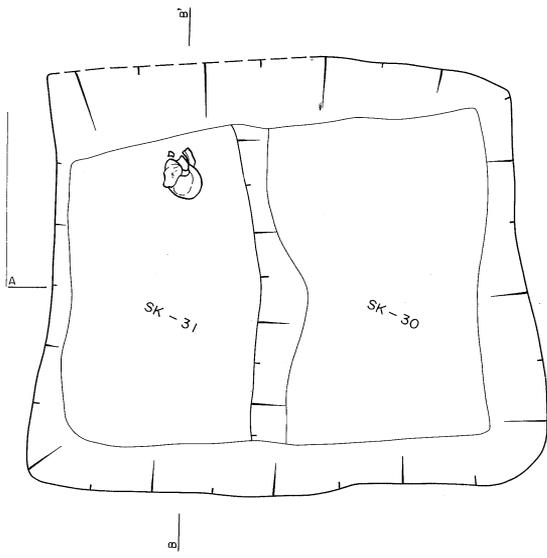
SK-19の西にSK-20 (第62図、写真図版25) は位置する。SX-1の北西隅にあり、墓壇の軸が北からやや西に傾く。プランは一辺89cmの方形を呈し、深さは98cmである。長径約1mの平面楕円形状を呈する礫が墓壇の北西隅にあったが、墓壇上には長径約80cmの楕円形の窪みがあり (第60図)、元はこの位置にあったものと思われる。遺物は出土していない。

SK-21 (第64図、写真図版25) はSX-1の北東隅に位置する。長径70cmのやや長方形を呈するもので、深さは47cmしかなく小型である。このすぐ北には弥生時代後期の再葬墓か小児墓と考えられる土壇墓群 (SK-3~5) があり、それらの規模とSK-21はほぼ同じであるが、埋土の違いから近世墓と判断した。また東側の斜面を2.5mほど下ったところに長径60cmほどの礫があったが、これはこの墓壇上についていたものであろう。遺物は出土しなかった。

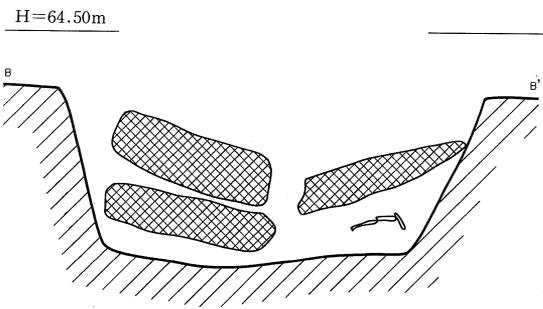
SK-22 (第65図、写真図版25) はSX-1内の南に位置し、その北壁はSK-23の南壁を切っている。長径105cmの方形を呈し、深さは107cmであった。長径75cmを測る礫が2個墓壇上に置かれていたが、そのうちのひとつはSK-23のものであろう。その下からは人頭大の礫が南側に固まってあった。



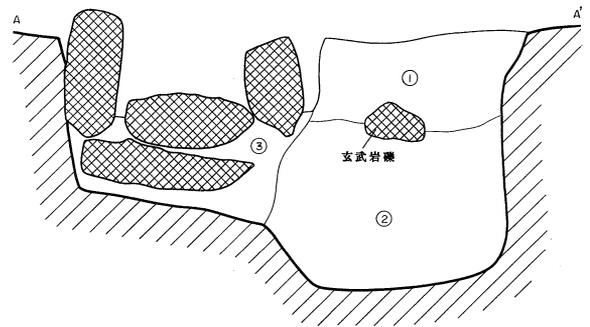
第77図 遺構外出土石塔実測図



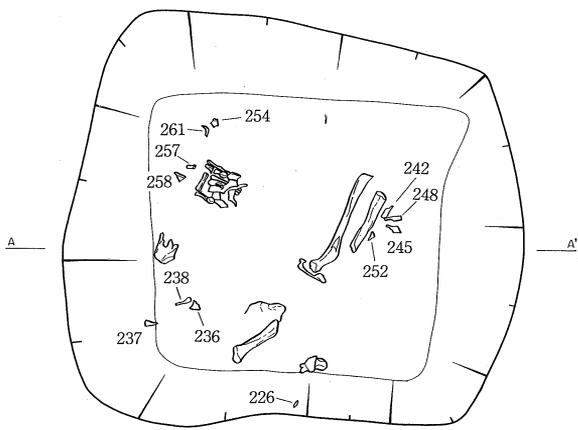
H=64.50m



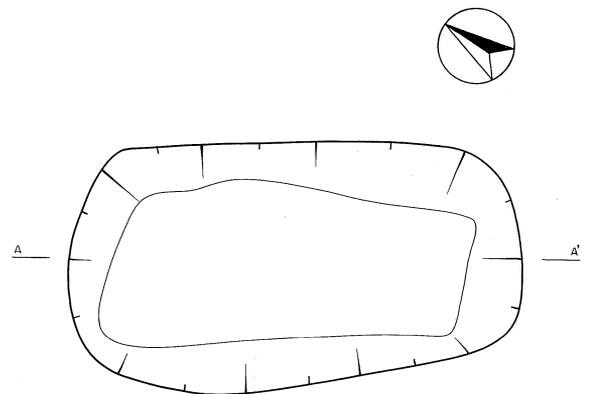
H=64.50m



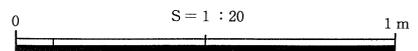
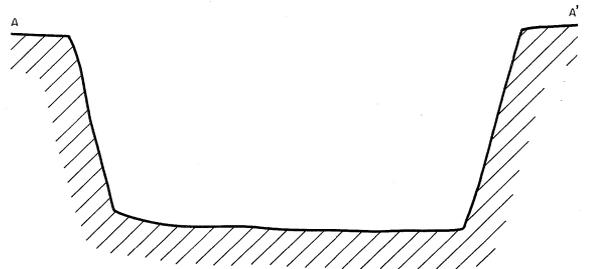
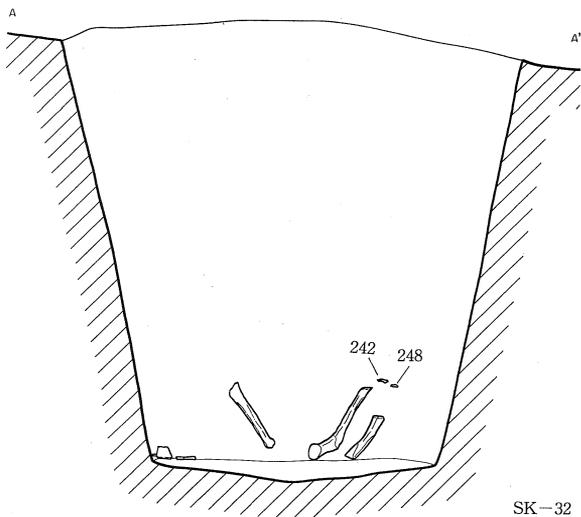
- ① 暗赤褐色土 (風化した玄武岩少量混、ややしまり悪い)
- ② 赤褐色土 (風化した玄武岩混、しまり悪い)
- ③ 赤茶褐色土 (しまり悪い)



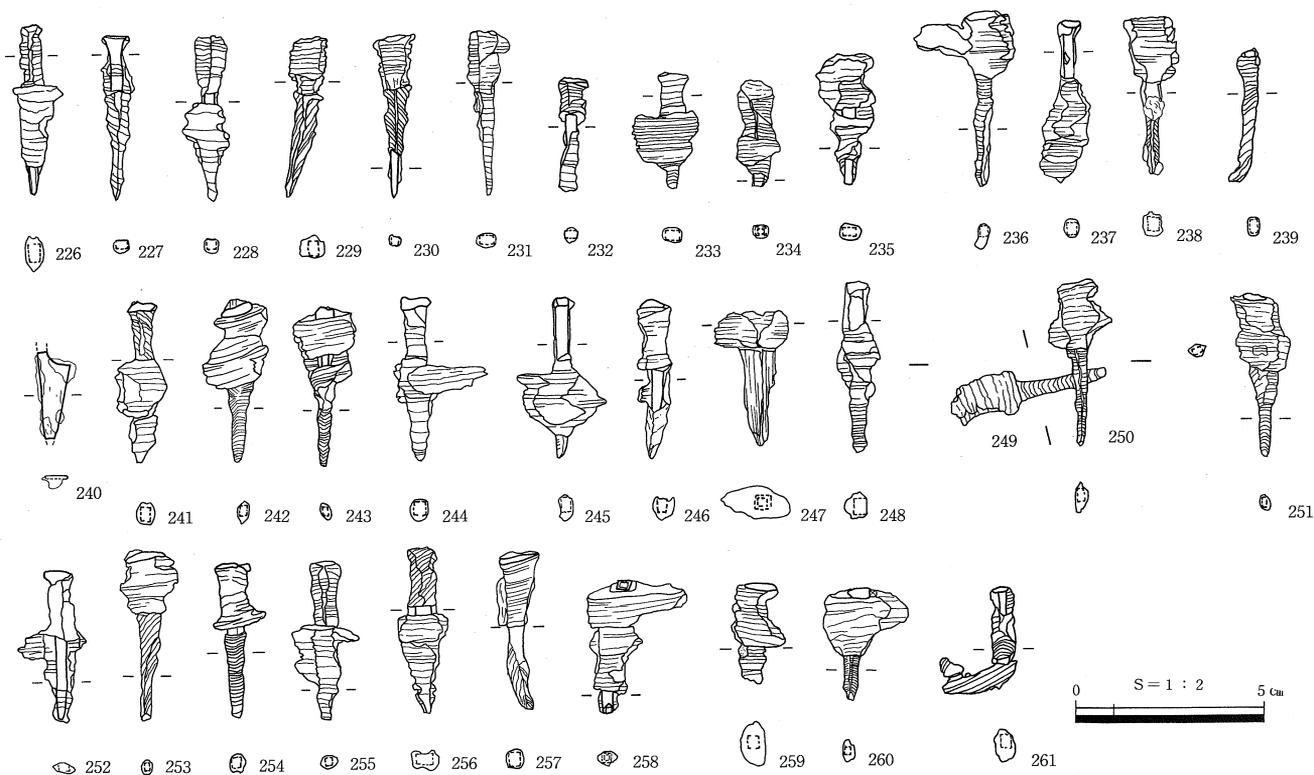
H=64.70m



H=64.60m



SK-32
第78図 SK-30~33実測図



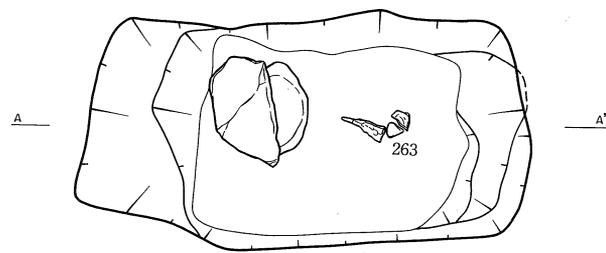
第79図 SK-32出土遺物実測図

墓壙内からは脛骨と下顎の人骨片が出土したのみであり、それは壮年から熟年前半のものであるという。

SK-23 (第65、67図、写真図版26、44) はその東壁が弥生時代後期の土壙墓であるSK-7の西側を切っている。検出面では不明瞭だが、底面は一辺が55cmほどのほぼ正方形を呈していることがわかる。軸はSK-20と同様やや北西を向く。深さは113cm。墓壙上には大きな礫はなかったが、SK-22上にあるうちのひとつがのっていたのであろう。墓壙上面及び内部には人頭大の礫が10個ほどあった。ここからは比較的保存状況のよい人骨が検出された。仰臥坐位をした壮年後半から熟年前半の女性骨で、北西を向いた状態で埋葬されていた。釘が2本(179、180)だけ出土したが、墓壙が方形を呈することからみてこの女性は坐棺に埋葬されたのであろう。副葬品は2枚の鉄銭(181)の他に、鋏、毛抜き、銅銭の3点が接着した状態(176~178)でみつき、この3点には布の痕跡があった。鉄銭は人骨の右側から、鋏などは頭蓋骨のほぼ真下から検出した。この検出状況と布の痕跡があることから副葬品は頭陀袋に入れられ死者の首にかけられていたものと推定できる。銅銭は「○永通○」のみわかった。初鑄年代1636年の古寛永通宝か。鉄銭は「寶」だけしかみえないが、1739年初鑄の鉄製寛永通宝であろう。

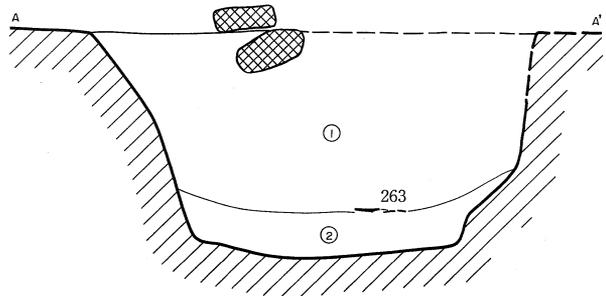
SK-24 (第66、68図、写真図版26、43~45) はSX-1のほぼ中央、B-2杭のすぐ南に位置する。底面は直径71cmの円形を呈す。深さは85cmであった。墓壙上には人頭大の礫が2点のみあったが、墓壙内で人骨に覆いかぶさるような状態が、長径73cmの大礫が出土した。人骨は壮年後半から熟年前半の男性で、西を向いて立膝坐位で埋葬されていた。土師質皿(182)が副葬されている唯一の墓である。ほぼ完形で口径9.4cm、器高1.9cmを測り、底面には回転糸切り痕がのこる。SX-1周辺などで見つかっているものに比べ、明かに薄手で調整が丁寧なものである。他には銅銭2枚(183)が重なって、骨盤の下辺りから出土した。これは表面を合わせているため、裏面のみ観察可能でそれぞれ「元」、「足」とあった。どちらも初鑄年代は1741年である。

SK-25 (第66、68図、写真図版27、43、44) は南北に軸を採り、長軸95cm、短軸70cmの長方形を呈し、深さは55cmと浅い。この墓壙はSK-24とSK-7を挟んで南に位置し、北壁はSK-7を切っている。長径90cm、厚さ15cmほどの大礫が墓壙上面東半分を覆う。墓壙内には底面南半分に固まって解剖学的位置を保たない男性の成人骨があった。こうした人骨の状況と墓壙の浅さから再葬墓である可能性をもつ。副葬品には握り鋏と毛抜きが接着したもの(187、188)、煙管(185、186)、銅銭(184)があった。鋏は鉄製で長さ15.3cm、刃部だけで6.6

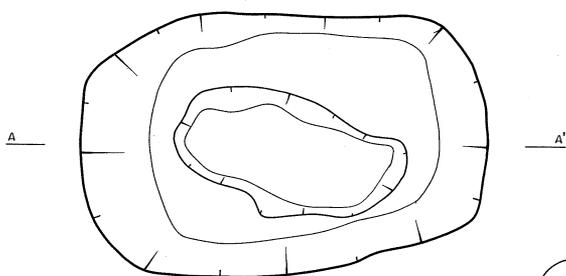


SK-35

H=64.70m

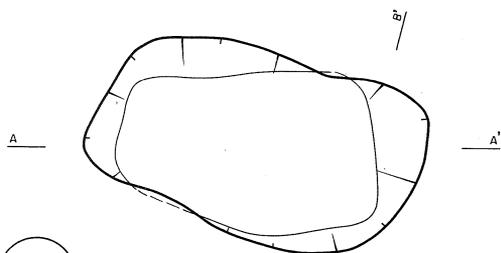
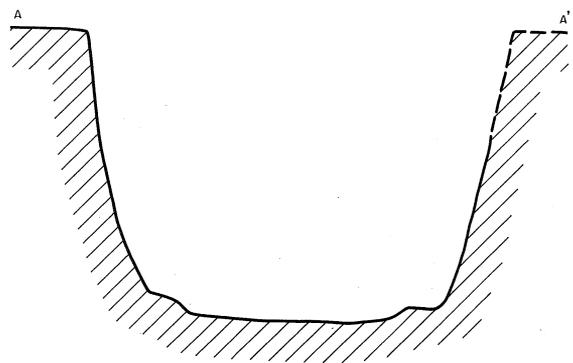


- ① 暗褐色土 (しまり悪い)
- ② 暗黄褐色土 (しまり悪い)



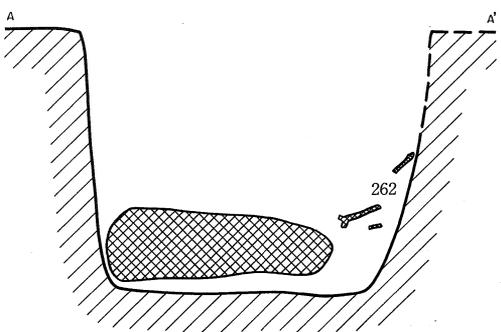
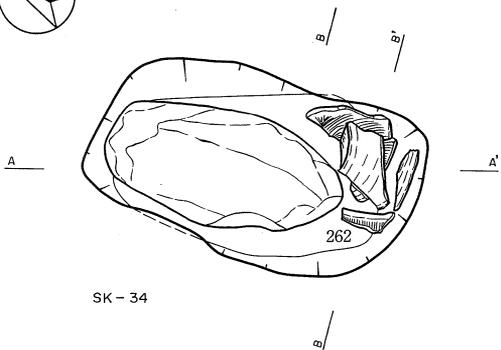
SK-36

H=64.80m

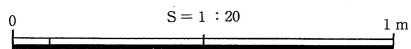
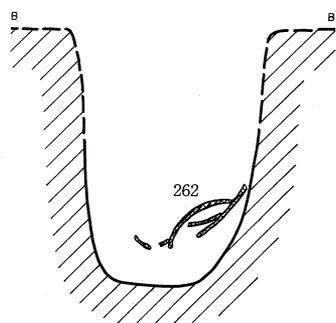


SK-34

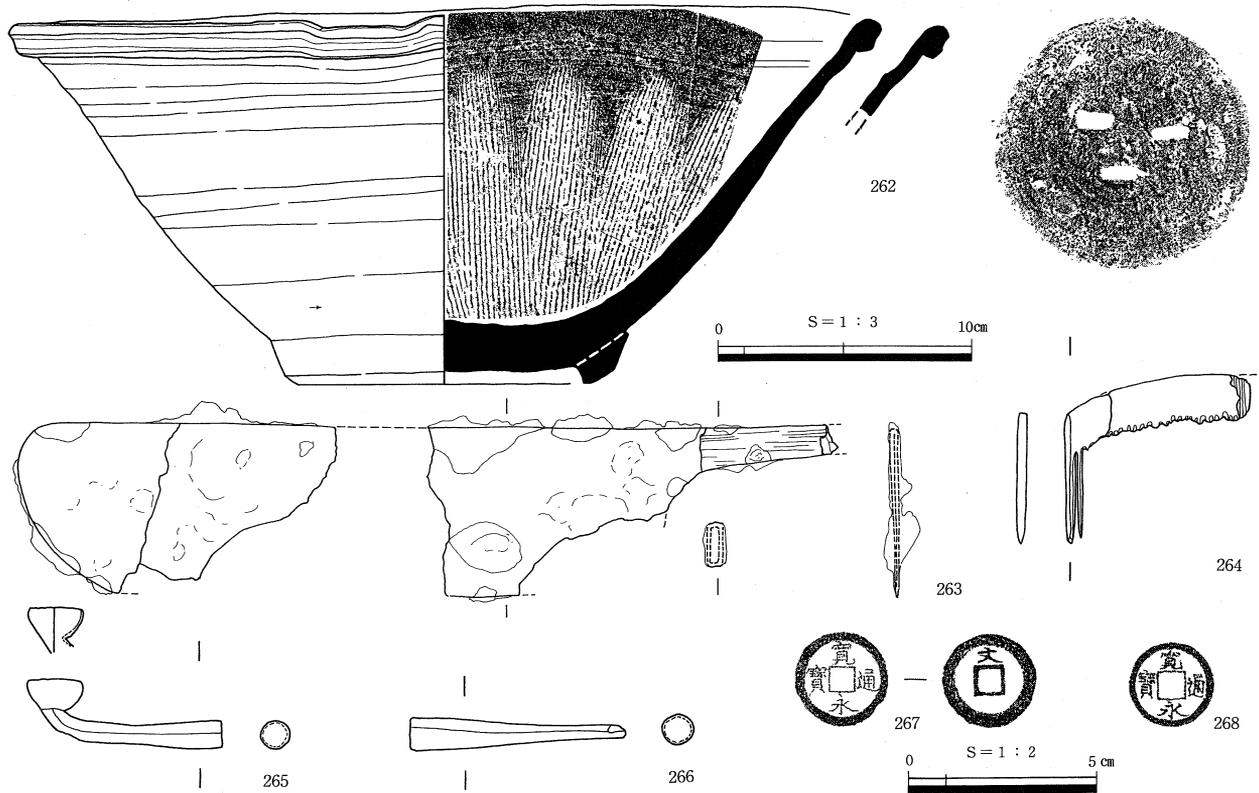
H=64.70m



H=64.70m



第80図 SK-34~36実測図



第81図 SK-34~36出土遺物実測図

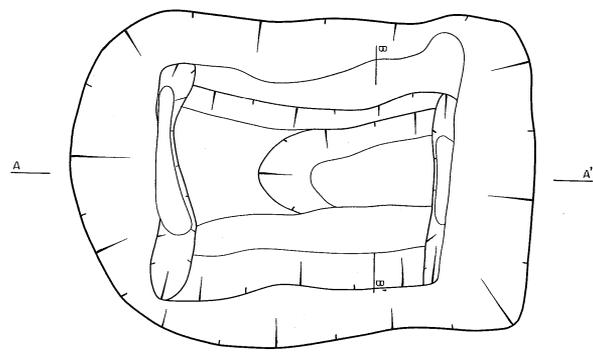
cmの長さをもつ大型品である。握り湾曲部は断面が隅丸方形状をするもので、その厚さは0.7cmを測る。これには布の痕が残っており、頭陀袋に入れられていたと思われる。毛抜きは長さ9.0cmと、鋏とともにSK-23出土品(177、178)の倍以上の大きさである。煙管はラウを除き完形品である。真鍮製のもので雁首の長さ4.3cm、脂返しの湾曲がなく火皿をほぼ直角に取り付ける。継目は上にもつ。古泉編年のV期に相当。これら副葬品は骨と一緒にまとめて置かれたような状態であったこと、そして頭陀袋に入れられていたと思われることから、最初はSK-23のように死者の首にかけられていたものが、その後再葬するにあたり改めて副葬されたのであろう。なおここから加工木片が出土し、コウヤマキと鑑定された。

SK-26はB-2杭の北に位置し、平面形態は一辺97cmの方形である。深さは70cm。墓壙上には径65cmほどの大礫がのせられ、半分ほどが墓壙内に沈んでいる。この中からも人骨が出土し、骨の保存状態が悪かったため性別は不明ながら、年齢は壮年後半から熟年前半であることがわかった。頭蓋骨などが墓壙の東南隅にあり、そこからやや離れた西方に毛抜きが1点(189)あった。長さは5.2cmと177とほぼ同じであるが、非常に薄手のつくりである。また釘が2本(190、191)、頭蓋骨周辺から出土している。これらは墓壙が方形を呈することから、坐棺に使用されたものと思われる。

SK-27は直径75cmの円形を呈する墓壙形態をもつ。深さは73cmで、墓壙上には径65cmほどの大礫がある。墓壙内東半分から集中して、小児骨であるとされる人骨が出土した。副葬品は煙管(192、193)、毛抜き(194)、銅銭(196)があった。煙管は銅製で雁首、吸い口ともにラウ結合部に小松筋と呼ばれる細い線条が刻まれる。雁首は継目を左にもち、火皿が欠損するが残存長で2.8cmを測る。脂返しの湾曲がほとんど無いもので古泉編年V期にあたる。銅銭は錆により詳細は不明であるが、10枚が接着していた。毛抜きはU字湾曲部から半分がない。177とほぼ同じ形態をもつものと思われる。なお釘が1点(195)出土している。墓壙形態から遺体は早桶に埋葬されたと考えられる。

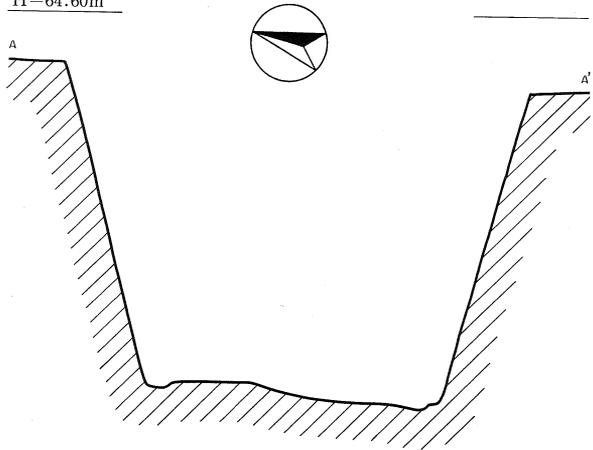
以上のように墓壙内から出土した副葬品から、A群は18世紀後半に営まれたものと推測される。

SX-1上、及び周辺からは土師質皿、陶器が出土している(第60、72図、写真図版45)。とくに土師質皿は

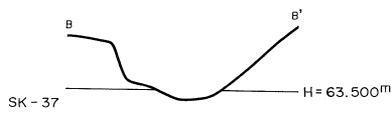


SK-37

H=64.60m

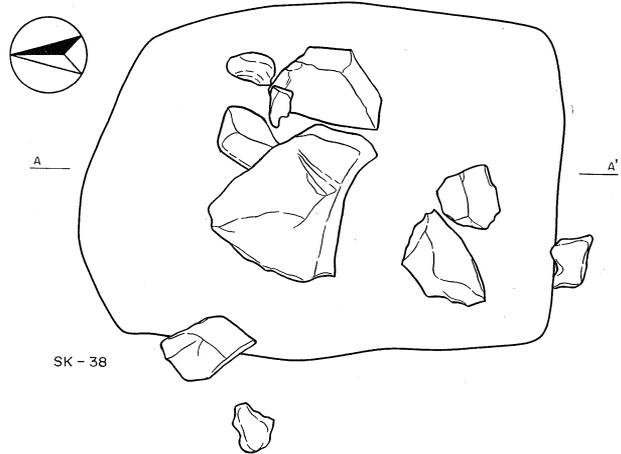


SK-37

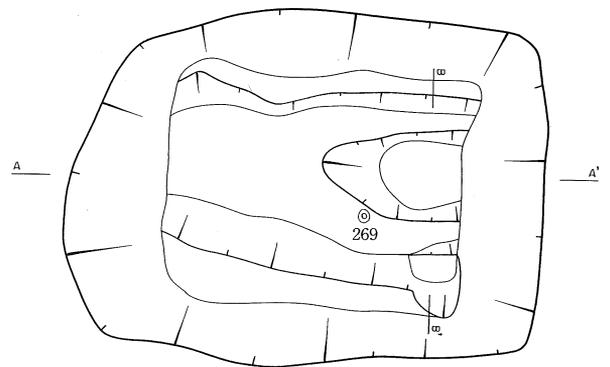


SK-37

H=63.500m

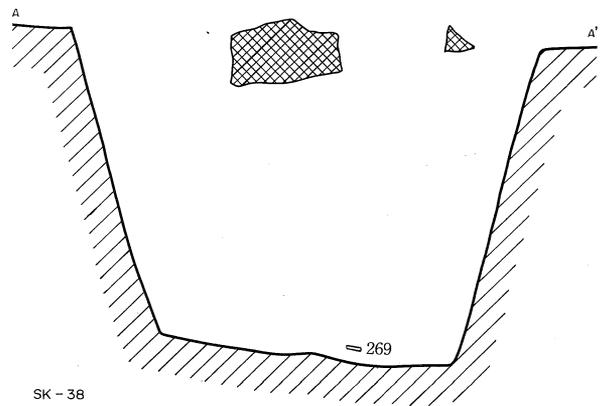


SK-38



SK-38

H=64.50m

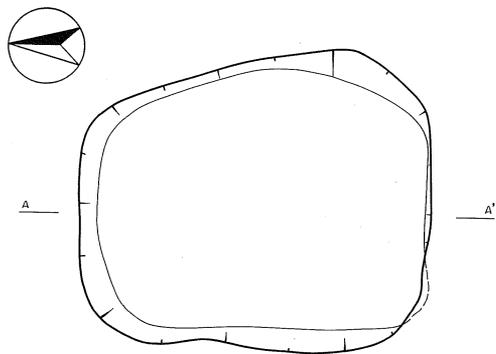


SK-38



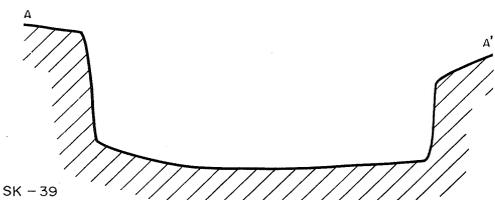
SK-38

H=63.500m

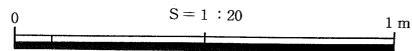


SK-39

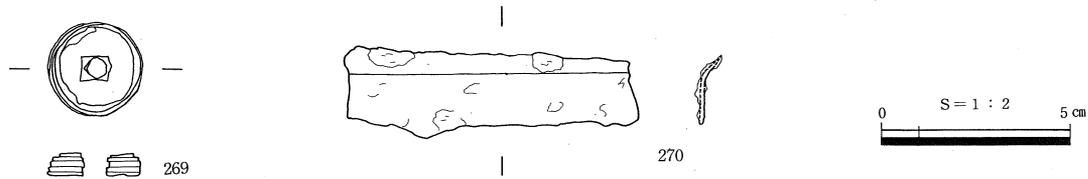
H=64.40m



SK-39



第82图 SK-37~39实测图



第83図 SK-38出土遺物実測図

SK-21の東に集中して出土した(205~220)。全てつくりの悪い、底部に糸切り痕を残すもので、完形品はなかった。底部を厚くつくるものと、薄いものの二つに大別できる。ところで197はSX-1東側斜面から出土したが、土師質皿で土器集中出土地点のものに比べ薄手でつくりが良い。口縁内面から外面胴部にわたって煤が多量に付着しており、灯明皿であったと考えられる。一方土器集中部の土師質皿にはその痕跡はなく、そうしたことからこれらは墓前祭祀の際に割られ廃棄されたものを、祭祀後に一カ所に集められたものと思われる。SX-1西列の西側で2点(203、204)の陶器が出土した。204は鉄胎陶器の灯明皿で口縁端部及び外面に煤が付着する。19世紀のものである。203は淡緑色を呈した陶器であるが、産地、時期とも不明。

②B群(SK-28~39)

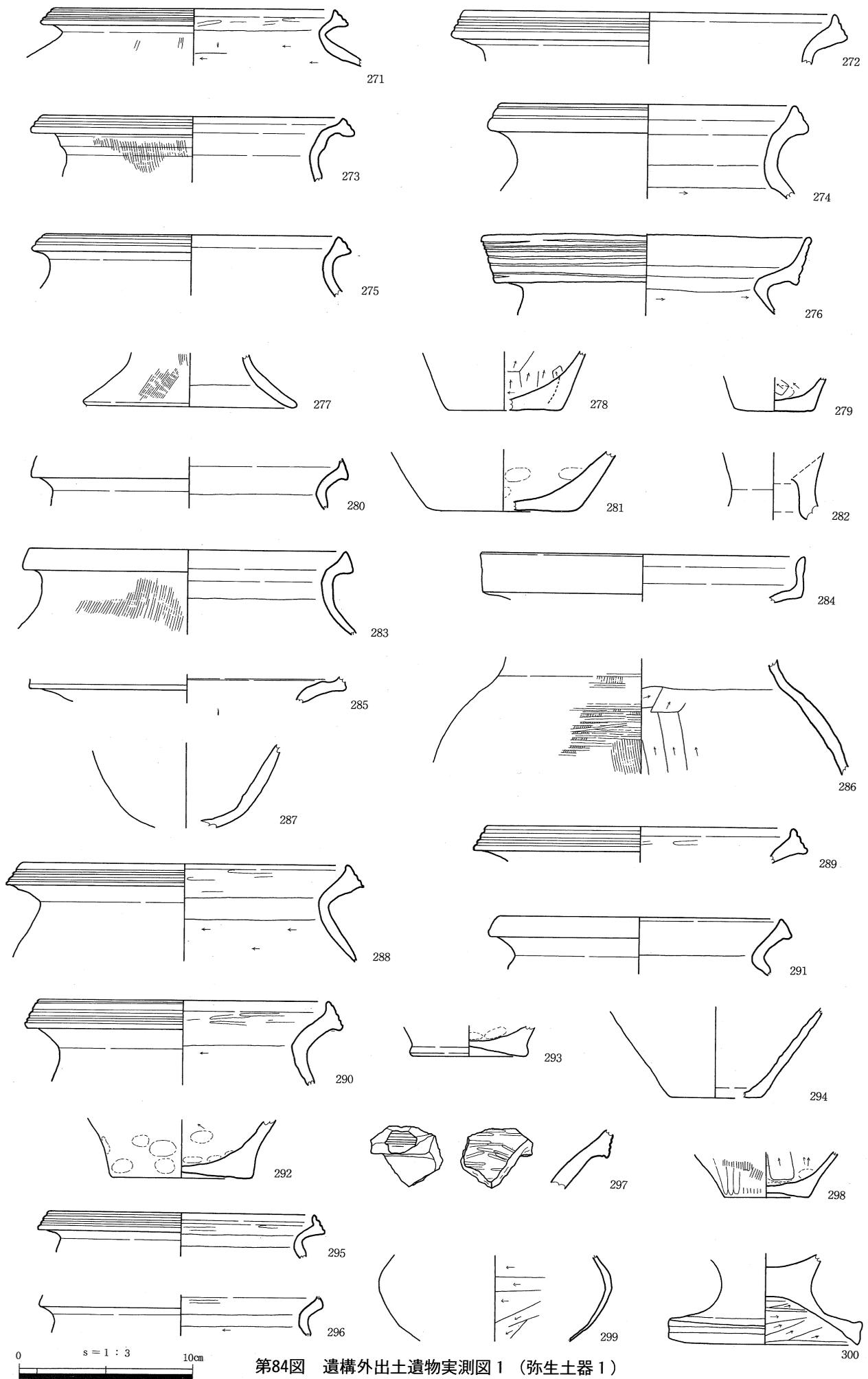
調査区ほぼ中央に位置し、石塔竿部をもつものがSK-28、石塔の台座のみがSK-29である(第73~76図、写真図版28~30)。SK-29の竿部は調査区南側に散逸していたものであるが、SK-28と形式的に類似すること、また台座も同様であることから判断した。それぞれの台座の周辺には長径が10~50cmの礫を敷き詰め、台座を固定するようにしていた。SK-28が密なのに対し、SK-29は敷き方が粗雑である。これらの下から、墓壇が検出された。SK-28は南北に向く長軸112cm、短軸81cmの長方形を呈す墓壇形態をもつ。深さは105cm、墓壇内から遺物は出土しなかった。石塔の竿部(221)は高さ60.4cm、幅25.0cm、奥行きが13.4cm。頂部を若干尖らせる。裏面は粗く整形したのみである。正面には浅く彫り窪めて枠組みを設け、その中に墓碑銘を彫る。それは「享保元申年(1716年) 歸元鉄漢道志禅門 十二月十九日」と読み、過去帳によって葬られた人が「反原村国蔵ノ父」であることが判明した(註2)。「歸」は「帰」を、「弄」は「壺」を表す。枠の下方には蓮華座がある。台座(223)は38.0×39.0cmの方形を呈すもの。高さは15.4cmである。竿ののる部分はやや窪んでいる。長径11.4cm、深さ約1cm彫り窪めた方形の水受けと、その両脇に直径3cmほど、深さ2cmの穴(燭台)が1対ある。

SK-29はSK-28のすぐ南に位置し、軸を北西に採る。長軸は118cm、短軸は81cmの長方形。深さは125cmを測る。墓壇内からは正坐位で葬られた熟年から老年の男性人骨が検出された。この男性は北西を向き、埋葬されていた。竿(222)、台座(224)は形態、大きさともそれぞれ221、223とほぼ同じである。ただ224には、竿をのせる部分の彫り窪みがなく、平らである。竿部の墓碑銘は「元文元年(1736年) 坂本一鏡宗心禅定門位 辰七月廿七日」とあり過去帳では反原村の住人であったことが判明した。これら2基は墓壇の長軸の方向がずれているものの、石塔は同じ向きをもっている。また20年の時を隔てて同型式の石塔を立てていることから、SK-29の石塔を立てた際、SK-28も同時に立てられたのではないかと想像される。なおSK-29の北西に立石があった(第73図)。長さは50cmほどで、30cmが地表から出ている。この立石と墓壇との関連は不明である。

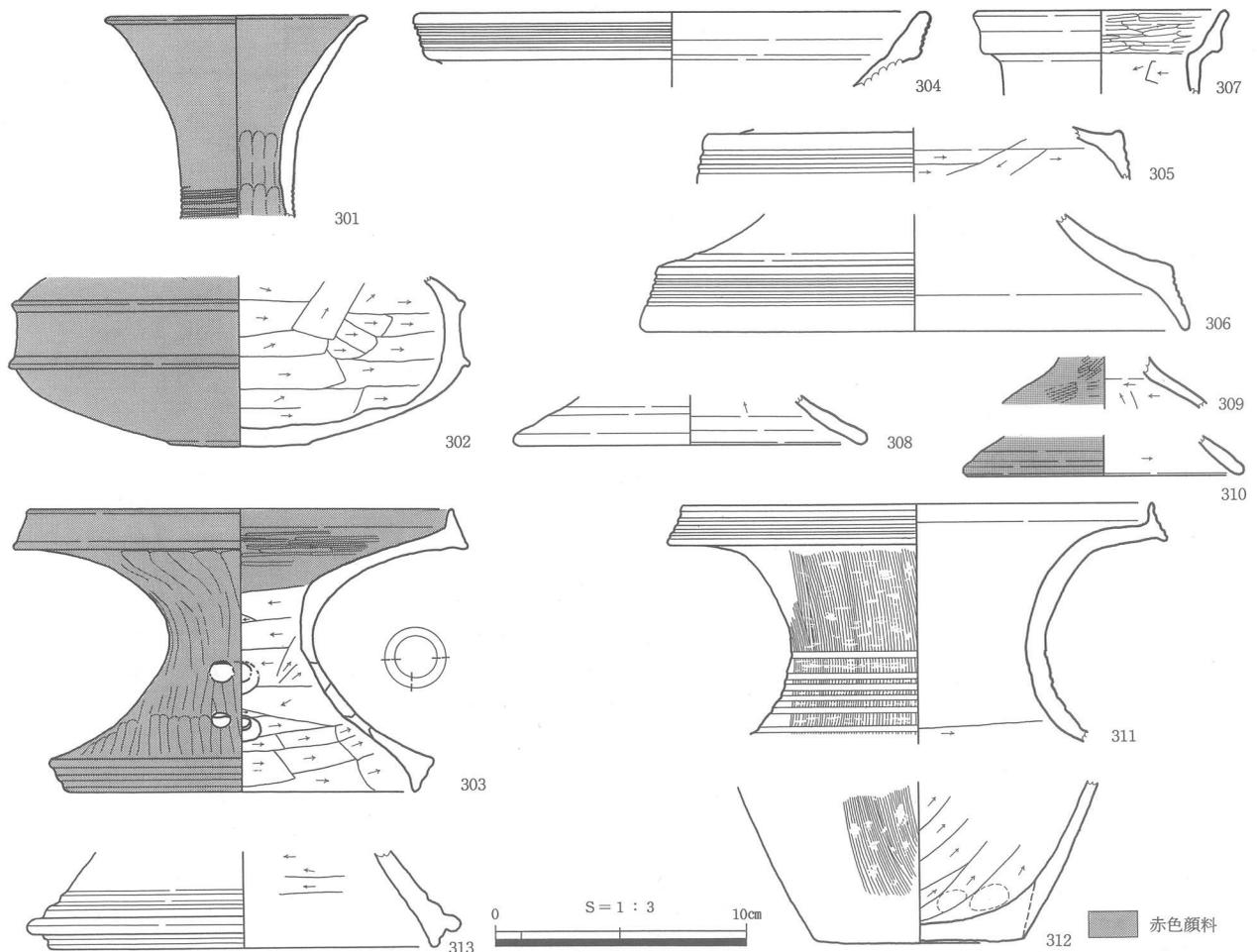
SK-32(第78、79図、写真図版31、44)はSK-28の西方に位置する。図示できなかったが墓壇上には人頭大の礫があり、SK-28、29と同様に石塔が立っていた可能性がある。平面形は方形を呈し、120×103cm、深さ122cmを測る。墓壇内からは熟年の女性と思われる人骨とともに、計35本の釘が出土した。それら全てに、木材片が付着しており、完形品の長さは4.4cmである。それらは墓壇の四隅に分布し、その距離から坐楯は一辺50cmほどのものと考えられる。また1点だけ鉄の刃部(240)が出土している。

SK-29の南西にSK-33(第78図、写真図版31)はある。検出面で長軸は120cm、短軸65cm、深さは53cmであった。遺物は出土していないが、埋土から近世墓であると考えられる。

SK-30、31(第78図、写真図版30、31)は、調査地ほぼ中央を東西に横断する土層断面観察用畦(第45図A



第84图 遺構外出土遺物実測图1 (弥生土器1)



第85図 遺構外出土遺物実測図2 (弥生土器2)

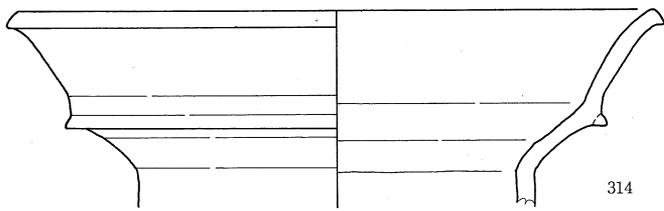
—A'')のすぐ北に位置する。SK-30は長軸110cm、深さ70cmで、西壁はSK-31に切られている。おそらく軸を南北に採るものである。遺物は出土しなかった。立地と埋土から近世墓と考えられる。

SK-31は検出面で長軸112cm、短軸60cmを測る。深さは断面図(A-A')をみると西壁で40cm、東壁で50cmほどとやや東が深い。墓壇内には長径40~60cm、厚さ10~15cmの大礫があった。墓壇内南側には底面からやや浮いた状態で2個の礫がおかれ、北側には1個ある。これは墓壇北壁に一端がかかっている、この下から成人の頭蓋骨片のみが出土した。これら3個の礫の上に東西両壁に沿ってひとつずつ、礫が立て掛けられている。墓壇の浅さ、頭蓋骨片のみの出土という状況から再葬墓である可能性が高い。

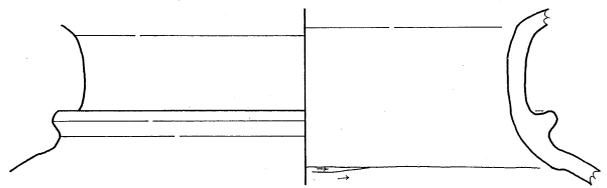
SK-34~36(第80、81図、写真図版32、43~45)は土層断面観察用畦にかかり(第44図)、第5層(暗褐色土)を掘り込んでいることがわかる。このうち一番西に位置するのがSK-34である。長軸87cm、やや軸は北西を向く。深さは70cmあり、墓壇底面上から、長径63cmの楕円形状を呈した礫が出土した。さらに南壁には挿鉢(262)が内面を下に向けた状態であった。この挿鉢は礫が墓壇内に置かれた後に、礫と南壁の間の隙間を覆うように、内面を下にして一端を南壁に掛けて置かれている。262は底部裏面にゲタ痕をもつもので唐津産、18世紀初頭に比定される。

この東隣りにあるSK-35は墓壇上面には人頭大の礫が2個あった。長軸113cm、短軸61cmの方形である。深さは60cm。遺物は包丁と思われる鉄製の刃物(263)が第2層上で出土した。刃部は一部欠損するが刃渡り13.5cmほどである。幅は4.7cm。

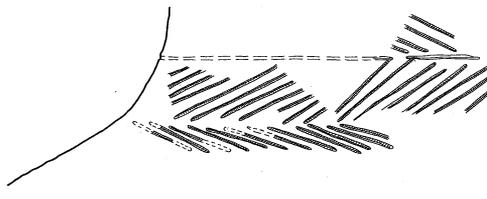
一番東に位置するSK-36は、長軸105cmを測る長方形の墓壇形態をもつ。深さは75cmで、底面中央部に僅かながら掘り窪むところがある。人の骨と歯が僅かに出土したが、成人であるということ以外にはわからない。副葬品にツバキカツゲでつくられた櫛(264)、煙管(265、266)、2枚の銅銭(267、268)がある。煙管はどちら



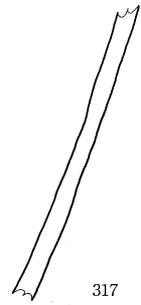
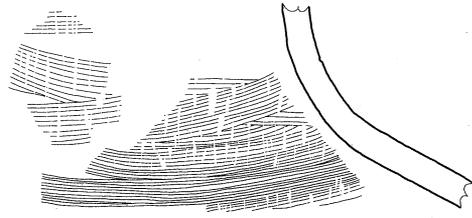
314



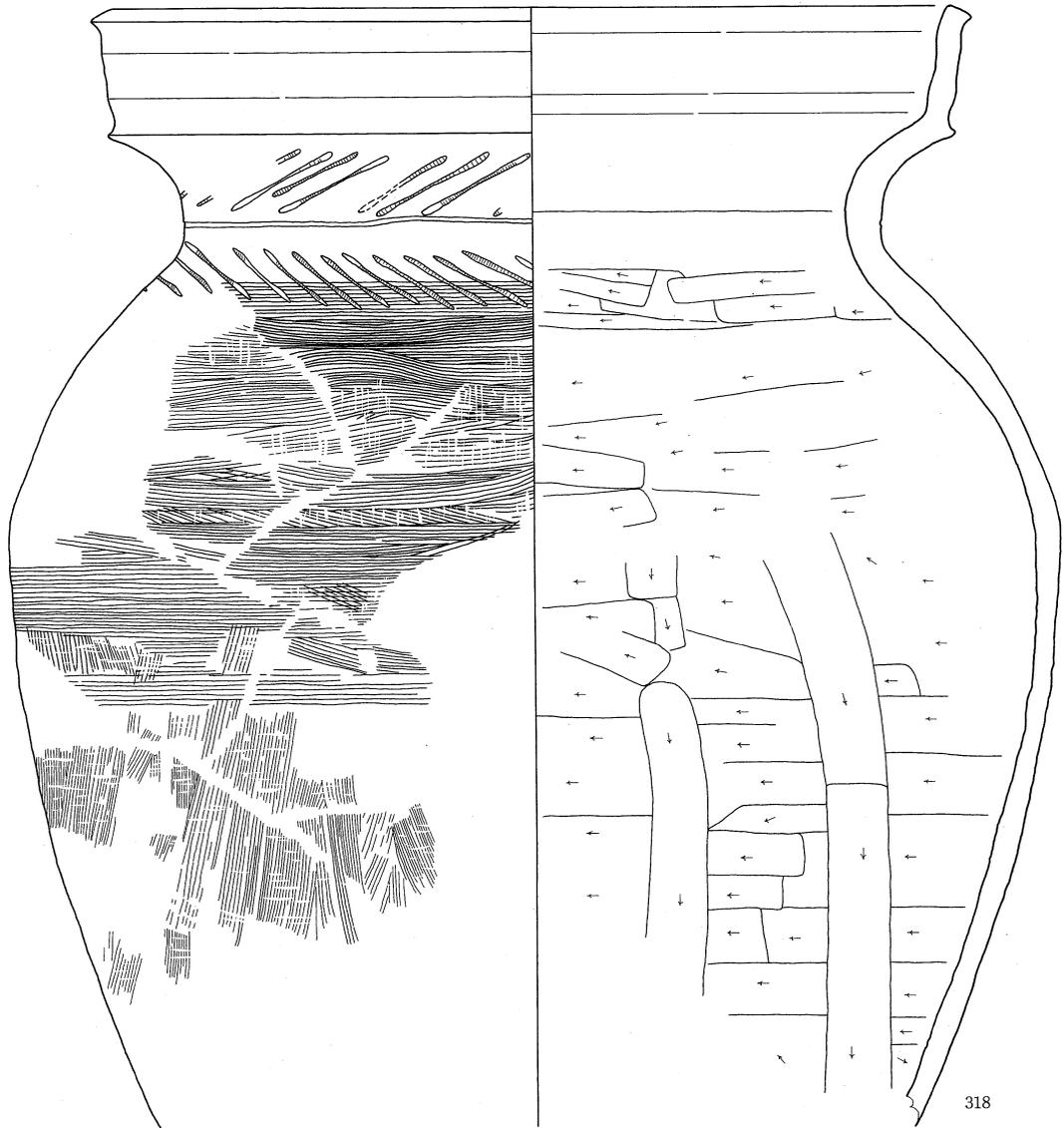
315



316



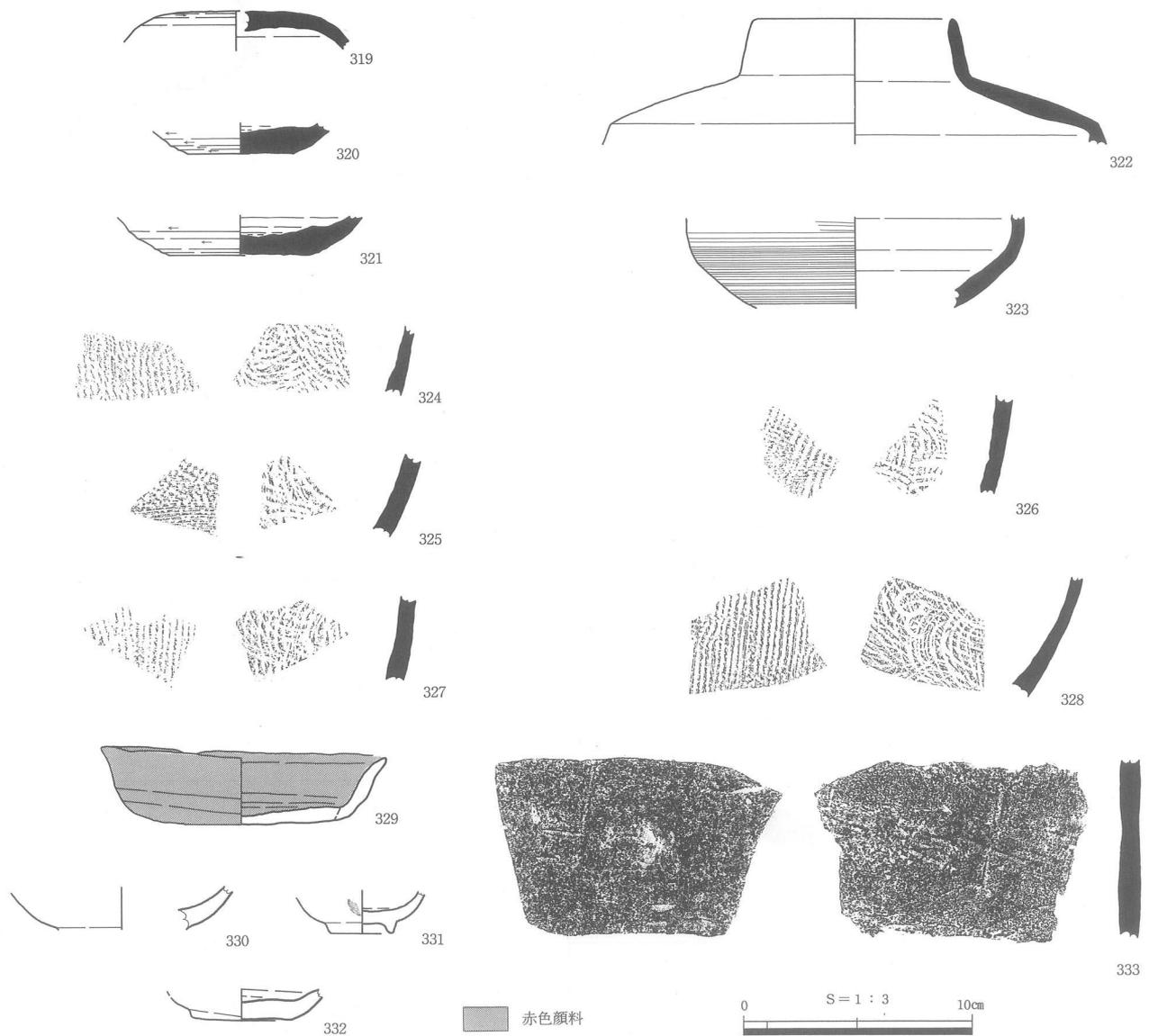
317



318

第86図 遺構外出土遺物実測図3 (土師器)

0 S = 1 : 3 10cm



第87図 遺構外出土遺物実測図4 (須恵器・土師器・陶磁器・土師質土器)

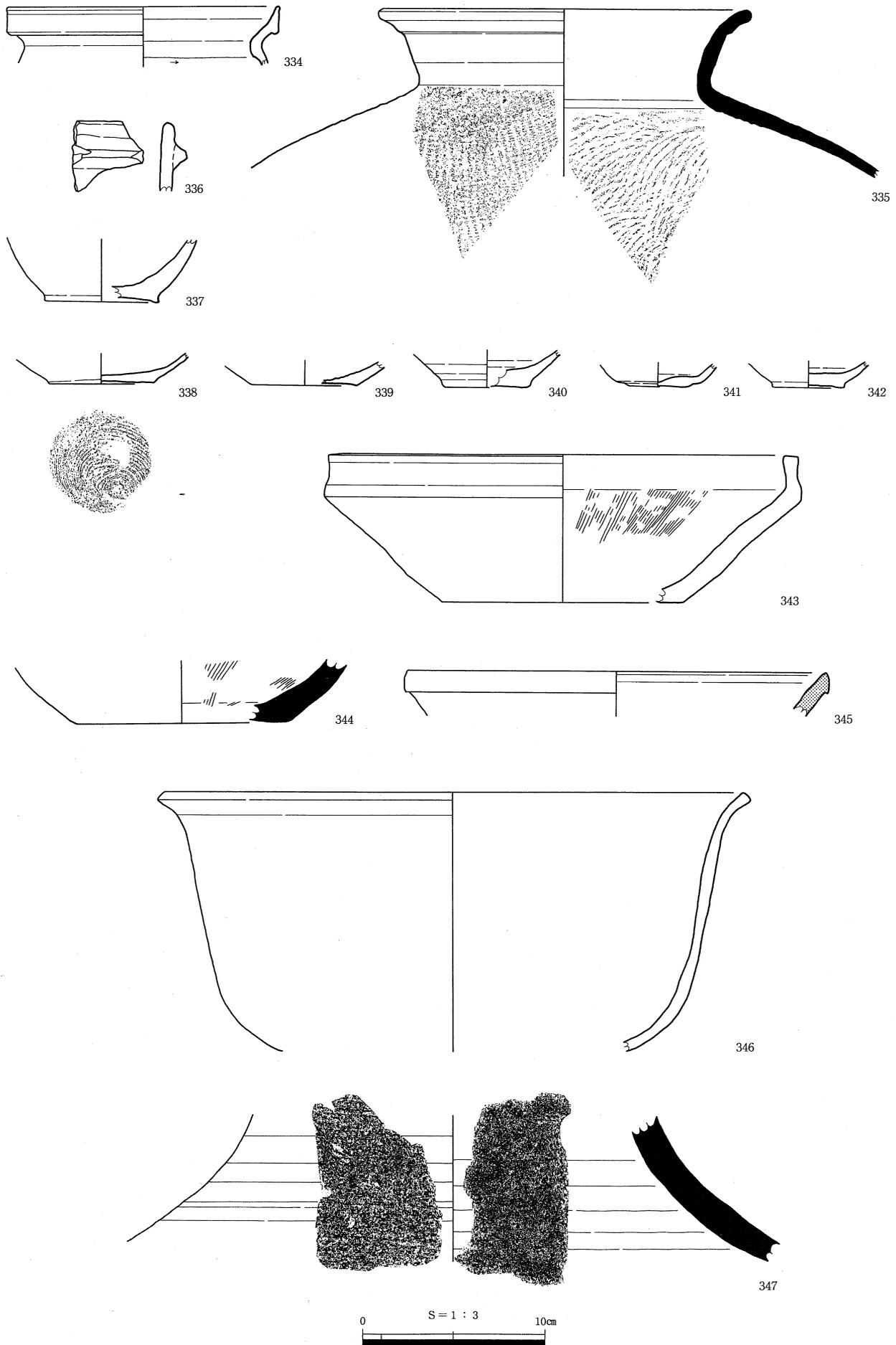
も左に継ぎ目をもつ。雁首は脂返しが湾曲して火皿へ続くもので、古泉編年のIV期(18世紀前半)に相当するものであろう。267は1668年初鑄の文銭。268は1636年初鑄の古寛永通宝である。

SK-35の南にSK-37、そのさらに2.5mほどのところにSK-38は位置する(第82、83図、写真図版32、33、43)。後者の墓壙上には15~40cmの礫があった。どちらも長軸が約120cm、深さ85cmほどを測る。南北に軸を採る長方形を呈すが、この2基は規模のみならず底面にみる墓壙構造も同じである。すなわち底面を長軸に沿って、何段かに掘ること(第82図B-B')、東西壁の裾部が壁に沿って、5~10cmほどの幅で溝状に掘っていること、底面南半分のある範囲を北側より低く掘り窪めることである。なおSK-38からは接着した状態の銅銭が5枚(269)、不明の鉄製品(270)が出土した。金具か。

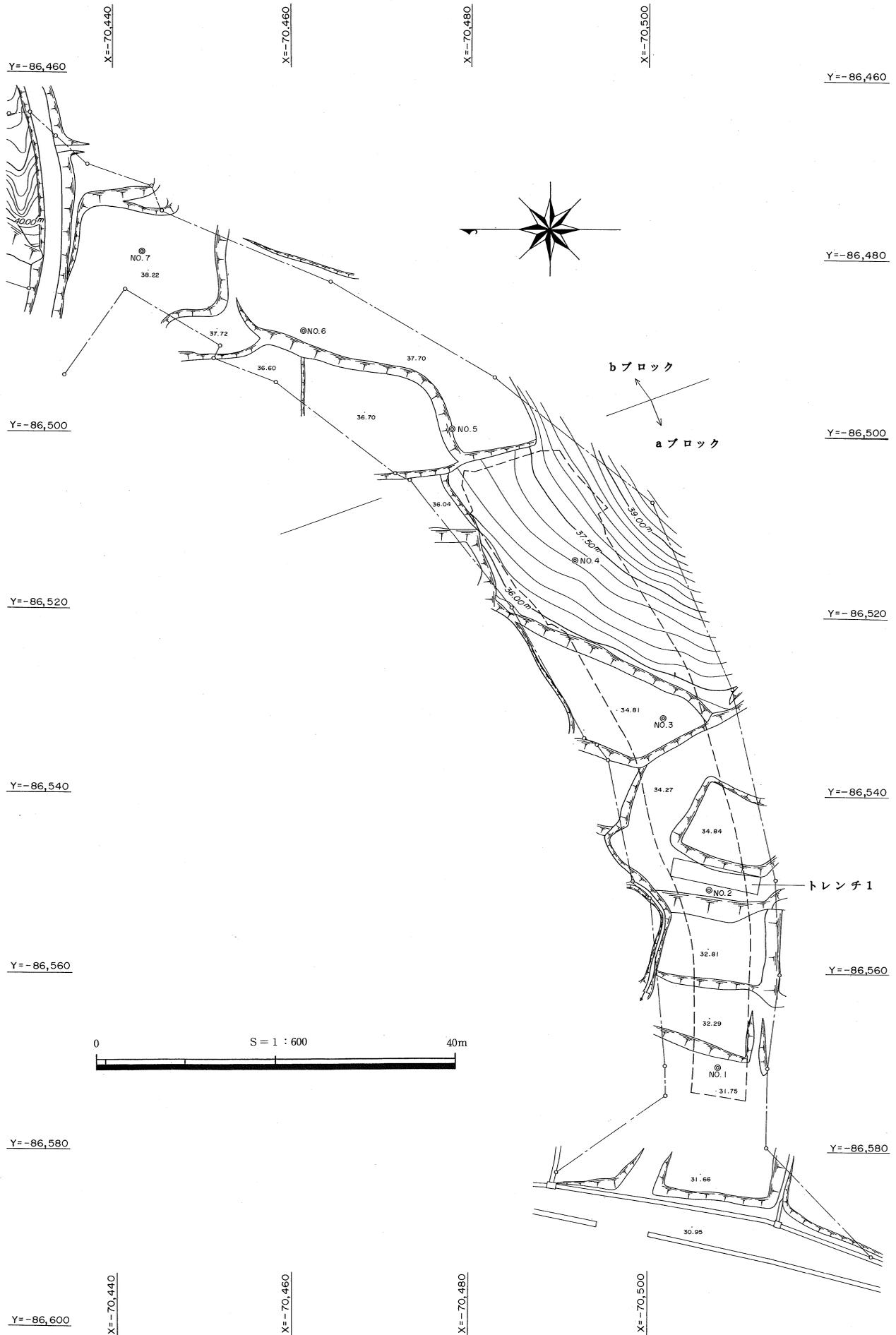
SK-39は検出面で長軸90cm、深さは28cmを測る長方形を呈すもので、その埋土と軸を南北に採るということから墓壙と判断した。遺物はない。

これらB群の時期は、副葬品などから18世紀の前半にあたると思われる。

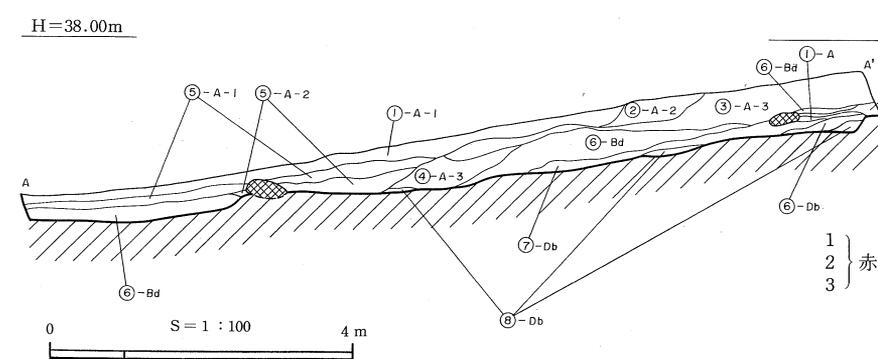
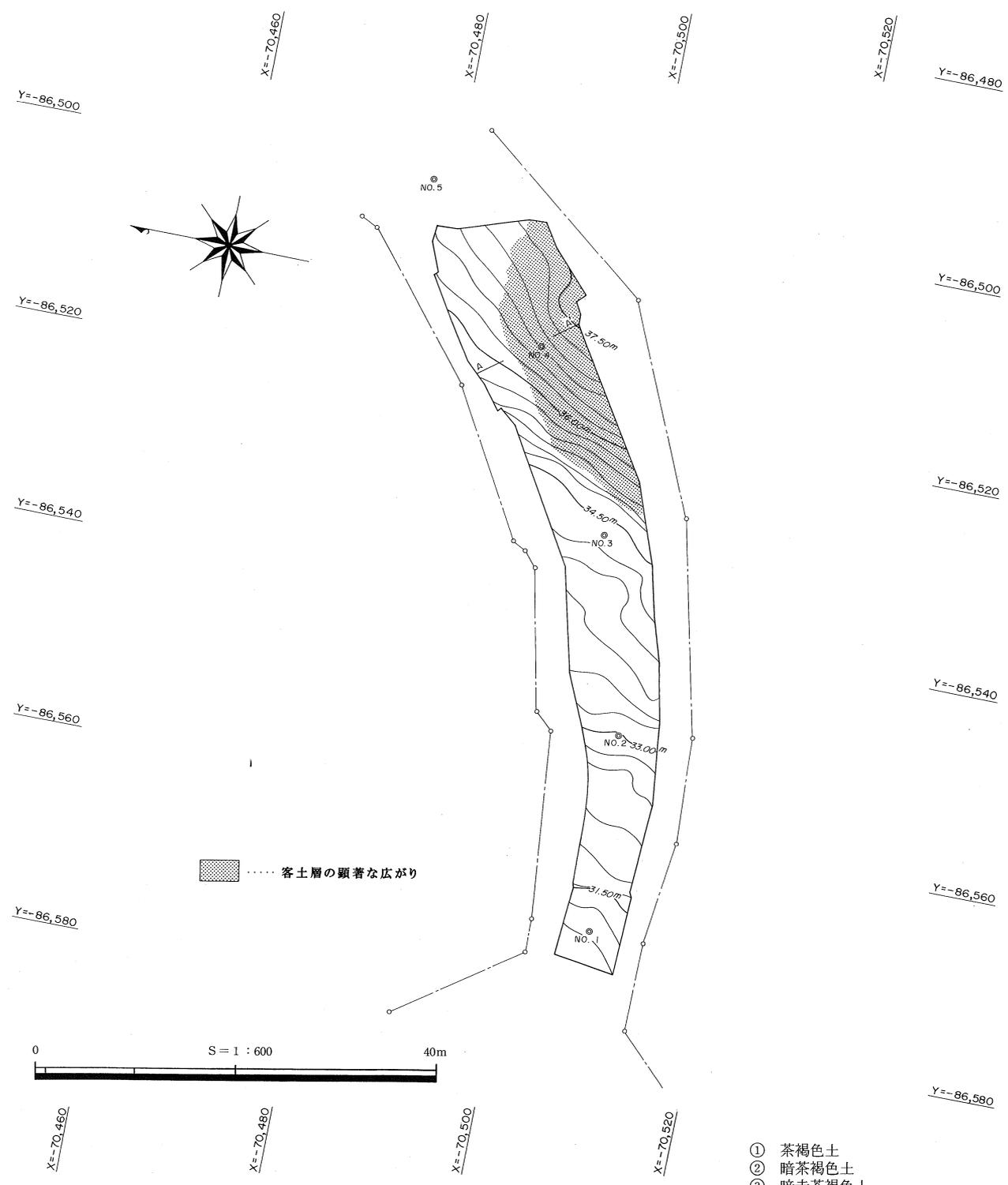
なお調査区中央、東側斜面で石塔の破片(第77図225)を採集した。竿部左側面の破片でそこに「○(二か?)月」と墓碑銘が彫られる。また竿正面部は浅く彫り窪め、杵を設けていたことが窺える。石質は安山岩。



第88図 a ブロック出土遺物実測図

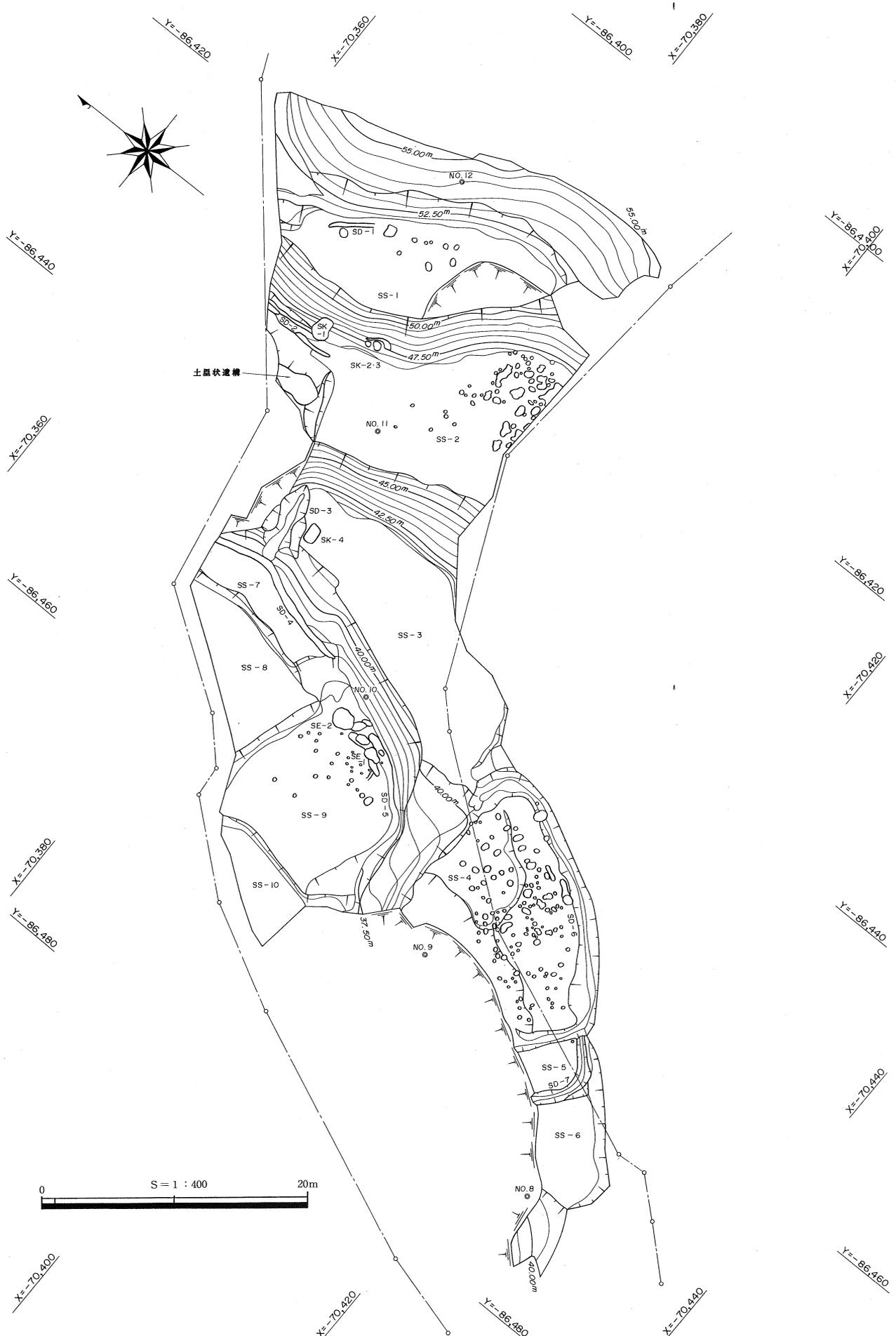


第89図 aブロック調査前地形実測図



- ① 茶褐色土
 - ② 暗茶褐色土
 - ③ 暗赤茶褐色土
 - ④ 赤茶褐色土
 - ⑤ 黒茶褐色土
 - ⑥ 黒灰色土
 - ⑦ 黒褐色土
 - ⑧ 茶灰色土
 - ⑨ 黒色土
 - A 粘質土
 - B シルト b シルト混じり
 - C 細砂
 - D 砂 d 砂混じり
- 1 } 赤紅色礫あるいは黄灰色礫の混じり具合 少
 2 } ↓
 3 } 多

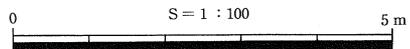
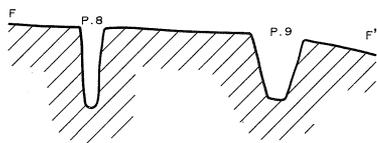
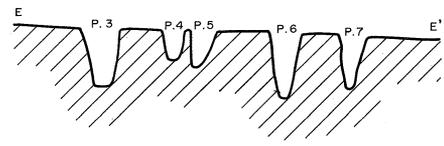
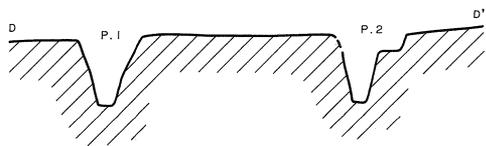
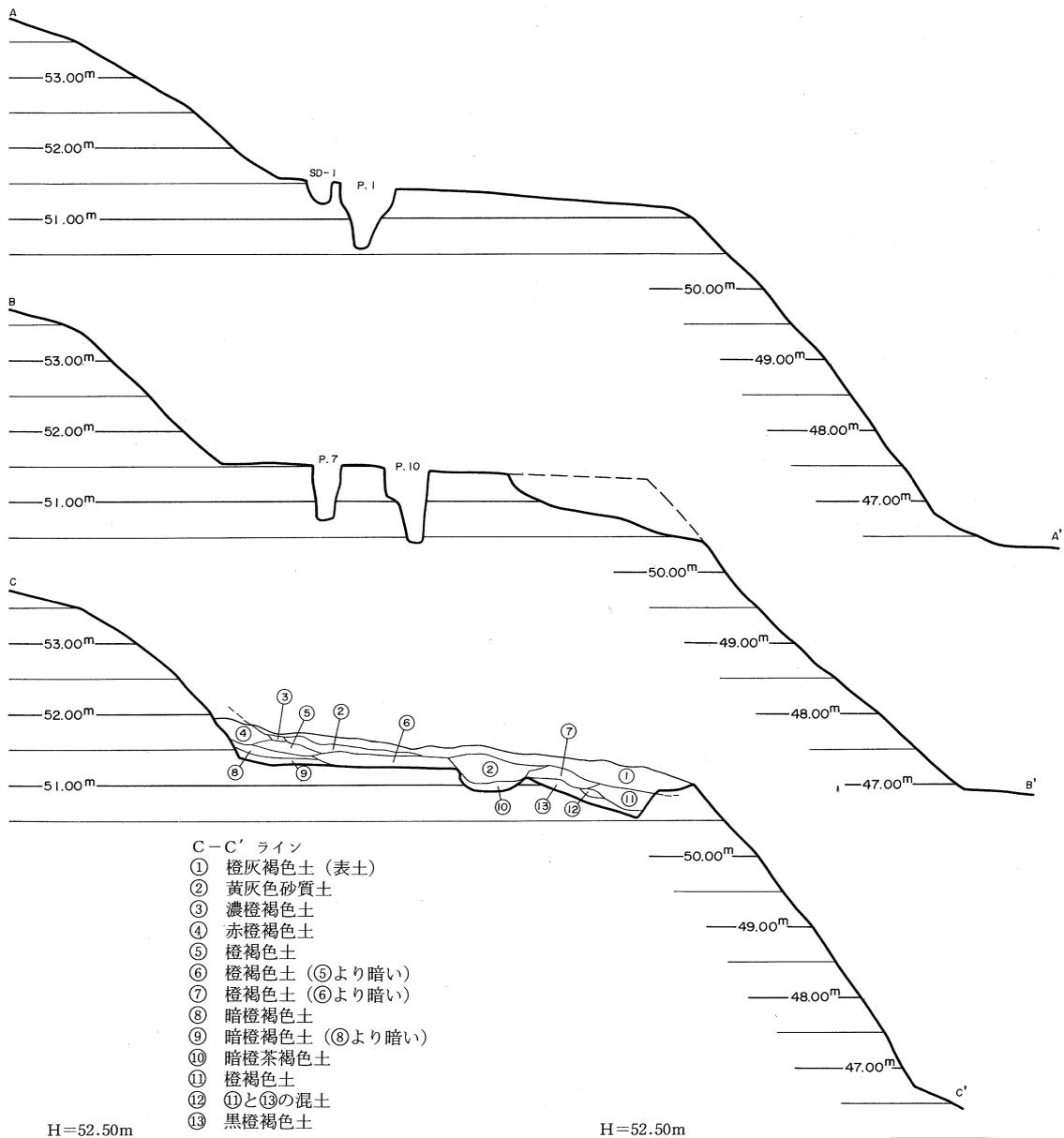
第90図 a ブロック調査後地形実測図及び調査地土層断面図



第91図 cブロック遺構全体図



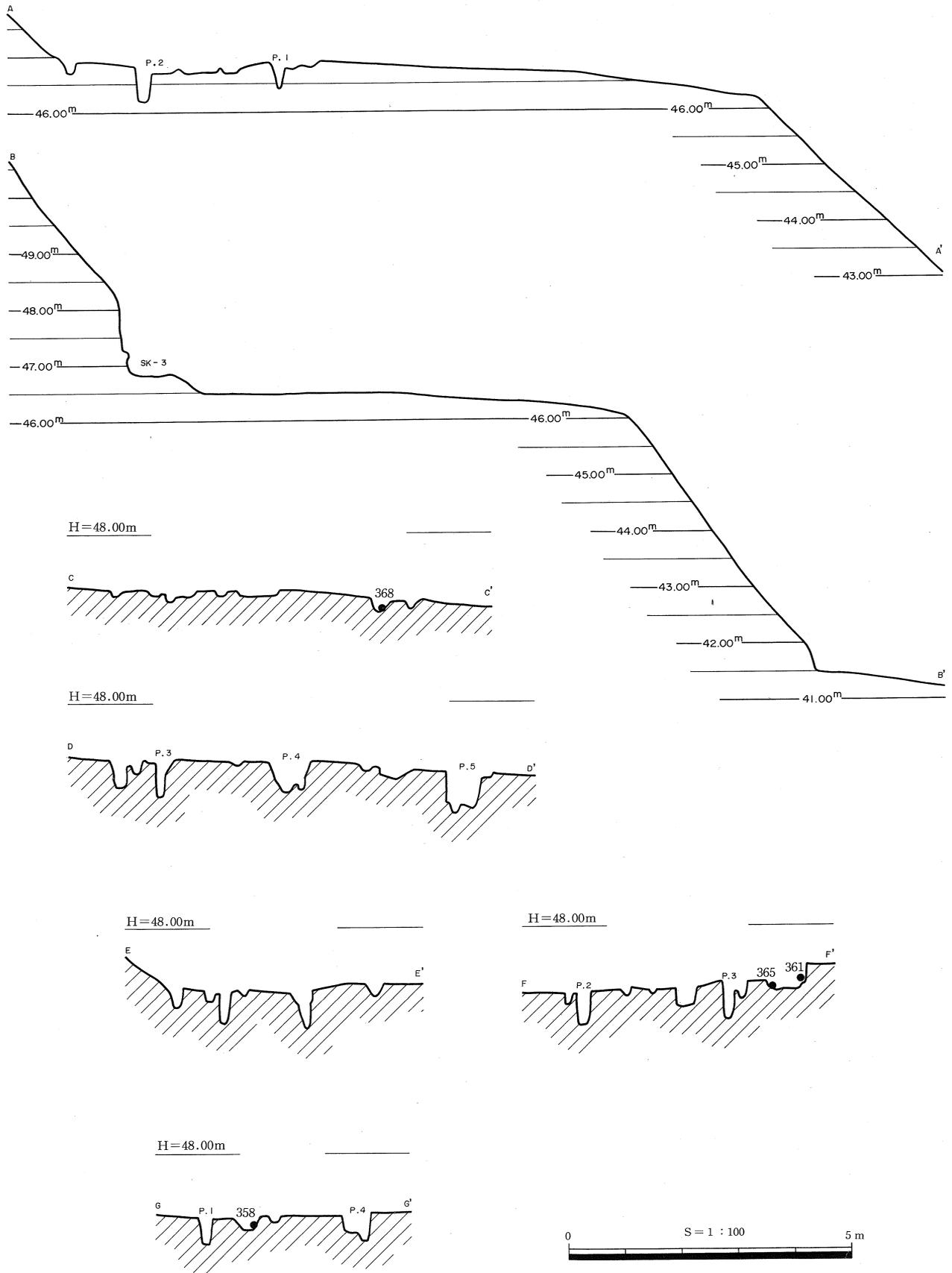
第92図 SS-1 実測図



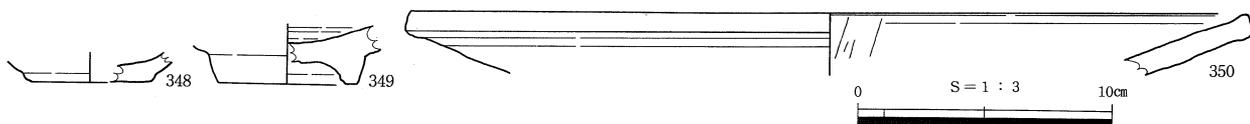
第93図 SS-1 断面実測図



第94図 SS-2実測図



第95图 SS-2 断面实测图

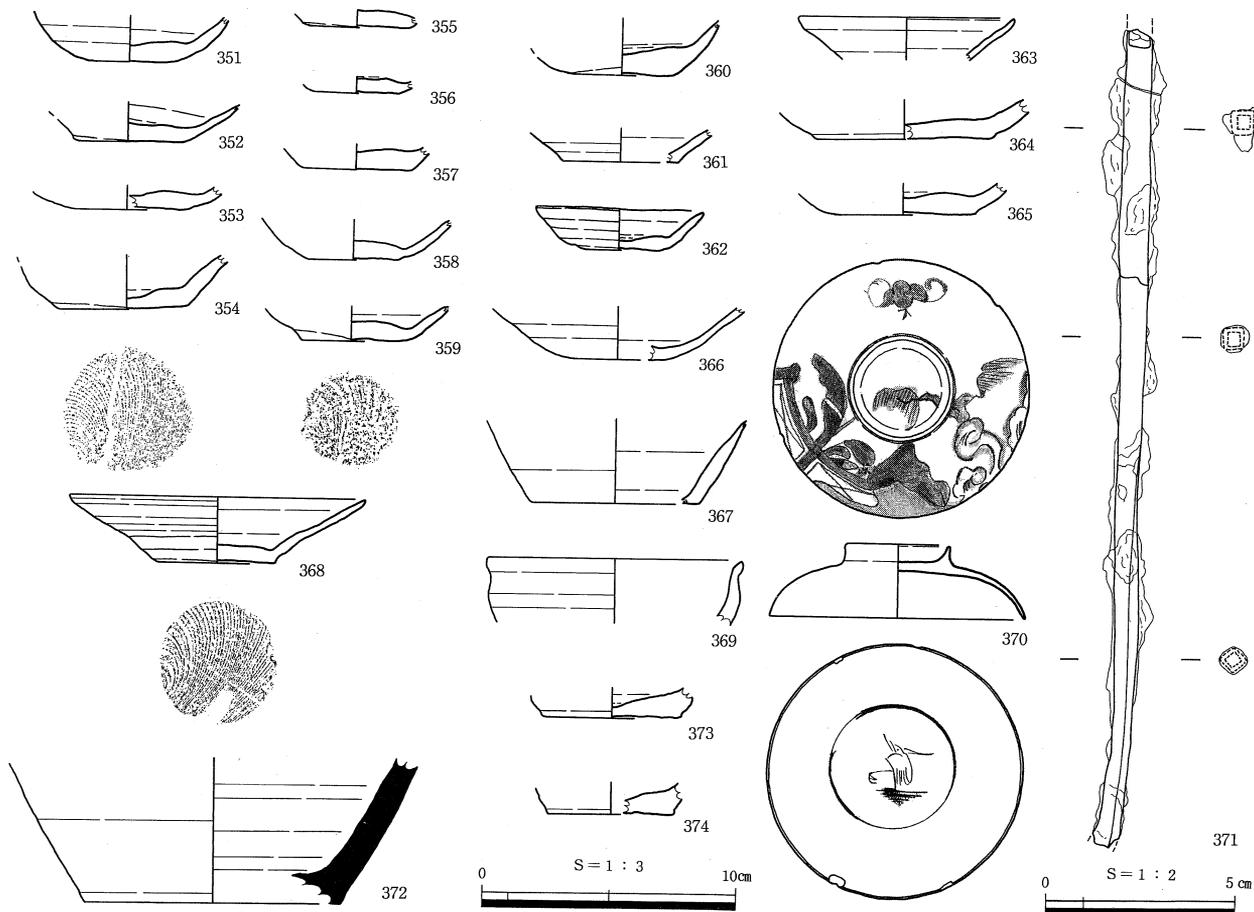


第96図 SS-1 出土遺物実測図

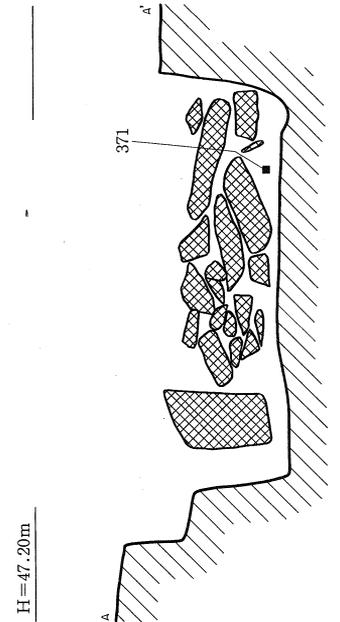
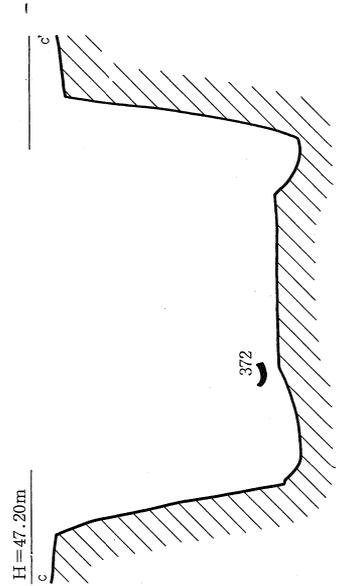
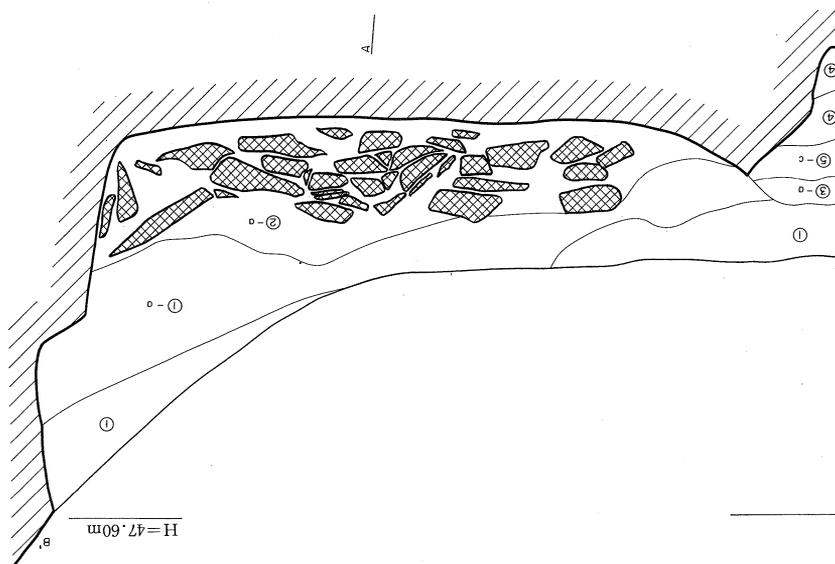
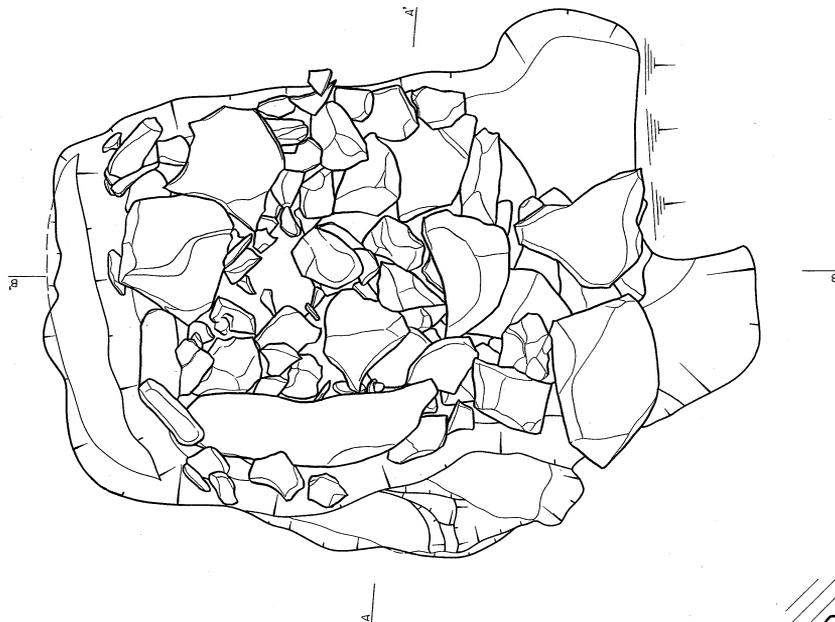
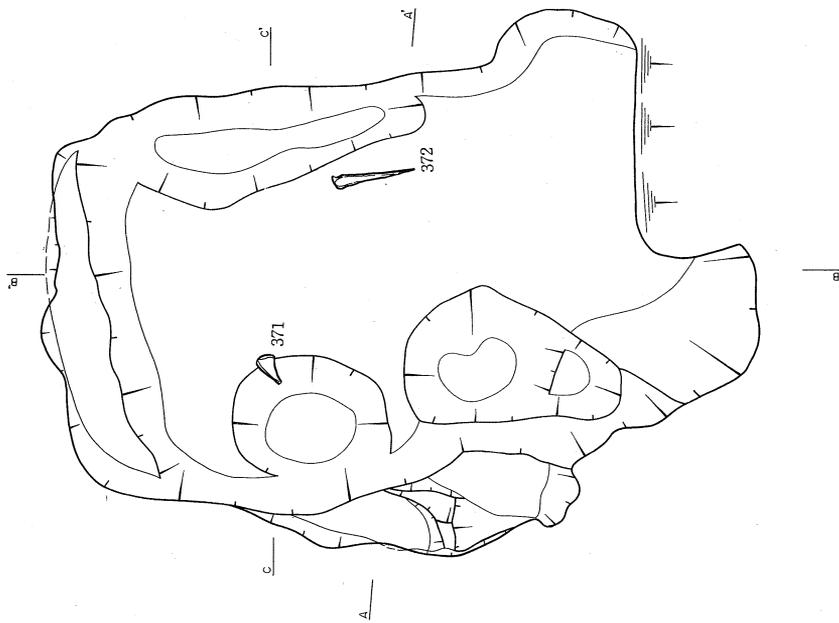
3 集落部の調査 (田住第8遺跡)

・ a ブロック (第88~90図・写真図版33、46)

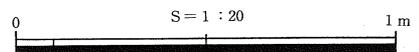
調査区の東南部で、茶褐色系の土の広がりを確認した。約174m²の範囲で、三日月状に検出した。赤紅色または黄灰色の地山礫が混じる粘質土であり、この層は客土層(2~4層)と判断された。客土層下はシルト層や砂層の堆積がみられ、客土造成以前は流水を伴う低湿な土地柄であったと推定される。客土層の広がり南側調査地外には、丘陵裾部を削平してテラス状の段が造成されており、客土層はこの造成に伴う整地層と思われる。その他に遺構は確認していないが、調査地全域にわたってシルト層が卓越しており、低湿な立地である。遺物は、このシルト層と表土の間から出土した(第88図・写真図版46)。334は弥生時代後期の甕の口縁部である。端部に1条のみ凹線が確認できた。335(写真図版46)は、須恵器の甕の口頸部である。336~338、340~343、346は土師質の土器である。336は口縁部下に突帯をめぐらすもので、羽釜か。337は上げ底の椀であり、338、340は皿、341、342は小皿である。337、338、340~342は底部に糸切りが確認でき、341は内面底部に炭化物が付着していた。343は口縁部が直立気味のこね鉢、346は鍋である。外面全体に煤が付着している。339は鉄釉のかかる陶器の灯明皿である。345は瓦質のこね鉢、344、347は須恵質の土器で、344はこね鉢、347は大甕である。344の内面は使用のため、磨かれたように滑らかである。遺物は、弥生時代後期や古代の土器を若干含むが、中近世を主体とする出土相である。



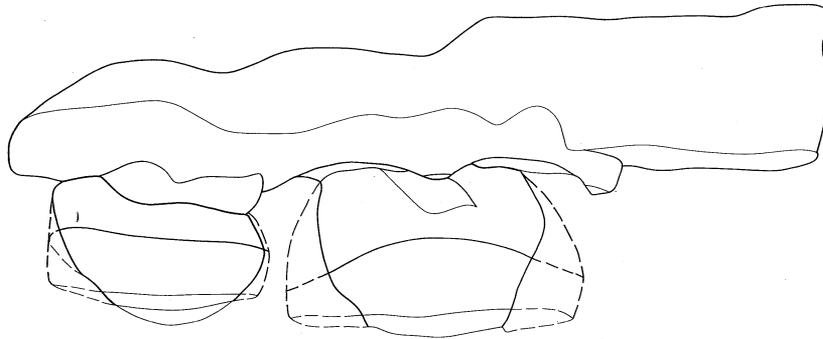
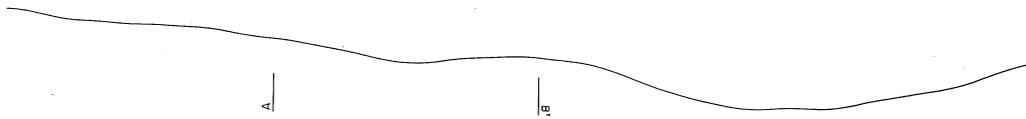
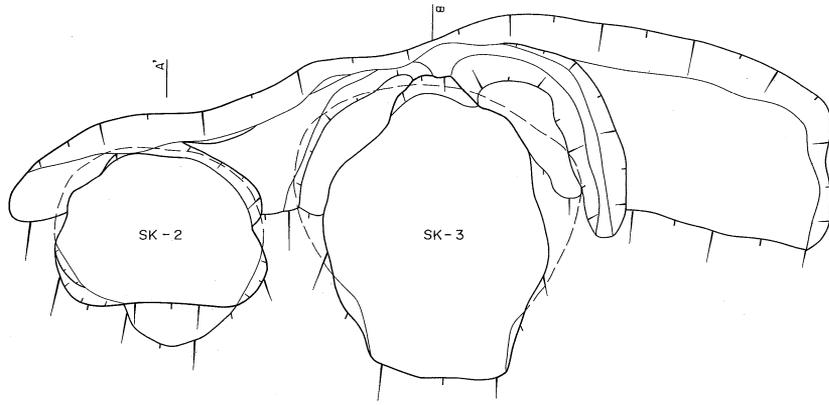
第97図 SS-2、SK-1、土塁状遺構、SD-2 出土遺物実測図



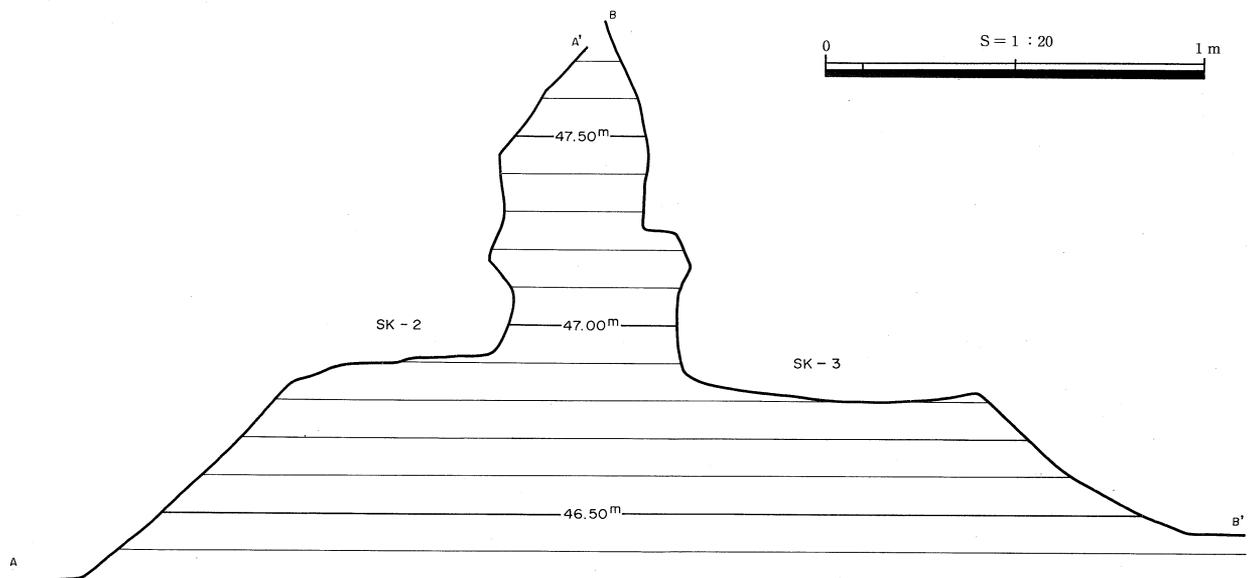
- ① 赤茶褐色土
- ② 暗赤茶褐色土
- ③ 橙褐色土
- ④ 暗橙褐色土
- ⑤ 黒橙褐色土
- a 黄色砂質土混じり
- c 炭化物混じり



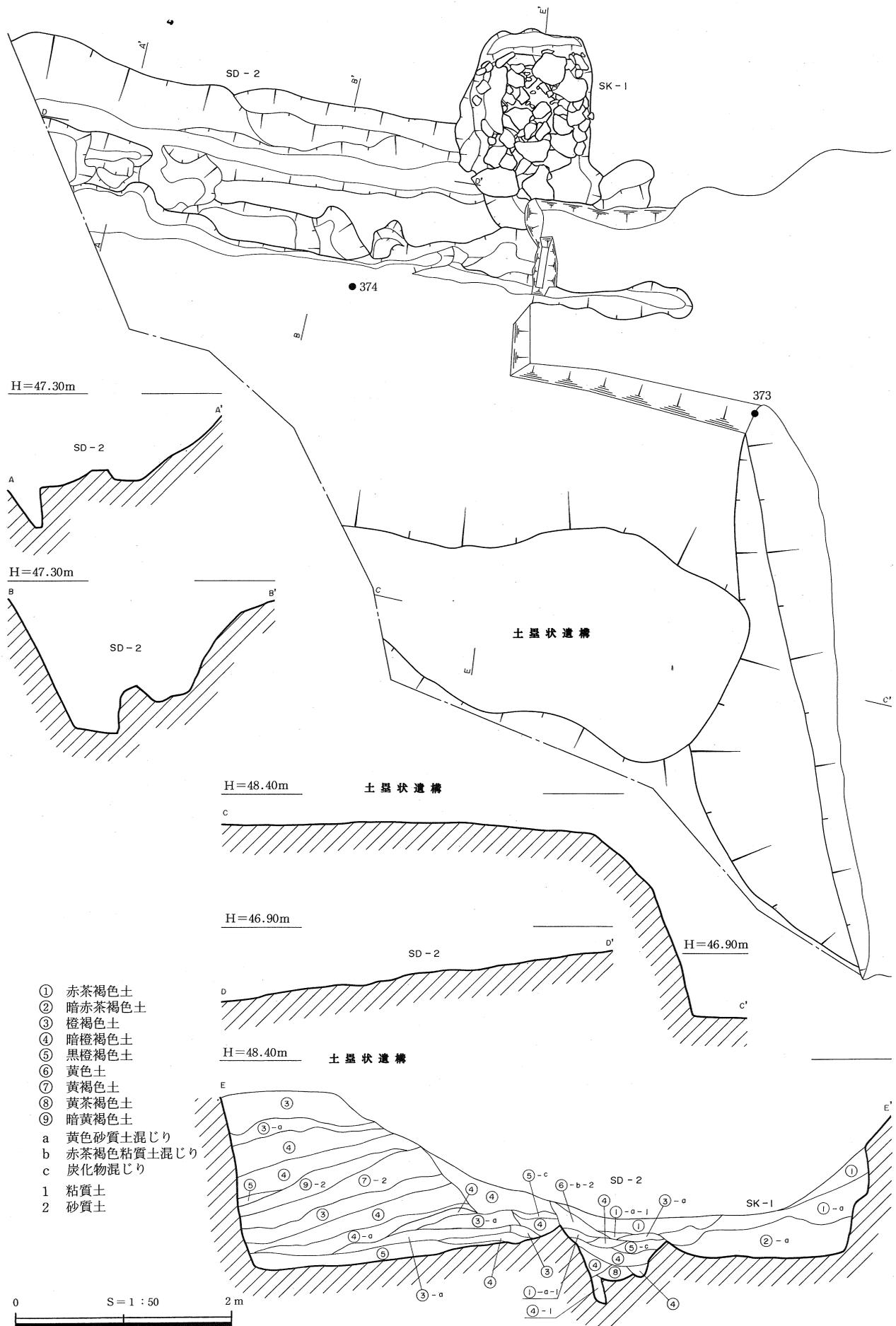
第98図 SK-1 実測図



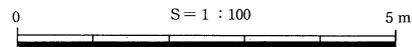
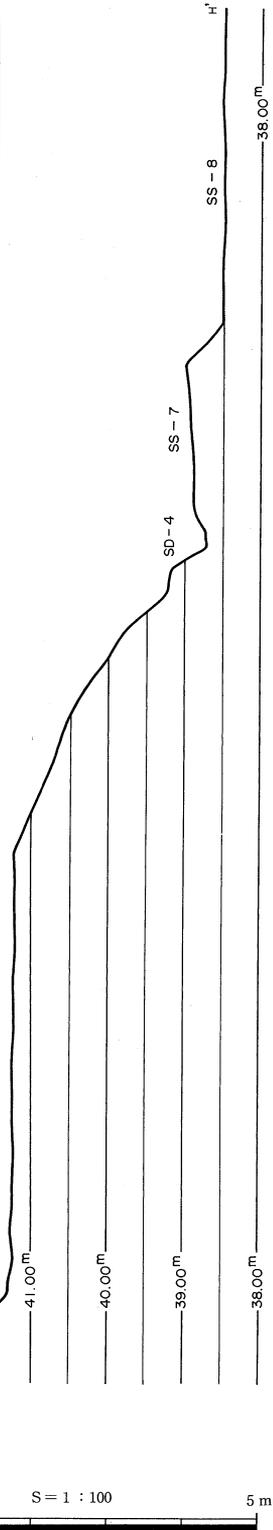
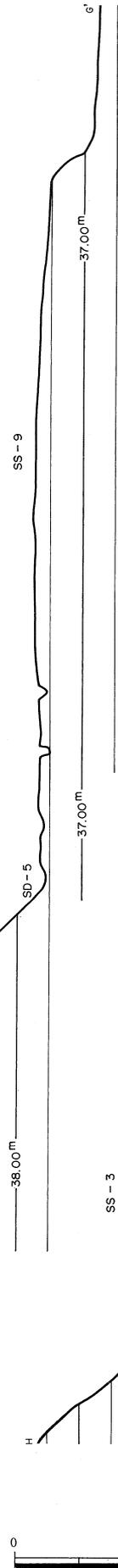
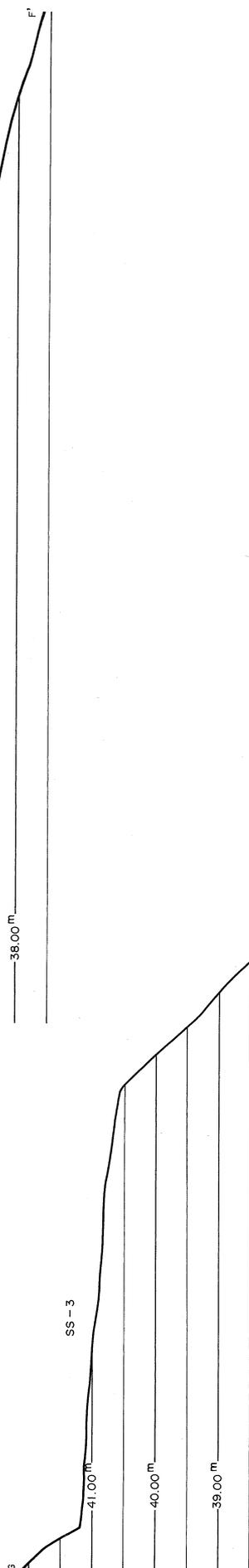
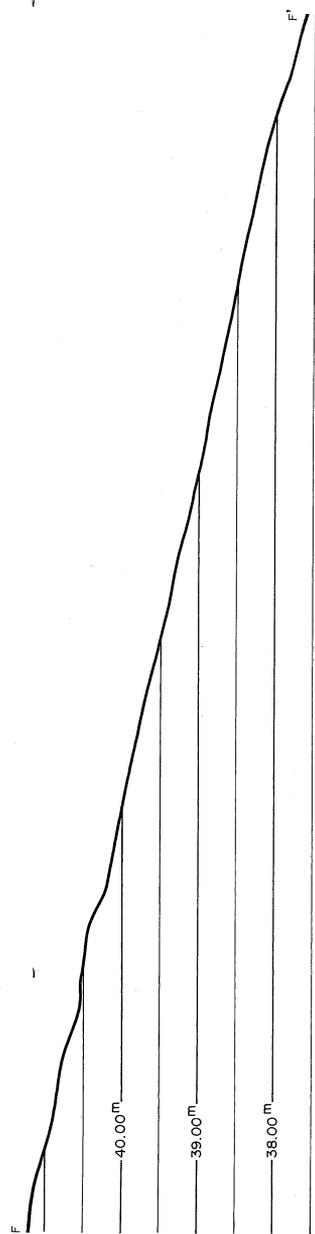
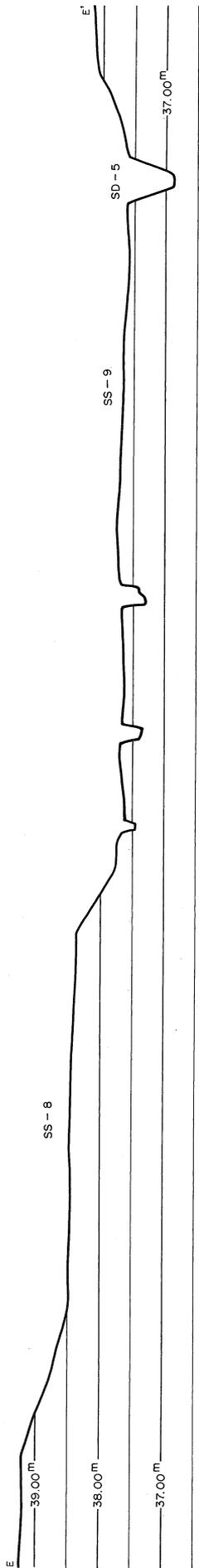
側面図



第99図 SK-2、3実測図



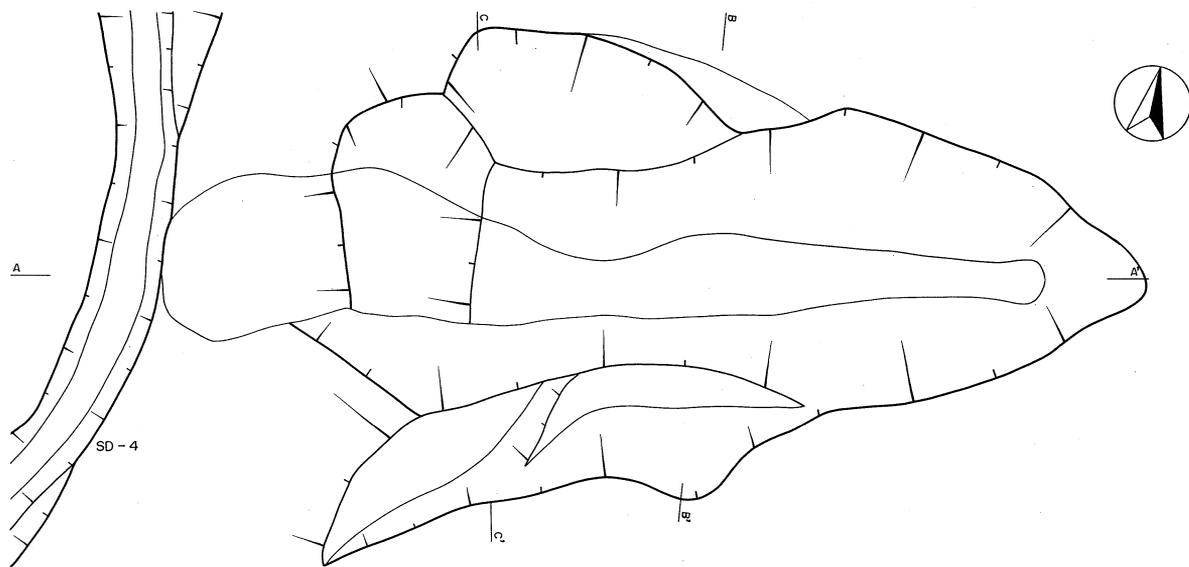
第100図 土塁状遺構、SD-2 実測図



第101图 SS-3、7~10断面实测图

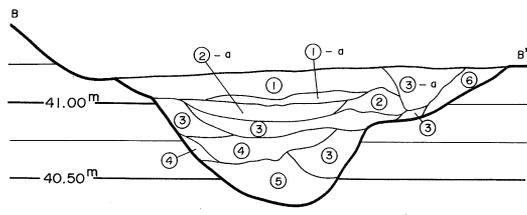
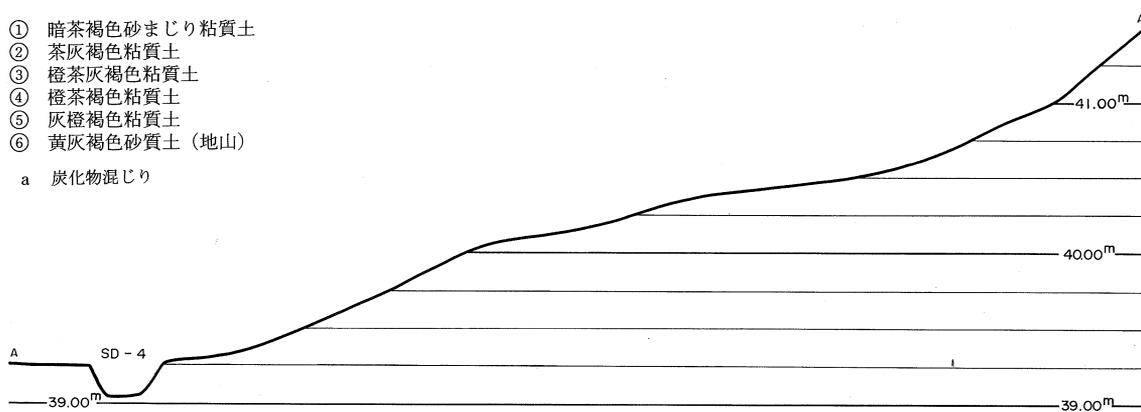


第102図 SS-3、7~10実測図

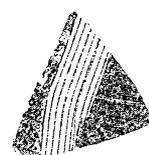
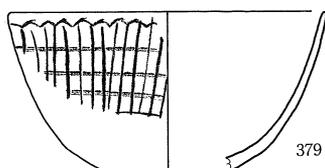
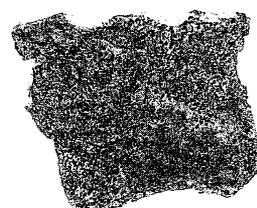
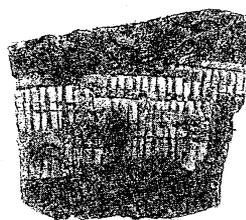
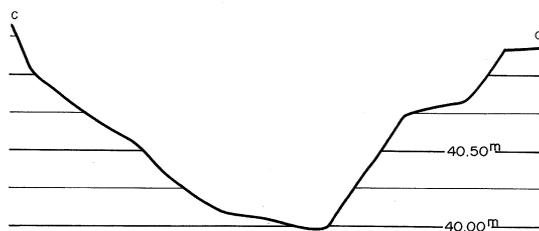


- ① 暗茶褐色砂まじり粘質土
- ② 茶灰褐色粘質土
- ③ 橙茶灰褐色粘質土
- ④ 橙茶褐色粘質土
- ⑤ 灰橙褐色粘質土
- ⑥ 黄灰褐色砂質土 (地山)

a 炭化物混じり

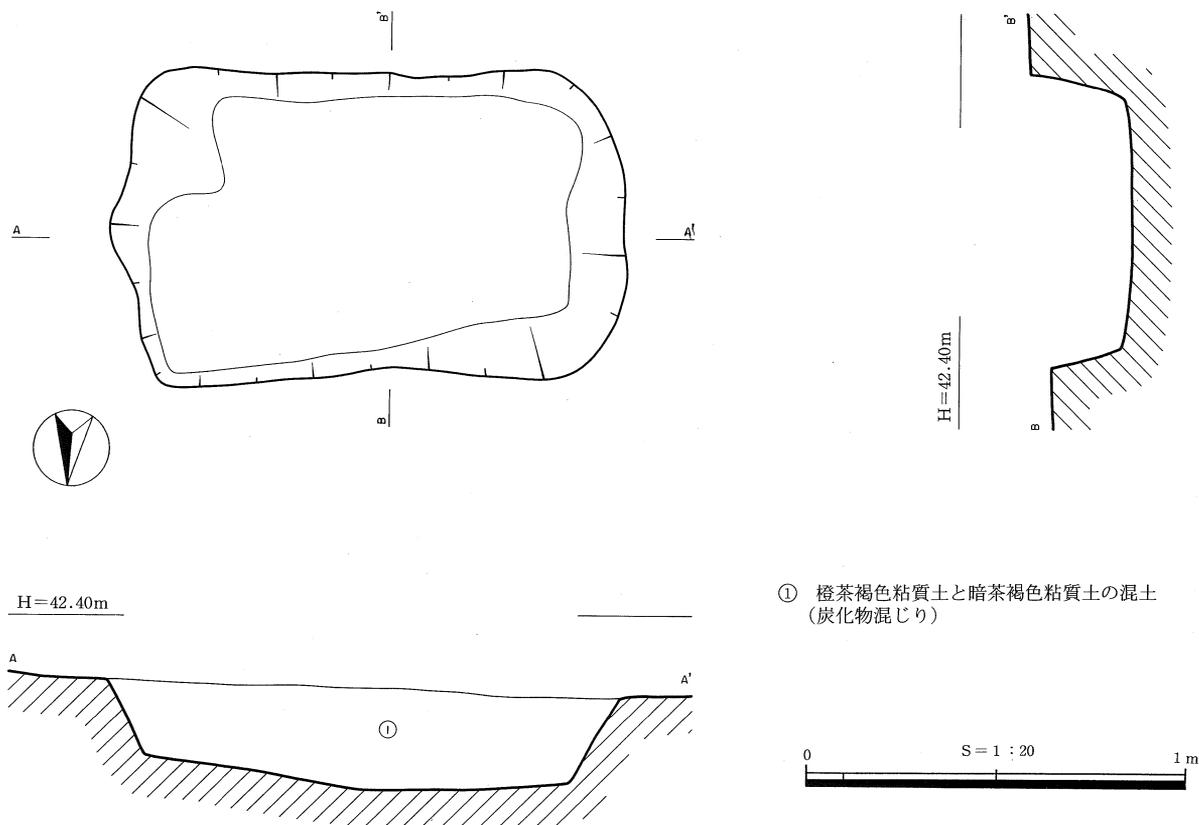


0 S = 1 : 50 2 m



0 S = 1 : 3 10cm

第103図 SD-3 実測図及び出土遺物実測図



① 橙茶褐色粘質土と暗茶褐色粘質土の混土
(炭化物混じり)

第104図 SK-4 実測図

・SS-1 (第92、93、96図・写真図版34)

cブロックの最高位、標高51~51.5mに位置する。上方の田住桶川遺跡の頂部との比高差は約14m、下方のSS-2との比高差は約5mとなる。南北21m、東西7mを測り、半月形状を呈する。後背には高さ約2.5mの崖面を削り出し、平坦な地山加工段の上に厚さ50cmの客土を施している。溝1条(SD-1)と柱穴状のピット10基(P. 1~10)を検出したが、客土層上面では掘り方を把握できず、客土層断ち割りによって断面で確認し、結局地山面で検出した。P. 2は2段掘りのピットだが、かろうじて方形の掘り方の半分を客土層上面で把握できた。第93図の断面図のピットの深さは、客土層上面からのものを表している。SD-1は、本来後背崖面裾部に走るものであったかもしれない。ピットの並びは判然としないが、P. 1とP. 2が対になりそうであり、P. 3~7が一直線上に並ぶ。遺物(第96図348~350)は客土層中から出土しており、349は地山加工段直上で検出された。348、350は土師質土器で、348は底部糸切りの小皿、350はこね鉢あるいは鍋である。349は唐津焼の天目碗で、17世紀前半に位置付けられるものである。

・SS-2 (第94、95、97~100図・写真図版34~36、46、47)

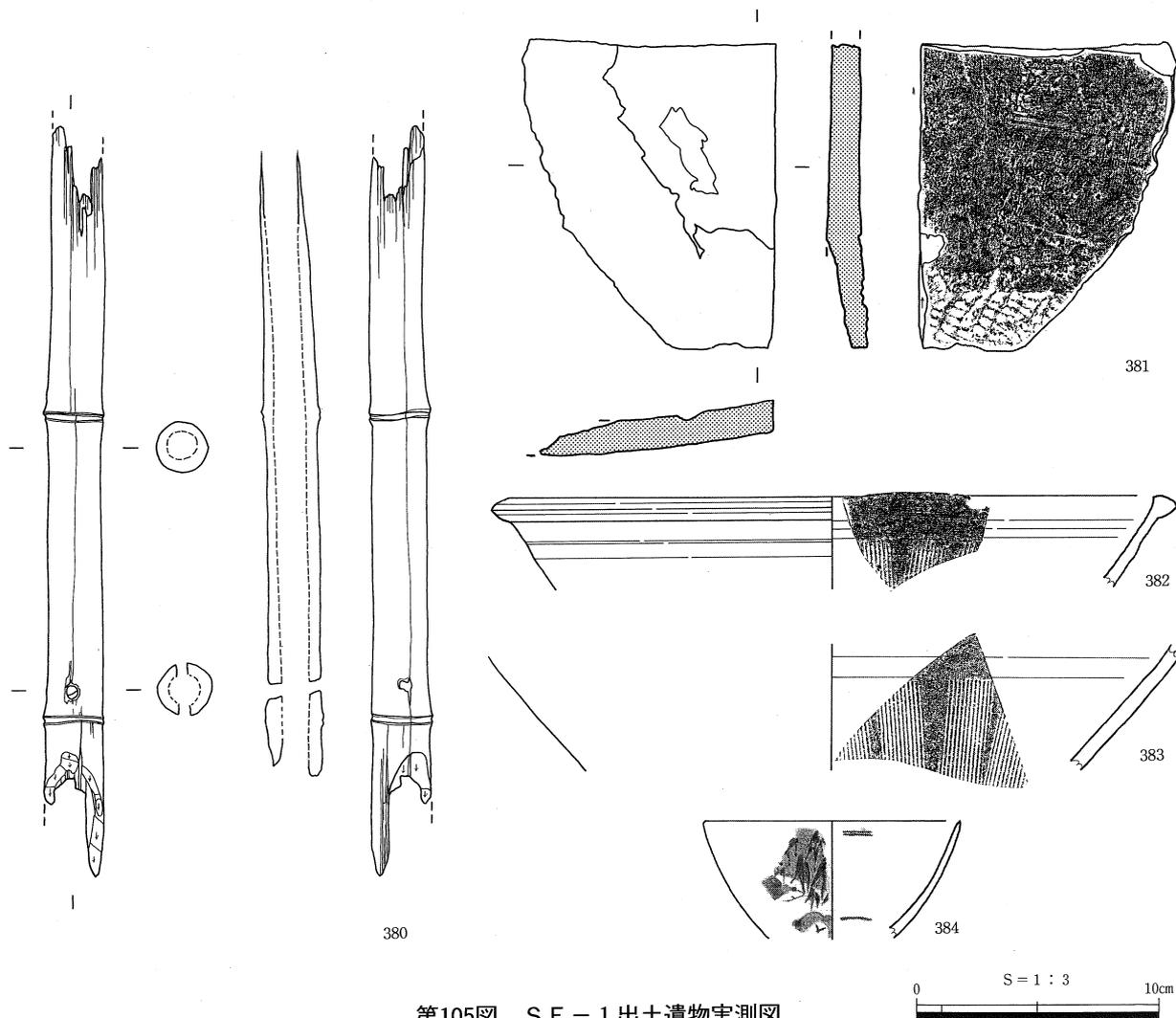
SS-1の下方に位置する。平坦面の標高は46~47mを測る。下方のSS-3との比高差は、約5mである。南側は調査地外に伸びており、テラス全体の約半分が検出されている。テラスは東側の後背部寄りが地山面であり、西側のSS-3寄りに客土して造成している。検出範囲は、南北14m、東西9mを測り、北側に土塁状遺構と溝(SD-2)が伸びる。後背崖面裾部には、SD-2に隣接して、土坑(SK-1)1基、崖面には2基の横坑(SK-2、3)が設けられている。テラスの南側には、集中的に柱穴状のピットがみられるが、建物の並びは判然としない。あえて言えば、深さ的にもP. 1~5のピットに規則的な並びを見いだせようか。ピット群からは、第96図351~370(写真図版47)の土器が出土した。351~367は土師質土器で、351~365は小皿、366、368は皿、367は坏である。底部に糸切りが確認できた個体は、351、352、354~362、365、368で、353、363、364、

367は判断できなかった。366は糸切り底ではなく、型抜きによるものか。351、352は口縁端部の一部に煤の付着がみられ、357、365は底部内面に炭化物が付着していた。354では外面に、366では内面に煤が付着しており、これら土師質土器の皿類は灯明皿として使用されたものが多い。369は瀬戸美濃の天目椀で、大窯のⅢ期（16世紀中～後葉）に比定される。370は19世紀前半の肥前系染付磁器の蓋で、天井部見込みに鷲をあしらっている。

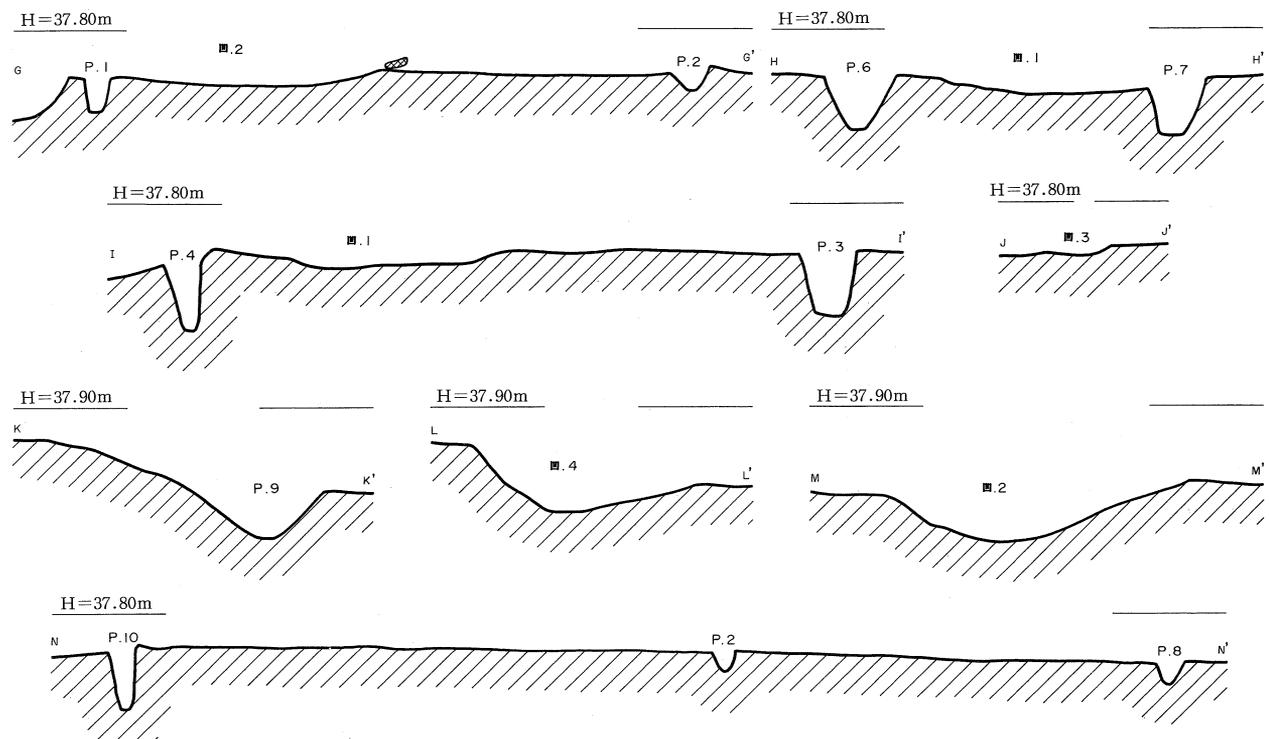
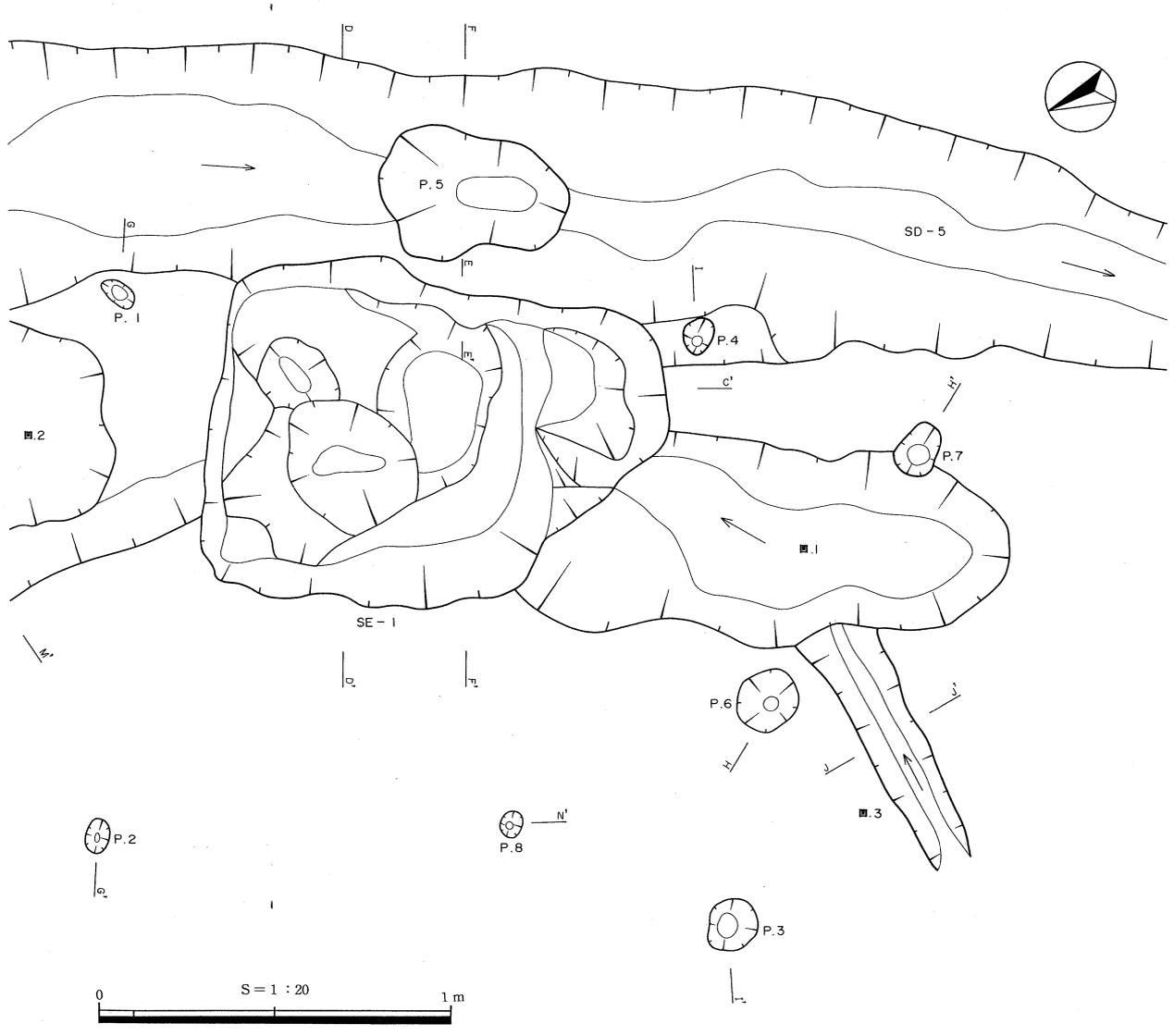
SK-1（第98図・写真図版35）は、東西1.8m、南北1.1mの不整な方形状を呈し、後背側の深さは、1mを測る。SD-2を僅かに切っている。土坑内に平石の割り石を重ねるように充填しており、中には長さ60cmを越えるような大型の礫も含んでいる。礫の下からは、鉄製品と須恵器片が1点ずつ出土した（第96図371、372・写真図版46）。371は、断面角形の棒状の鉄製品で、途中で左巻きにねじれている。遺存長26.1cm、断面径6mmを測る。372は須恵器の平底の底部である。

SK-2、3（第99図・写真図版35）は、近接して掘り込まれた大小2基の横坑で、上位に崖面が掘削され、SK-3側には棚状の平坦面が設けられている。共に上位奥側に溝がめぐり、横坑内壁面には焼成痕が認められることから、作り付けの竈と思われる。遺物の出土は無く、構築時期は不詳である。

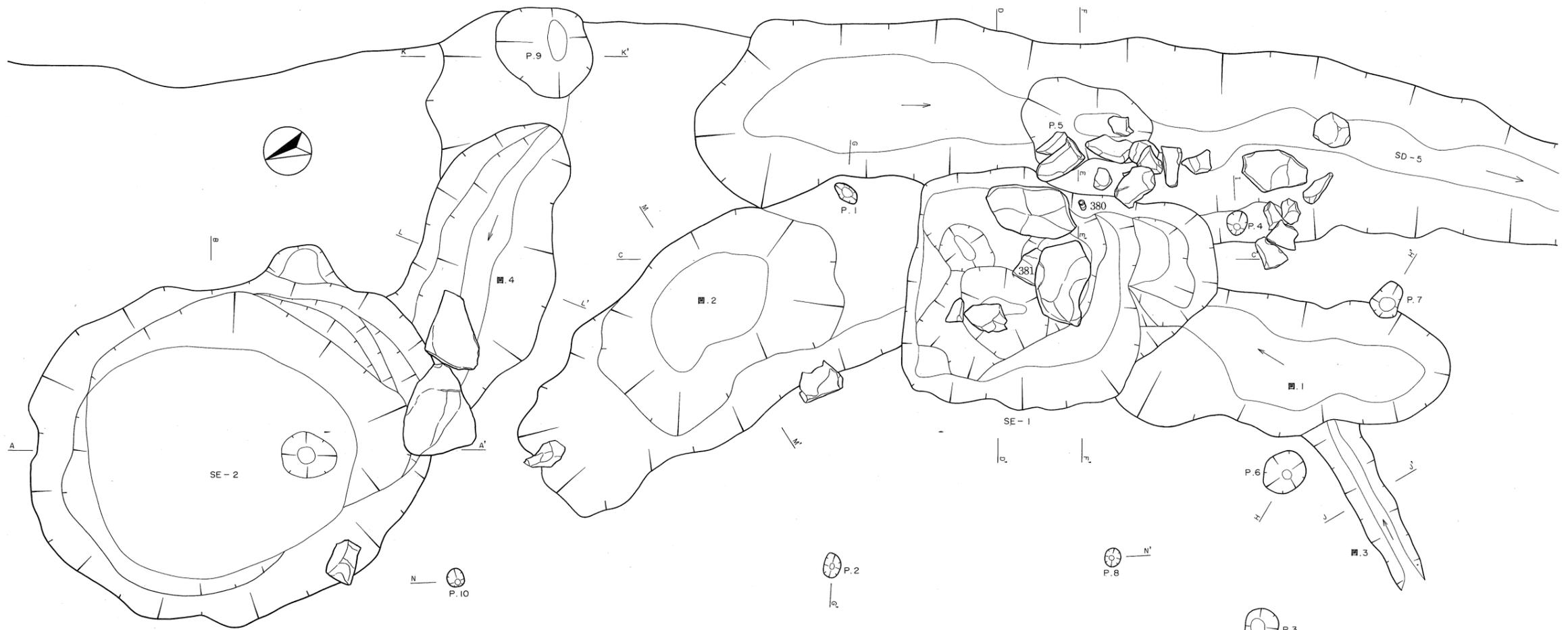
SD-2（第97、100図・写真図版35）は、北側丘陵裾部のSK-1と土塁状遺構に挟まれた地点に位置する。南北4.5mの長さを検出し、北方向へ続きが伸びる。土層断面によれば、東西の上端幅は1m以上になると思われ、SD-2は土塁状遺構を切り、SK-1によって切られている。溝底には2条の筋があり、北側で複雑に交錯している。その底のレベル差は丘陵側の筋が土塁状遺構側の筋に比して30～40cm高い。南北では、D-D'ライン3.6m区間で、45cmの高低差があり、南から北への流れが想定される。2筋間にレベル差があり、各々幅狭であることから道ではなく、いびつな形状は水流によって生じたものと想定され、よってこれを溝状遺構と判断した。



第105図 SE-1 出土遺物実測図



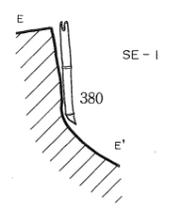
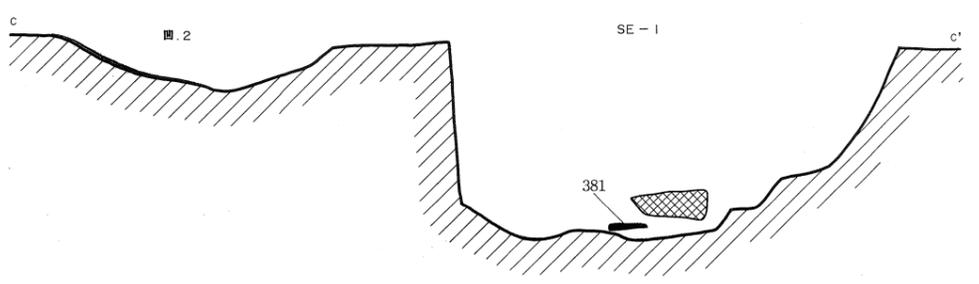
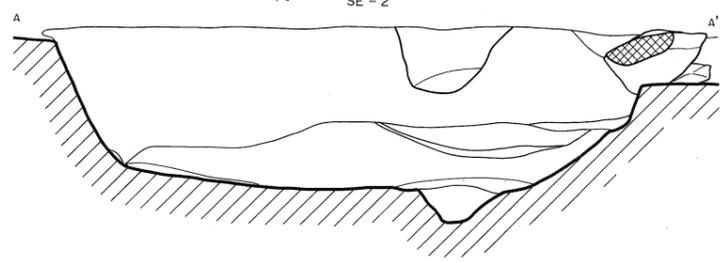
第106図 SE-1完掘状況実測図及び断面実測図



H=38.00m

H=38.00m

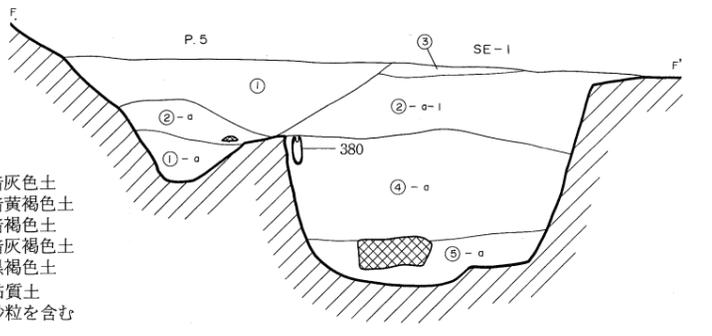
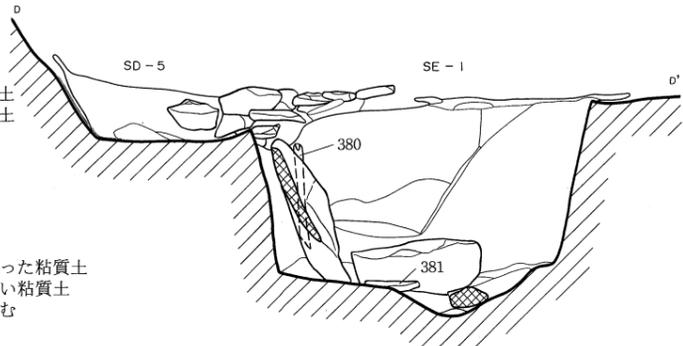
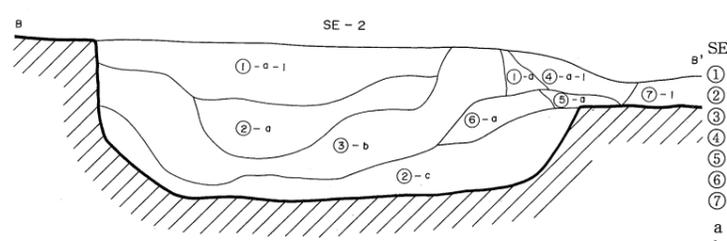
H=38.00m



H=38.00m

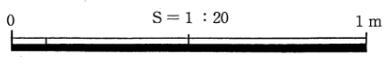
H=38.00m

H=38.00m



- SE-2
- ① 暗黄褐色土
 - ② 暗灰褐色土
 - ③ 黄褐色土
 - ④ 黒褐色土
 - ⑤ 黄色土
 - ⑥ 褐色土
 - ⑦ 暗褐色土
 - a 粘質土
 - b よく締まった粘質土
 - c 粘性の強い粘質土
 - 1 砂粒を含む

- SE-1
- ① 暗灰色土
 - ② 暗黄褐色土
 - ③ 暗褐色土
 - ④ 暗灰褐色土
 - ⑤ 黒褐色土
 - a 粘質土
 - 1 砂粒を含む



第107図 SE-1、2実測図

遺物は埋土中から出土し（第97図374）、374は土師質土器の小皿で、底部糸切りである。

土塁状遺構（第97、100図・写真図版36）は、外部からSK-1、SD-2を遮断するかのようになり、SD-2と並走して北側調査地外へ伸びていく。テラスの平坦面側では、切断されているかのように唐突に途切れる。東西下端幅6.4m、上端幅1.7m、高さは1.8mを測り、南北は4.2mの長さにわたって検出した。断ち割り断面によれば、旧表土（⑤層）上SD-2寄りに盛土され始め、30cmほど積んでから、主体は大きくSS-3側へ移行して、最終的に1.5mほど積まれることとなる。遺物は盛土中から出土し（第97図373）、373は土師質土器の小皿で、底部糸切りである。

・SS-3（第101～104図）

SS-2とSS-7～9の間で、SS-4と段続きになるテラスである。標高41～41.5mに位置する。下方のSS-7、9との比高差は、それぞれ約2.5mと約3.5mとなり、隣接するSS-4とは0.5mを測る。南北24m、東西7mを測り、平面形は半月形状に近い。溝状遺構1条（SD-3）と土坑1基（SK-4）を検出したが、他にピットを一切検出していない。SS-4との間には、下方からSS-3へと上る道と、SS-3から上方のSS-2と段続きになる部分へ上る道の2本が走る。

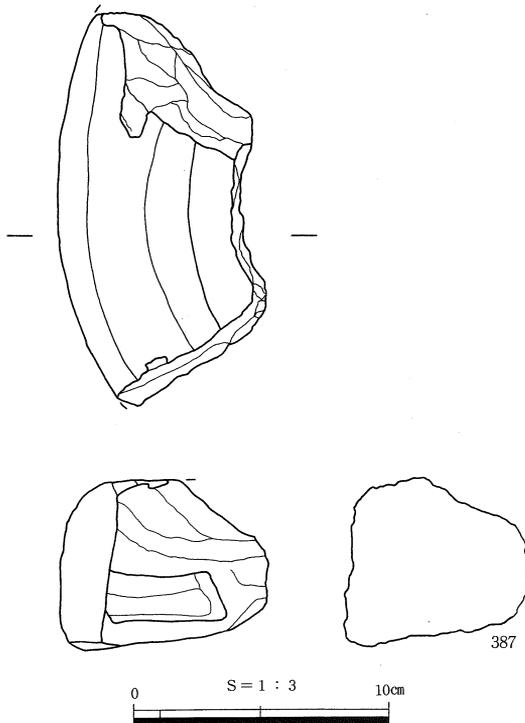
SD-3（第103図）は、テラスの北端に位置し、テラスに直交して東西方向に軸を採る。下段のSS-7方向に下がり、SD-4に至るが、SD-4と本来連結したものであったかは判断できなかった。東西長6.45m、南北最大幅3.5mを測る。東端上端と西端下端との比高差は2.25mで、溝底の傾斜角は17°である。埋土はかなり固く締まっており、長期にわたり徐々に堆積したものと思われる。遺物（第103図375～379）は、埋土中から出土した。375、376は土師質土器の小皿で、375の底部に糸切り痕が観察される。377、378は焼締陶器で、377は16世紀代の備前焼の播鉢である。378は越前焼の大甕で、16世紀代か。外面にタタキが観察される。379は16世紀前半の中国製青磁碗である。SD-3から出土した遺物には、夾雑物がなく、一括性の高い遺物である。概ね16世紀代に収まり、SD-3の時期を示す可能性もある。

SK-4（第104図）は、テラスの北側、SD-3の南に隣接する。隅丸長方形を呈する土坑で、東西1.35m、南北0.8m、深さ27cmを測る。埋土中に多量の炭化物を含んでいる。遺物は出土していない。

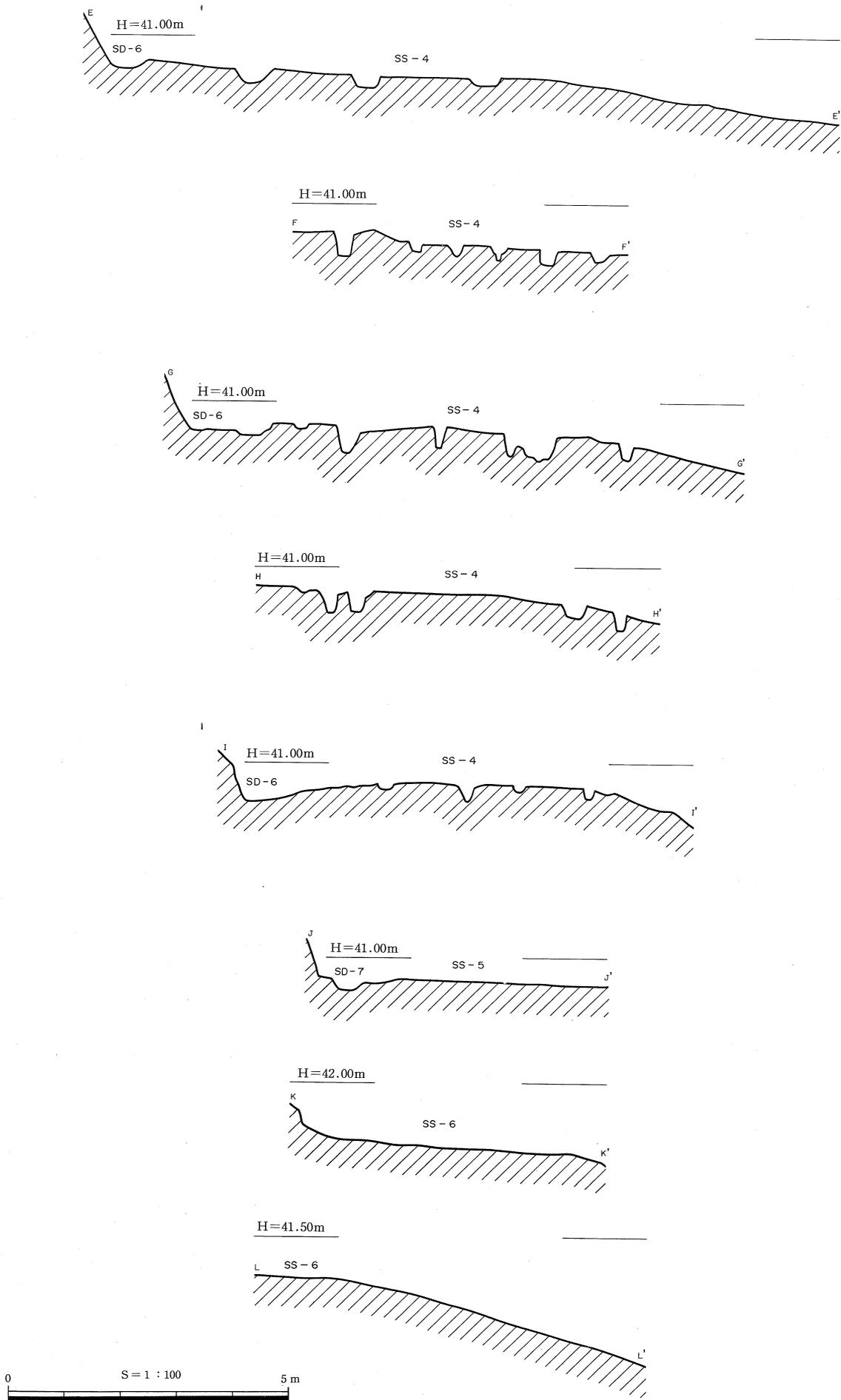


・SS-7～10（第101、102、105～107図・写真図版36）

SS-3の下方にあるテラス群である。SS-7からSS-10に向かって段が低くなる。SS-7は、SS-3の下方にあたる、狭長なテラスである。下方のSS-8とは約50cmの比高差がある。後背崖面裾部に溝SD-4が走り、溝底レベルから、北からSS-9方向の南に向かっての流れが判断される。SS-8は、過半が調査区外に広がるテラスで、下段のSS-9との比高差は約50cmを測る。SS-9は、SS-3の下段にあたる。下段のSS-10とは約80cmの比高差を測る。後背崖面裾部には、地形に沿って鍵形の溝SD-5が走り、北から南へ、途中で屈曲してさらに西へと下る。テラス上には柱穴状のピット群が広がるが、中には径5cm程度の極小のピットもある。建物を思わせるピットの並びは、把握できなかった。テラスの東端、崖面裾部寄りに2基の井戸を検出した。SE-1、2である。周囲には、いびつで微妙な浅いくぼみが見られ、凹1～4と名称をつけた。SS-10は最下段のテラスである。SS-9からSS-10にかけて黒色のシルト層が卓越しており、土壌は低湿である。SS-9は、SS-10側の段端部を黄褐色土の客土で造成している。



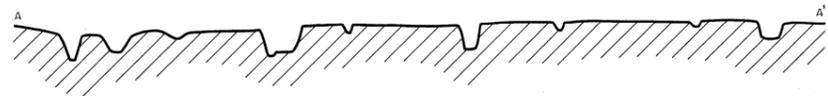
第108図 SS-4 出土遺物実測図



第109图 SS-4~6 断面实测图



H=42.00m



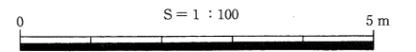
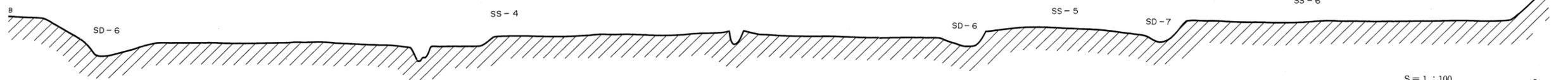
H=42.00m



H=42.00m



H=42.00m



第110図 SS-4~6実測図

SE-1 (第105~107図・写真図版36、37) は方形の井戸で、1辺はほぼ1mであるが、東南隅が30cmほど突出して段を設けている。底面には微妙に凹凸があり、中央部のくぼみから常に湧水している。井戸底部で35cm大の角礫、東壁にもたれるように40cm大の平石を検出した。井戸を構成する設備の名残と思われるが、本来的な在り方は判断できなかった。井戸の東側のP. 5上にも礫の散らばりをみたが、土層断面では井戸よりP. 5の方が後出であるので関連は薄いと思われる。井戸の周囲にはP. 1~8の微小なピットと深さの浅い微妙なくぼみ凹1~3がみられる。P. 1~4は、井戸の軸に沿ってほぼ方形に配列されており、井戸にまつわる何らかの建造物の痕跡と推測される。くぼみは、井戸際での水のこぼれや流れによって生じたものと判断され、凹1側と凹2側でそれぞれ頻繁に水がこぼれたことが窺われる。井戸を掘り下げ中、東南隅の壁に沿うように立つ1本の竹の管(第105図380・写真図版46)を検出した。先端が又状に鋭利に削られ、反対側は欠損している。中は節が抜かれ、貫通しており、尖る先端に近い方に、竹管を貫く小孔を穿っている。井戸に突き刺したものであり、井戸廃絶に際し、水神に対する「イキツキ竹」を立てたものと思われる(註7)。井戸の底部からは、瓦が1枚出土した(第105図381)。瓦質の平瓦である。また、埋土中からは鉄釉のかかる播鉢(382、383)、肥前系と思われる染付磁器の椀(384)が出土している。384は18世紀後半~19世紀前半に比定され、382、383は近代に下る。

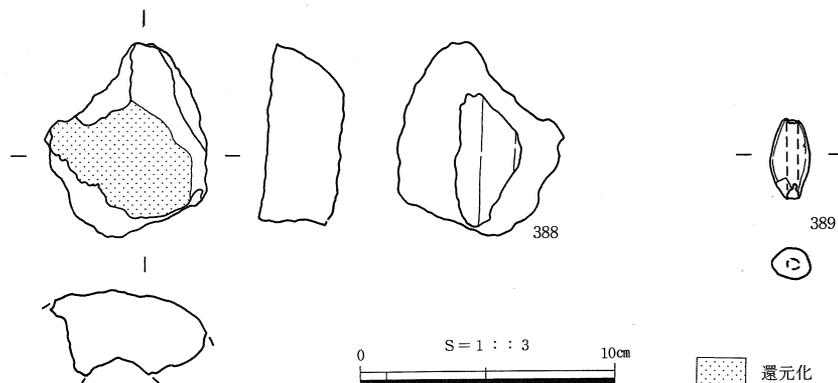
SE-2 (第107図・写真図版37) は、SE-1の北側に位置する。楕円形を呈し、南北1.69m、東西1.4m、深さ45cmを測る。底面南寄りにピットが1つ穿たれている。井戸の南側上端上で礫を検出した。また南東方向に伸びる溝状のくぼみ凹4を検出し、底面レベルによって、P. 9方面から井戸へ向かう下がりであることが判明した。断面図によれば、粘性の強い粘質土である②-c層が、よく締まった粘質土である③-b層を挟んで堆積しており、井戸の使用が2時期に区別される可能性がある。

・SS-4~6 (第108~110図・写真図版37)

SS-3の南東側に段続きになるテラス群である。SS-4は、後背に鍵形の溝SD-6が走り、ほぼ平坦なテラス上に柱穴状のピットが広がる。建物を思わせるピットの並びは把握できなかった。第108図385、386はピットの埋土中の出土で、底部糸切りの土師質土器の小皿である。387はテラスからの出土で、黒雲母角閃石石英安山岩製の石臼である。SS-5はSS-4より15cm高いテラスで、後背に鍵形の溝SD-7が走る。SS-6はSS-5より30cm高く、後背に溝をもたないテラスである。南側には、下方へ向かう道状の斜面が伸びている。

・遺構外出土の遺物 (第110図・写真図版47、48)

原位置を保たないで出土した遺物である。388は轆の羽口片で、表面が還元焼成されている。389は土錘である。また、当調査地内では、表土上に多数の陶磁器の散布がみられた。当遺跡に伴うものではなく、他所から廃棄されてきたものである可能性が高いため、深くは触れないこととするが、参考までにいくつか写真を掲載しておく(写真図版47、48)。392、394は瀬戸系と思われる陶器、393は中国産の天目椀である。395は瀬戸の大窯Ⅲ期で、16世紀後半に相当する陶器皿である。396は中国地方に多くみられる陶胎染付の椀で、18世紀頃に比定され、産地は不詳である。397は15世紀代に比定される中国産の青磁椀である。398~405は、染付磁器である。400~402は肥前系で、400には割れ口に補修痕が残る。こんにやく印判による染付で、18世紀後半に比定される。401は18世紀代の皿、402は18世紀後半の皿である。



第111図 遺構外出土遺物実測図

第4節 小結

墳墓についての検討は次章の考察に委ねるとして、ここでは両遺跡の関係性について述べてみたい。田住桶川遺跡は18世紀代の墳墓群を擁する遺跡であるが、これら墳墓は客土層の上に成立している。この整地がいつ行われたのかは確定的要素に欠け判然としないが、古式土師器が検出されたサブトレンチT-1において、下層から16世紀代の越前の大甕が出土しており、この時期が造成の時期の上限に充てられると、前節で述べた。調査地内では16世紀以降において、18世紀代の墳墓以外に遺構は検出されておらず、この造成が造墓に先立つ整地作業であったという仮説が成り立つ。

もう少し、造成から造墓開始にいたる時間的離隔を長く取る仮説を立ててみたい。つまり、越前の大甕の時期、16世紀代に近い時期に造成時期を遡らせてみる。この場合、眼を田住第8遺跡の方に転じてみる必要がある。田住第8遺跡の各遺構については、状況証拠的にしか時期を推し量れない。時期決定に係る要素を列挙してみよう。

まず、SS-1の客土については、同層中の遺物より17世紀前半を遡らないといえる。しかしテラス開削の時期は、それより遡る可能性もある。SS-2については、ピットの検出面から、16~19世紀の遺物が出土しているが、時期を決定し難い。SK-1~3、SD-2、土塁状遺構についての構築時期は、中世以降としか判断できない。SS-3~6は時期決定できる確定的な要素がなく、表採された陶磁器類に15~18世紀のものがみられるが、この遺跡との関係に疑念のもたれる遺物である。唯一、SD-3の遺物に一括性が望めそうである。16世紀代を示しているが、溝の時期に直接結びつけるには早計である。SS-7~10についても、時期決定を確定し難いが、近世、近代の遺物が散布していた。

『文政六年會見郡住吉村地續繪圖面帳』(註8)によれば、少なくとも文政6年(1823年)時点での状況が明らかになる。第117図に一部抜粋を掲載した。「六 阿さ名 表屋敷」の条である。これによると、SS-3付近は2筆の畑であり、SS-7~10付近は2筆の水田、SS-4~6付近は「堂」とみえる。この絵図面からは、①SS-1、2について何ら記述がない、②SS-3は畑地、SS-7~10は水田であった、③SS-4~6には「堂」が建っていた、④調査によって確認されたSS-3~10の段状地形はすでに成立していた、の4点について確認できる。SS-4~6の「堂」がいかような建物か不詳だが、ピット群の存在と合致する事象ではある。

この絵図面に記載がない事からについては、記述漏れか、文政6年以前か、以後かのいずれかであろう。たとえばSE-1は明らかに以後であろう。しかし、SS-1、2については、その大がかりな造成振りから、排出されるはずの大量の土砂の処理を慮るに、下方の段状地形に影響を与えないのは不自然なことである。文政6年時点と現状とで地形が概ね合致するのであれば、SS-1、2は、文政6年以前の所作と考えるのが自然であろう。調査で散見された16世紀代の遺物が、これらの造成の時期を示すと考えたい。つまり、田住桶川遺跡において想定した造成時期に合致することとなる。

16世紀代の旧會見郡といえ、調査地と小松谷川を挟んで対岸にそびえる要害山に築かれた手間要害を取り巻く、尼子と毛利の攻防の舞台である。調査地に当該期の遺構が存する蓋然性は高い。この造成が、要害建設等軍事的色彩の強いものであった可能性を提示し、併せて、要害山に対峙する越敷山系側にも、同様な遺構が存在する可能性を提起しておきたい。

註1 『會見町誌』 會見町誌編さん企画委員会編 會見町 1973年

註2 雲光寺住職瀬田光範氏のご高配により、判明した。

註3 『會見町内所在遺跡試掘調査報告書』 會見町教育委員会 1994年

註4 『青木遺跡発掘調査報告書』Ⅲ 青木遺跡発掘調査団 1978年

註5 大橋雅也 「9 器台形土器」『吉備の考古学的研究』(上) 近藤義郎編 山陽新聞社 1992年

註6 古泉弘 「江戸の街の出土遺物—その展望」『季刊考古学』第13号 雄山閣 1985年

註7 坂田友宏 「井戸神信仰—屋敷神研究の一視点—」『神◆鬼◆墓』—因幡・伯耆の民俗学研究— 1995年

遺構一覽表

◎墳墓域(田住桶川遺跡)

・土墳墓							
遺構名	平面形態	長辺-短辺-深度		主軸方向	出土遺物	備考	
SK-1	長方形	2.27 -0.98-0.17		N-75° -E	-		
SK-2	橢円形	1.06 -0.76-0.18		N-19° -E	-	小児墓?	
SK-3	橢円形	1.04 -0.50-0.33		N-72° -W	-	小児墓?	
SK-4	円形	0.69 -0.55-0.30		N-87° -W	-	小児墓?	
SK-5	橢円形	1.07 -0.57-0.23		N-82° -W	-	小児墓?	
SK-7	長方形	(2.34)-0.90-0.41		N-87° -E	-		
SK-8	隅丸長方形	2.23 -1.15-0.45		N-85° -E	弥生土器甕		
SK-10	長橢円形?	1.53 -0.84-0.48		N-1° -E	-	SK-11を切る	
・木棺墓							
遺構名	平面形態	墓壇規模		長辺-短辺-深度	主軸方向	出土遺物	備考
		墓壇規模	長辺-短辺-深度				
SK-6	隅丸長方形	墓壇	(0.98)-0.79-0.32	N-78° -E	-	-	2段掘り 小児墓?
		木棺	0.72 -0.17-0.15				
SK-9	隅丸長方形	墓壇	1.40 -0.89-0.37	N-79° -W	-	-	小口穴あり
		木棺	0.91 -0.43-0.33				
SK-11	長方形	墓壇	2.79 -1.50-0.78	N-81° -W	土器片	-	小口穴あり SK-10に切られる
		木棺	1.89 -0.59-0.61				
SK-12	長方形	墓壇	2.35 -0.92-0.62	N-76° -W	-	-	小口穴あり
		木棺	1.57 -0.55-0.35				
SK-13	長方形	墓壇	2.46 -0.99-0.85	N-84° -W	-	-	小口穴あり
		木棺	1.57 -0.54-0.43				
SK-14	長方形	墓壇	2.96 -1.87-0.80	N-76° -E	-	-	2段掘り
		木棺	2.24 -0.42-0.57				
・石棺墓							
遺構名	平面形態	墓壇規模		長辺-短辺-深度	主軸方向	出土遺物	備考
		墓壇規模	長辺-短辺-深度				
SK-15	隅丸方形	墓壇	0.88 -0.69-0.22	N-3° -E	-	-	頭位南?、小児墓?
		石棺	0.53 -0.26-0.28				
SK-16	隅丸長方形	墓壇	0.96 -0.51-0.15	N-12° -E	鉄刀1 鉄製品1	-	頭位南?、小児墓? 底面敷石
		石棺	0.81 -0.22-0.19				
SK-17	隅丸方形?	墓壇	1.25 -0.73-0.31	N-14° -E	-	-	頭位南?、小児墓?
		石棺	0.90 -0.42-0.33				
SK-18	隅丸長方形	墓壇	1.29 -0.69-0.27	N-11° -W	-	-	頭位北?、小児墓?
		石棺	0.87 -0.30-0.26				

◎集落域（田住第8遺跡）

・テラス状遺構					
遺構名	標高	長さ－幅	検出遺構		出土遺物
SS-1	51.0～51.5	21.0－7.0	溝1、ピット群		土師質土器、唐津天目
SS-2	46.0～47.0	(14.0)－9.0	土塁状遺構1、土坑3、溝1、ピット群		土師質土器、肥前磁器 瀬戸美濃天目
SS-3	41.0～41.5	24.0－7.0	土坑1、溝1、道		－
SS-4	40.0～40.5	18.0－7.0	溝1、ピット群		土師質土器、石臼
SS-5	40.5～40.8	3.5－4.0	溝1、ピット1		－
SS-6	41.0	8.0－4.5	道		－
SS-7	39.0～39.5	(11.5)－3.0	溝1		－
SS-8	38.5	(12.5)－(7.5)	－		－
SS-9	37.5～38.0	10.5－11.0	溝1、井戸2、ピット群		－
SS-10	36.7	(9.0)－(5.0)	－		－
・土塁状遺構					
位置	長さ－上端幅－下端幅－高さ		出土遺物	備考	
SS-2	(4.2)－1.7－6.4－1.8		土師質土器	SD-2に切られる	
・土坑					
遺構名	位置	平面形態	長辺－短辺－深度	出土遺物	備考
SK-1	SS-2	不整形	1.80－1.10－1.00	鉄製品1、須恵器片	礫充填、SD-2を切る
SK-2	SS-2	楕円形	0.55－0.40－0.57	－	竈？
SK-3	SS-2	不整形	0.76－0.75－0.81	－	竈？
SK-4	SS-3	隅丸長方形	1.35－0.8－0.27	－	
・井戸					
遺構名	位置	平面形態	長辺－短辺－深度	出土遺物	備考
SE-1	SS-9	方形	1.25－0.98－0.58	瓦、竹管、鉄釉播鉢、肥前磁器	礫、「イキツキ竹」
SE-2	SS-9	楕円形	1.69－1.40－0.45	－	2時期？
・溝					
遺構名	位置	長さ－幅－深度	出土遺物	備考	
SD-1	SS-1	(3.1)－0.4－0.3	－		
SD-2	SS-2	(4.5)－(1.0)－0.60	土師質土器	土塁状遺構を切り、SK-1に切られる	
SD-3	SS-3	6.45－3.5－2.25	土師質土器、備前播鉢、越前大甕、青磁椀		
SD-4	SS-7	(12.9)－0.6－0.2	－		
SD-5	SS-9	(12.0)－0.8－0.1	－		
SD-6	SS-4	29.5－1.4－0.2	－		
SD-7	SS-5	7.5－1.0－0.2	－		

- 1) 近世墓の一覧については、第6章第3節に掲載した。
- 2) 計測値の単位は、すべてmである。() 付きの数値は、遺存長または検出長を示す。
- 3) 木棺墓の木棺規模については、長辺－両小口穴内側上端間の距離、短辺－土層横断面側板痕間の距離、深度－土層横断面側板痕の高さをそれぞれ計測した。
- 4) 石棺墓の石棺底面については、深度は、側板の最高位から床面までの距離をもってあてた。